

(論文 様式)

ラグビーチームにおける集合的効力感と集団凝集性：
試合の出場機会および異なる教育段階と
将来の勝敗との関連

スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻

学籍番号

214D06

氏 名

辰見 康剛

研究指導

土屋 裕睦 教授

目次

第1章 序論

1.1 研究背景.....	6
1.1.1 スポーツにおける集合的効力感と集団凝集性.....	6
1.1.2 集合的効力感と集団凝集性の概念.....	7
1.1.3 集合的効力感と集団凝集性に関する先行研究の課題.....	10
1.1.3.1 欧米と本邦における比較.....	10
1.1.3.2 試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連.....	10
1.1.3.3 異なる教育段階と集合的効力感および集団凝集性との関連.....	11
1.1.3.4 将来の試合における勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連.....	12
1.2 本研究の目的と意義.....	13
1.2.1 本研究の目的.....	13
1.2.2 本研究の意義.....	13
1.3 質問紙ならびに評価尺度と分析方法.....	14
1.3.1 質問紙の構成とフェイスシート.....	14
1.3.2 集合的効力感の評価尺度.....	15
1.3.3 集団凝集性の評価尺度.....	18
1.3.4 分析方法.....	21
1.4 本研究の対象者.....	21
1.5 本研究の構成.....	22
1.6 本研究に用いた用語.....	24

第2章 試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連

2.1	はじめに.....	26
2.2	方法.....	27
2.2.1	調査内容および対象と時期.....	27
2.2.1.1	質問紙調査.....	27
2.2.1.2	インタビュー調査.....	28
2.2.2	倫理的配慮.....	32
2.2.3	分析方法.....	32
2.3	結果.....	33
2.3.1	CEQSの内的整合性.....	33
2.3.2	GEQの内的整合性.....	35
2.3.3	試合の出場機会および時期と集合的効力感との関連.....	37
2.3.4	試合の出場機会および時期と集団凝集性との関連.....	39
2.3.5	集合的効力感に関する内省報告.....	41
2.3.6	集団凝集性に関する内省報告.....	43
2.4	考察.....	44
2.4.1	試合の出場機会および時期と集合的効力感.....	44
2.4.2	試合の出場機会および時期と集団凝集性.....	47
2.5	まとめ.....	49

第3章 異なる教育段階と集合的効力感および集団凝集性との関連

3.1	はじめに.....	52
3.2	方法.....	52
3.2.1	調査内容と時期.....	52

3.2.2 対象者.....	53
3.2.3 倫理的配慮.....	55
3.2.4 分析方法.....	55
3.3. 結果.....	55
3.3.1 CEQS の内的整合性.....	55
3.3.2 GEQ の内的整合性.....	57
3.3.3 異なる教育段階と集合的効力感との関連.....	59
3.3.4 異なる教育段階と集団凝集性との関連.....	62
3.4 考察.....	64
3.4.1 異なる教育段階と集合的効力感.....	64
3.4.2 異なる教育段階と集団凝集性.....	65
3.5 まとめ.....	66

第4章 将来の勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連

4.1 はじめに.....	69
4.2 方法.....	69
4.2.1 調査内容と時期.....	69
4.2.2 対象者.....	70
4.2.3 倫理的配慮.....	73
4.2.4 分析方法.....	73
4.3 結果.....	73
4.3.1 CEQS の内的整合性.....	73
4.3.2 GEQ の内的整合性.....	75
4.3.3 高校生における将来の勝敗と集合的効力感との関連.....	77

4.3.4	大学生における将来の勝敗と集合的効力感との関連.....	79
4.3.5	高校生における将来の勝敗と集団凝集性との関連.....	81
4.3.6	大学生における将来の勝敗と集団凝集性との関連.....	83
4.4	考察.....	85
4.4.1	高校生と大学生における将来の勝敗と集合的効力感.....	85
4.4.2	高校生と大学生における将来の勝敗と集団凝集性.....	87
4.5	まとめ.....	87
第5章 総括と今後の展望		
5.1	本研究のまとめ.....	90
5.2	実践への示唆.....	92
5.3	本研究の限界と今後の展望.....	93
	文献.....	94
	資料.....	104
	謝辞.....	133

第 1 章

序論

1.1 研究背景

1.1.1 スポーツにおける集合的効力感と集団凝集性

競技スポーツにおける主要な目的は試合で勝つことである。そのため、競技スポーツに携わる者にとって、ピークパフォーマンスの発揮は最も関心の高まるテーマのひとつであろう。ピークパフォーマンスを発揮するためには技術や体力以外に心理的な要因も求められる（中込, 2016；関矢, 2016；寺田ほか, 1996）。また、心理的な要因は個人だけではなく、個人の集まりである集団という観点からも示されている（蓑内, 2013；蓑内・梶山, 2015）。興味深い点として、チームスポーツにおいては個々の競技レベルが高いチームよりも個々の競技レベルが低いチームの方がチームとして高いパフォーマンスを発揮することがあり（Carron and Eys, 2012），このような例はチームワークなどの集団としての心理的な要因による影響が強いと示唆されている（ハガー・ハヅィザランティス, 2007）。したがって、チームという集団としてのピークパフォーマンスを発揮するためには、如何にして心理的な要因による望ましい影響をもたらすかが重要であるといえる。

阿江（1987）や持田ほか（2015）はプレー中にメンバー間の相互作用の機会が少ない競技（野球やソフトボール等）よりも、相互作用の機会が多い競技（サッカーやバレーボール等）の方が、個人の心理状態がチームとしてのパフォーマンスの発揮に影響を与えやすいと報告した。本研究では、相互作用の機会が多い競技種目の中でもラグビーに注目することとした。ラグビーは相互作用の機会が多いことに加え、キャプテンの位置づけを重視するという点や、フィールドプレーヤーが 15 人と多くポジションの役割が分化しているという特徴から、個人の心理状態が集団の心理に反映されやすい競技であると主張されている（Hodge et al., 2005, 2014；蓑内・梶山, 2015）。また、Hodge et al.（2014）はラグビーにおける主要な集団心理として、リーダーシップやコミュニケーションに基づく有能感とまとまりによる一体感の存在を報告している。つまり、ラグビー

は特に個人と集団の心理状態が密接な関係にあり、それぞれが相互に作用しやすい競技であるといえる。2019年に行われたラグビーワールドカップ日本大会において、日本代表が ONE TEAM のスローガンのもとに過去最高のベスト 8 への進出を果たしたのは、その最たる例かもしれない。このように、ラグビーチームに注目することで、ラグビーのみならずスポーツ競技全体において、集団の有能感やまとまりによる一体感に基づく集団心理を検討する際の有効な手段を提案することができると考えた。

1.1.2 集合的効力感と集団凝集性の概念

集団構成員の所属先に対する有能感を示す概念として、集合的効力感が知られている (Bandura, 1982)。集合的効力感とは、自身の行動達成に対する確信を表す自己効力感 (Bandura, 1977) を集団レベルに拡大した概念である (Feltz et al., 2007)。ただし、集合的効力感とは各構成員の自己効力感の単なる総体ではなく、集団の相互作用によって獲得された集団に共有された信念である (Bandura, 1997)。Bandura (1997) は、集合的効力感について“ある目標を達成するために必要な行動を体系化し、実行する統合的な能力に関する集団で共有された信念”と定義した。また、Short et al. (2005) は“特定の目標や基準に関連した、スポーツ課題の達成や集団の行動を生み出すためのチームの能力について、チームに共有された自信”と示した。その他、内田ほか (2011) は、「我々は集団として課題に取り組むことができる」といった成員間で共有される集合的な有能感である」と述べた。これらをまとめると、集合的効力感とは課題達成に対する集団の構成員間で共有される集合的な自信と解釈できる。具体的には、「我々は高いパフォーマンスを発揮することができる」あるいは「我々は相手チームに勝つことができる」といった所属チームに対する自信となる。

集合的効力感とは集団の課題達成に向けて構成員が発揮する努力量 (Chow and Feltz, 2008) や、失敗もしくは困難な出来事に直面したときの忍耐力 (Bandura, 1997) に影響

を及ぼし、将来の集団のパフォーマンスと正の関連を有することが示唆されている (Feltz and Lirgg, 1998 ; Gully et al., 2002) . また、集合的効力感に影響を及ぼす要因として、事前の集団のパフォーマンスや試合の結果が報告されている (Stajkovic et al., 2009 ; 内田ほか, 2011) . 例えば、Feltz and Lirgg (1998) はアイスホッケーを行う 6 チームを対象に試合の勝敗と集合的効力感との関連を検討した. その結果、勝利したチームの集合的効力感が高まり、敗れたチームの集合的効力感は低下したことを明らかにした. 他には、効果的なミーティングを行うことで集団の集合的効力感のばらつきが減少し、集団全体の値が高まったこと (小林ほか, 2016) や、集団内における指導者からの働きかけが集合的効力感に影響を及ぼすことが明らかとなっている (Jowett et al., 2012) . 以上から、集合的効力感は特性的なものではなく、環境や情報により変化しやすい状態的な概念であるといえる (Bandura, 1997 ; Chow and Feltz, 2008) .

一方、集団構成員のまとまりやチームワークを示す概念として、集団凝集性が知られている (Carron, 1982 ; Carron et al., 1985) . 集団凝集性について、Carron (1982) は“同一チームに所属するメンバー間でお互いに引き合う魅力を維持し、チームを分裂させる力に抵抗する社会的な力”と定義した. また、亀田 (1999) は「メンバーを自発的に集団にとどまらせる力の総体」と定義した. その他、この概念について、阿江 (1985a) は「対人魅力による凝集」と「所属・課題による凝集」の 2 つの因子から構成されていると論じた. さらに、筒井・土屋 (2016) も同様に集団の仲間との情緒的な繋がりとして「社会凝集性」、集団の目標達成のための凝集として「課題凝集性」という 2 つの構成因子を示した. このことから、集団凝集性は集団の構成員間における社会的な凝集と、集団に課せられた課題に対する凝集の 2 つの側面から成り立つと解釈できる. なお、社会凝集性には、集団内の構成員間における親密さやリーダーシップとの関係が反映され、課題凝集性には集団に課せられた課題・目標に対する魅力の程度や、その課題・目標に対する集団の取り組みへの評価が反映される.

集団凝集性の高まりも集団の課題達成に貢献することが先行研究によって示唆されている。例えば Prapavessis and Carron (1997) は、酸素摂取量を努力量の指標とし、集団凝集性の低い者と比べると高い者の方が練習中に費やす努力量が高いことを明らかにした。他には、集団凝集性の高まりが所属する集団への献身的な行動を促進すること (Stevens and Bloom, 2003) や、将来の集団のパフォーマンスと正の関連を有することが示唆されている (阿江, 1987 ; Carron et al., 2002) 。また、集団凝集性に影響を及ぼす要因として、事前の集団のパフォーマンスや試合の結果が報告されている (Carron et al, 2002 ; Senecal et al., 2008) 。他には、ミーティングの実施に伴い、構成員間の交流を増やすこと (松竹ほか, 2018) や、指導者から選手への動機づけをする機会を増やすこと (村瀬・安部, 2014) が集団凝集性の高まりに貢献すると示されている。以上から、集団凝集性も特性的なものではなく、状態的な概念であるといえる (阿江, 1985a ; Kozub and Button, 2000) 。

ここまで述べたように集合的効力感および集団凝集性はスポーツ集団のパフォーマンスを規定する重要な概念であるといえる。他にも集団のパフォーマンスに影響を及ぼし得る概念として、チームメンタルモデル (Cannon-Bowers et al., 1990) や組織市民行動 (Organ, 1988) が知られている。しかし、これらの概念が集合的効力感や集団凝集性と正の関連を有する可能性について言及されているものの (河津ほか, 2012a ; 持田ほか, 2016) , 直接的にチームメンタルモデルや組織市民行動とスポーツ集団のパフォーマンスとの関連を検討した報告は少ない。したがって、スポーツ集団のパフォーマンスとの関連を検討する際には、過去の多くの検討に用いられており、信頼性を有する集合的効力感および集団凝集性を用いることが妥当であると考えた。

1.1.3 集合的効力感と集団凝集性に関する先行研究の課題

1.1.3.1 欧米と本邦における比較

欧米と比較し、本邦における集合的効力感と集団凝集性に関する研究例の不足が指摘されている（荒井, 2013；持田ほか, 2015；内田ほか, 2011）。欧米人と比較すると、日本人は周囲の状況や人々との関係が心理状態に影響を及ぼしやすいこと（Markus and Kitayama, 1991）や、周囲の人々との感情の一致を肯定的に捉える傾向にある（Kitayama et al., 2000）と示唆されており、スポーツ集団における心理的概念にも文化の違いが影響を及ぼす可能性がある（Chow and Felt, 2008；磯貝, 2000；持田ほか, 2015）。そのため、本邦におけるスポーツ集団を対象とした集合的効力感および集団凝集性に関する知見の蓄積が求められている（荒井, 2013；持田ほか, 2015；内田ほか, 2011）。

また、欧米における集合的効力感および集団凝集性に関する先行研究をみると、その多くは複数のチームならびに多くの対象から検討されている（Carron et al., 2002；Kozub and Button, 2000；Myers et al., 2004, 2007；Watson et al., 2001）。一方、本邦における研究例に目を向けると、いずれも単一ならびに少数のチームを対象にした検討がほとんどである（阿江, 1985b；小林ほか, 2016；松竹ほか, 2018；筒井・土屋, 2016）。したがって、本邦においても欧米のように複数のチームならびに多くの対象者から検討を行い、より信頼性と汎用性の高い知見を示すことが必要であろう。

1.1.3.2 試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連

通常、同一のスポーツチーム内には競技歴や役割など、異なる立場の者が所属している。さまざまな属性を持つメンバーをチームとしてまとめ、動機を一律に高めていくことがチームを運営していく上で重要であり、課題の一つであるともされている（持田ほか, 2015；筒井・土屋, 2016）。特に競技スポーツチームにおいては、試合で勝つというチームの目標に直接的に関わる試合への出場機会を得ているか否かが、集合的効力感お

よび集団凝集性に対する評価に影響を及ぼす可能性が示唆されている(山田ほか, 2014; 横田, 2002)。加えて, 集合的効力感が自身の行動達成に対する確信を表す自己効力感(Bandura, 1977)から派生した概念であることや, 集団凝集性が所属先におけるリーダーシップとの関係ならびに課題・目標に対する魅力の程度を反映することを考慮すると, チーム内の主要メンバーになりやすいと考えられる試合の出場機会に恵まれているメンバーの方が, 集合的効力感と集団凝集性ともに高まりやすいことが予想される。しかし, 荒井(2011)や松竹ほか(2018)は, 試合の出場機会に恵まれないメンバーの方が集合的効力感が高まっていたことを明らかにしており, 予想と反する結果となったことを報告している。ただし, これらの結果は単一のチームや少数の対象から導かれたものであり, 検討の余地がある。そのため, 対象を広げた上で試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連を検証することが必要であると考えた。

1.1.3.3 異なる教育段階と集合的効力感および集団凝集性との関連

教育段階の違いと集合的効力感および集団凝集性との関連にも留意する必要がある。例えば, 筒井・土屋(2016)は大学生の体育会部活動の特徴として, 部員数が多いためにレギュラーメンバーとそれ以外のメンバーに分かれて練習を行うケースが少なくないこと, そしてそれに伴いチーム全体のまとまりを維持することが困難になることを示唆した。この点については, ラグビーのようにフィールドプレイヤーが多いことや, 強豪チームであることに魅力を感じて入部してくるメンバーが多いチームにおいては特にみられる傾向かもしれない。その他, 教育段階が異なることにより, 集合的効力感の下位概念である自己効力感に差が生じる可能性が示唆されている(神藤ほか, 2017)。また, 山田ほか(2014)は高校生と大学生を対象に所属チームに対する一体感を検討した。その結果, 集団への統合, 所属感, 一体感のいずれにおいても大学生より高校生の

方が高い値を示したことを報告している。以上から、教育段階が異なることにより、集合的効力感および集団凝集性との関連も異なる可能性がある。

先に述べた通り、集合的効力感と集団凝集性が特性的なものではなく状態的な概念（阿江, 1985a ; Bandura, 1997 ; Chow and Feltz, 2008 ; Kozub and Button, 2000）であることを考慮すると、集合的効力感および集団凝集性を検討する際は競技種目や競技レベル、他には時期なども統制した上で検討することが望ましいであろう。これまでにラグビーチームを対象に集合的効力感および集団凝集性を検討した研究はいくつかみられる。しかし、いずれも高校生のみ（勝田・粟木, 1994 ; 菅田・西山, 1984 ; 寺田ほか, 1996）や大学生のみ（丹羽ほか, 1992 ; 岡本ほか, 1998）など、教育段階を限定した検討に留まっており、競技レベルや時期なども限定されていない。したがって、対象を限定した上で、異なる教育段階に着目し、それぞれの特徴や差を比較・検討することが必要であろう。

1.1.3.4 将来の試合における勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連

集合的効力感と集団凝集性は試合で勝つことで高まり、敗けることで低下することが明らかとなっている（Carron et al., 2002 ; Feltz and Lirgg, 1998）。しかし、集合的効力感および集団凝集性と将来の試合における勝敗との関連については、複数の条件を設定した上での検討は実施されておらず、数値化された運動パフォーマンスとの関連（Greenlees et al., 1999）や競技大会における上位群・下位群などの成績との関連（阿江, 1985b ; Spink, 1992）を検討するまでに留まっている。他方、寺田ほか（1996）はラグビーは番狂わせが起こらない競技であるとしながらも、これは大学生以上に該当することとし、高校生においては集団の心理的要因の影響により、大方の戦前の勝敗予測を覆す結果が起こりやすいと述べた。しかし、これらは一般論として示されるに留まっており、集団の心理的要因と将来の勝敗との関連は未だ検討されていない。その理由として、対戦チームとの優劣や勝敗を左右する関連要因を統制することの難しさが考えられる。ま

た、試合前の時期に競技スポーツチームから調査協力の同意を得ること自体も研究の実施を妨げる要因となっているかもしれない。競技スポーツにおいて最も関心が示されるものの1つとして、将来の試合における勝敗が考えられる。そのため、集合的効力感および集団凝集性と将来の試合における勝敗との関連を検討することは意義があると考えられる。

1.2 本研究の目的と意義

1.2.1 本研究の目的

本研究の目的は競技レベルの高いラグビーチームに所属するメンバーの試合の出場機会、教育段階、および調査実施直後の試合（以下、「次の試合」と略す）における勝敗が集合的効力感と集団凝集性にどのように関連するのかを明らかにすることである。本研究では、この目的を達成するために3つの下位研究を実施した。

1つ目は、試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連を経時的な視点から検討することとした。加えて、集合的効力感および集団凝集性の変化に影響を及ぼした要因について、内省報告を用いて検討することとした。

2つ目は、異なる教育段階と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討することとした。

3つ目は、高校生と大学生それぞれにおける次の試合の勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討することとした。

1.2.2 本研究の意義

集合的効力感および集団凝集性が集団の特性的なものではなく状態的な概念（阿江, 1985a ; Bandura, 1997 ; Chow and Feltz, 2008 ; Kozub and Button, 2000）であることから、対象競技や競技レベル、構成員の属性および状況や時期（例えばプレシーズンとインシ

ーズン) など, 特定の対象に特化した知見を蓄積していく必要があると指摘されている (荒井, 2011) . また, 安田 (2013) は実践への有益な示唆を提供するためには, 統制を図った上で限定した対象から知見を示すことが有効であると述べた. そのため, 本研究では対象の選出に際して複数の条件を設定した上で, 多くの対象者データを用いた.

また, 集合的効力感および集団凝集性は集団のパフォーマンスと密接に関連する. したがって, 競技レベルの高いチームに限定した上で示される結果は, 豊富な勝利経験を有するチームから示されたものである. そのため, 競技レベルを高めることを目的としている競技スポーツに携わる者の視点に立つと, 本研究から得られる結果は成功例ともいえる. つまり, 本研究から得られる知見は, 特に競技スポーツに携わる者にとって有益であり, 実践的な意義があるといえる. さらに, 対象ならびに複数の条件を設定した上で, 異なる教育段階や次の試合における勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した研究は今まで実施されていない. そのため, 本研究は新規性を有し, 学術的な観点からみても意義があるといえる.

以上から, 本研究は実践と学術の両側面において意義が高く, 競技スポーツに携わる者と今後のスポーツチームを対象とした研究の双方に有益な示唆を提供すると考えられる.

1.3 質問紙ならびに評価尺度と分析方法

1.3.1 質問紙の構成とフェイスシート

本研究で用いた質問紙はフェイスシートと集合的効力感および集団凝集性の評価尺度から構成した. フェイスシートには, 研究代表者の情報と研究の概要および倫理的な配慮を記載した. 加えて, 対象者の情報として氏名や学年等の記入欄を設けた (資料 1. 1) . なお, 氏名や学年の記載については, 試合の出場記録との照合が目的である旨を伝え, 了承を得た上で記載してもらった.

1.3.2 集合的効力感の評価尺度

集合的効力感の評価尺度には, Short et al. (2005) によって開発された Collective Efficacy Questionnaire for Sports の邦訳版 (永尾・杉山, 2013) (以下, 「CEQS」と略す) を使用した (資料 1.2) . CEQS 以外の集合的効力感の評価する尺度として, 荒井 (2011) が作成した心理的パフォーマンスコレクティブ・エフィカシー尺度が知られている. しかし, この尺度は全ての質問項目が試合中の心理状態を問うもので構成されており, 試合に向けた過程や準備が集合的効力感の評価に反映されない可能性がある. 加えて, 尺度作成における対象者が 144 名, 信頼性検討時の対象が 22 名と十分ではなかった. その他, 高校野球部員版集団効力感尺度 (尼崎・清水, 2008) やハーフコート・オフense・コレクティブ・エフィカシー尺度 (池田・内山, 2012) などもあるが, いずれも対象の教育段階や競技種目が限定されたものであり, 尺度から得られた結果を広く一般化するためには制約がある. そのため, 本研究では作成段階から様々な競技種目を対象に集合的効力感を測定することを前提として作成された CEQS を集合的効力感の評価尺度として用いた. なお, CEQS は内田ほか (2014) により, 一部項目の表現を調整した上で検証的因子分析が行われており, その結果, 全てのパス係数 (因子負荷) は 1%水準で有意であった. また, モデルの適合度指標は GFI (goodness of fit index) = .89, AGFI (adjusted goodness of fit index) = .86, CFI (comparative fit index) = .93, RMSEA (root mean square error of approximation) = .08 であり, 各因子の信頼性を検討するためのクロンバックの α 係数は.83 から.91 であった. 以上のように, CEQS は信頼性と妥当性が検証されている尺度であり, 本研究で用いるのに適していると判断した.

CEQS は 5 つの下位尺度と 20 項目から構成されており, その下位尺度は, 1 つ目は持続性 (「われわれのチームは, チャンスがほとんど無いような時でも, 試合に集中できる」など), 2 つ目は準備 (「われわれのチームは, 試合に向けて準備をすることができる」など), 3 つ目はまとまり (「われわれのチームは, 一致団結できる」など),

4 つ目は努力（「われわれのチームは、努力を惜しまずプレーできる」など）、5 つ目は能力（「われわれのチームは、相手チームに勝つことができる」など）である（Table 1. 1）。教示文として「直近の試合に対する、あなたのチームに対する自信はどの程度ですか？われわれのチームは・・・に続けて、回答して下さい」と示し、「0：全く自信がない」から「10：かなり自信がある」の 11 件法で回答を求めた。各下位尺度は 5 項目から構成されるため、それぞれの得点の範囲は 0 から 20 となり、合計得点は 0 から 200 となる。また、この得点が高いほど当該項目に対する評価が高いことを意味する。

Table 1.1 CEQSの下位尺度と質問項目

持続性	われわれのチームは、プレッシャーがあってもいつも通りのプレーができる
	われわれのチームは、困難な状況であってももちこたえることができる
	われわれのチームは、チャンスがほとんど無いような時でも、試合に集中できる
	われわれのチームは、ベストメンバーでなくても良いプレーができる
準備	われわれのチームは、試合に向けての準備をすることができる
	われわれのチームは、試合のために心理的なコンディションを整えることができる
	われわれのチームは、試合のために身体的なコンディションを整えることができる
	われわれのチームは、良い作戦を立てることができる
まとめり	われわれのチームは、問題を解決できる
	われわれのチームは、一致団結できる
	われわれのチームは、常に前向きな態度でいることができる
	われわれのチームは、コミュニケーションを十分に取ることができる
努力	われわれのチームは、努力を惜しまずプレイできる
	われわれのチームは、能力を発揮できる
	われわれのチームは、情熱を見せることができる
	われわれのチームは、チームにおこる様々な障害を乗り越えることができる
能力	われわれのチームは、相手チームに勝つことができる
	われわれのチームは、相手チームよりも実力を発揮できる
	われわれのチームは、相手チームよりも良いパフォーマンスをすることができる
	われわれのチームは、相手チームよりも技術的に高いレベルのプレイができる

CEQS : Collective Efficacy Questionnaire for Sportsの邦訳版

1.3.3 集団凝集性の評価尺度

集団凝集性の評価尺度には, Carron et al. (1985) によって開発された Group Environment Questionnaire の邦訳版 (織田ほか, 2007) (以下, 「GEQ」と略す) を使用した (資料 1.3) . GEQ 以外の集団凝集性を評価する尺度として, 阿江 (1986) が作成した集団凝集性尺度が知られている. しかし, この尺度は 231 名という少ない対象者から作成されていることや, 質問項目にチームのメンバーと「うまくやっていける」, 「うまくやっいけない」などの反転項目がみられることから, 十分な信頼性が得られていないと指摘されている (杉山ほか, 2021) . その他, 集団凝集性と相似した概念を評価する尺度として Yamada et al (2013) が作成したスポーツチームの一体感尺度があるが, この尺度は集団への統合と所属感の 2 因子のみから構成されており, 集団の課題に対する凝集が反映されないことから, 本研究で使用することは妥当でないと判断した. そのため, 本研究では集団凝集性を社会凝集性と課題凝集性の 2 つの下位概念から評価することができる GEQ を集団凝集性の評価尺度として用いた. なお, GEQ も内田ほか (2014) により, 検証的因子分析が行われており, その結果, 全てのパス係数 (因子負荷) は 1% 水準で有意であった. また, モデルの適合度指標は $GFI = .89$, $AGFI = .86$, $CFI = .89$, $RMSEA = .08$ であり, 各因子の信頼性を検討するためのクロンバックの α 係数は .67 から .84 であった. 以上のように, GEQ は信頼性と妥当性が検証されている尺度であり, 本研究で用いるのに適していると判断した.

GEQ は 4 つの下位尺度と 18 項目から構成されており, その下位尺度は, 1 つ目は集団の社会的側面に対する個人的魅力 (Individual Attraction to the Group–Social Cohesion : 以下, 「ATG-S」と略す, 「チームのメンバーとの付き合いは楽しい」など), 2 つ目は集団の課題的側面に対する個人的魅力 (Individual Attraction to the Group–Cohesion Task : 以下, 「ATG-T」と略す, 「試合のとき, 自分の出場時間に満足している」など), 3 つ目は集団の社会的側面に対する集団の一体感 (Group Integration–Social Cohesion : 以

下、「GI-S」と略す、「われわれのチームは、試合や練習以外の時でも仲良しだ」など）、4つ目は集団の課題的側面に対する集団の一体感（Group Integration–Task Cohesion：以下、「GI-T」と略す、「われわれのチームのメンバーは、チーム目標が一致している」など）である（Table 1. 2）。また、ATG-SとGI-Sは社会凝集性、ATG-TとGI-Tは課題凝集性に分類され、前者は集団の仲間との情緒的な繋がり、後者は集団の目標達成のための凝集を表している（筒井・土屋, 2016）。ATG-SとATG-Tに対しては「チームに対するあなたの個人的な感情について回答して下さい」、GI-SとGI-Tに対しては「チーム全体に対するあなたの認識について回答して下さい」と教示し、「1：全く違う」から「9：全くその通りだ」の9件法で回答を求めた。ATG-SとGI-Tは5項目から構成されるため得点の範囲は5から45、ATG-TとGI-Sは4項目から構成されるため4から36となり、合計得点は18から162となる。また、この得点が高いほど当該項目に対する評価が高いことを意味する。

Table 1.2 GEQの下位尺度と質問項目

	チームのメンバーとの付き合いは楽しい
	シーズンが終わって、チームのメンバーと会わなくなると寂しい
ATG-S	親しい友人がチームの中に数人いる
	チーム以外の者との付き合いよりも、チームメンバーとの付き合いのほうが楽しい
	このチームでの活動は自分が所属している集団の中でも最も大切な集団のひとつである
	試合のとき、自分の出場時間に満足している
ATG-T	チームが試合に勝とうとする意欲に満足している
	このチームは自分のパフォーマンスを伸ばす機会を十分に与えてくれている
	このチームのプレースタイルが気に入っている
	われわれのチームは、それぞれで出かけるよりも、チームメンバーと一緒に出かけることを好む
GI-S	われわれのチームは、チームのメンバー同士でパーティ（食事会など）をよくひらく
	われわれのチームは、シーズンオフの時でもチームのメンバーと一緒に過ごしたいと思っている
	われわれのチームは、試合や練習以外の時でも仲良しだ
	われわれのチームは、一致団結して目標を達成しようとしている
	われわれのチームは、試合で負けたり成績が思わしくない時は、チームメンバー全員が責任を感じる
GI-T	われわれのチームのメンバーは、チーム目標が一致している
	われわれのチームは、練習中にうまくできないメンバーがいるとき、メンバーみんなでサポートする
	われわれのチームのメンバーは、試合や練習のとき、それぞれの役割や責任などについて遠慮なく話し合う

GEQ : Group Environment Questionnaireの邦訳版

ATG-S : Individual Attraction to the Group-Social Cohesion

ATG-T : Individual Attraction to the Group-Task Cohesion

GI-S : Group Integration-Social Cohesion

GI-T : Group Integration-Task Cohesion

1.3.4. 分析方法

集合的な概念は個人レベルと集団レベルの2つの階層で表される (DeRue et al., 2010; 清水ほか, 2006) . それゆえに, 集合的効力感や集団凝集性の測定を試みた場合, 集団としての評価 (例えば, 各集団の平均値) を分析に用いるべきか, それとも各個人の評価を分析に用いるべきかという点について議論されている (持田ほか, 2015 ; 内田ほか, 2011) . 内田ほか (2011) は Gully et al. (2002) のメタ分析の結果を用いた上で, 各集団に1つの得点を割り当てた場合, その得点に含まれる各個人の得点の分散が無視されることを指摘し, 適切な分析方法とは言い難いと論じた. 他方, 持田ほか (2015) は集団としての集合的効力感や集団凝集性の基盤は各個人が有する集団に対する集合的効力感や集団凝集性の評価であると述べた. そして, 集合的な概念を扱う上では, 各個人における評価を用いるべきであるという立場を示した. また同様に, 複数の報告からもスポーツチームを対象に集合的効力感や集団凝集性を測定する際には, 集団に所属する個人を分析対象とすることが必要であると示されている (Myers et al., 2007 ; 竹村ほか, 2013 ; 山口, 2008) . 以上により, 本研究では各個人から得られた評価を分析対象とすることとした. また分析方法について, 山田ほか (2014) は時系列的な変動や対象の属性などを組み合わせた上で, 交互作用の検出を試みる必要があると述べた. そのため, 本研究では主な分析方法として, 対象の属性を独立変数, CEQS および GEQ の得点を従属変数とする分析方法を採用した.

1.4 本研究の対象者

本研究では, 相互作用の機会が多く, キャプテンの位置付けを重視することやポジションの役割が分化していること, さらにフィールドプレイヤーが15人と多いことから, ラグビーチームに所属する選手を対象とした. 我が国におけるラグビー競技者の多くは高校と大学に所属している (公益財団法人日本ラグビーフットボール協会, 2020) . そ

のため、教育段階と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討するために、高校と大学のラグビーチームに所属する選手を対象とした。さらに、高い競技レベルを担保するために、全国大会ベスト 16 以上の成績を残しているチームであることも対象とする条件の一つとした。

その他、将来の勝敗との関連を検討する際には、試合前から明らかな勝敗予測がつかないよう、全国大会などの実力が拮抗したチームとの公式戦期間に調査を行った。加えて、調査実施前後の直近の試合における勝敗による統制も行った。

1.5 本研究の構成

本研究は 5 章から構成した (Figure 1.1)。

第 1 章では、競技スポーツチームにおける集合的効力感と集団凝集性の重要性について述べ、両概念の定義や構成因子などについて論じた。さらに先行研究を概観し、集合的効力感および集団凝集性に関する課題を示した。その上で、本研究の目的と意義について述べた。また、本研究で用いる集合的効力感と集団凝集性の評価尺度についても示した。

第 2 章では、高校 1 チームを対象に試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連を経時的な視点から検討した。加えて、インタビュー調査による内省報告を用いて、集合的効力感および集団凝集性の変化に影響を及ぼした要因について検討した。

第 3 章では、異なる教育段階と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した。

第 4 章では、将来の勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した。

第 5 章では、第 2 章から第 4 章までを総括し、本研究のまとめと実践への示唆を行った。また、本研究の限界と今後の展望についても述べた。

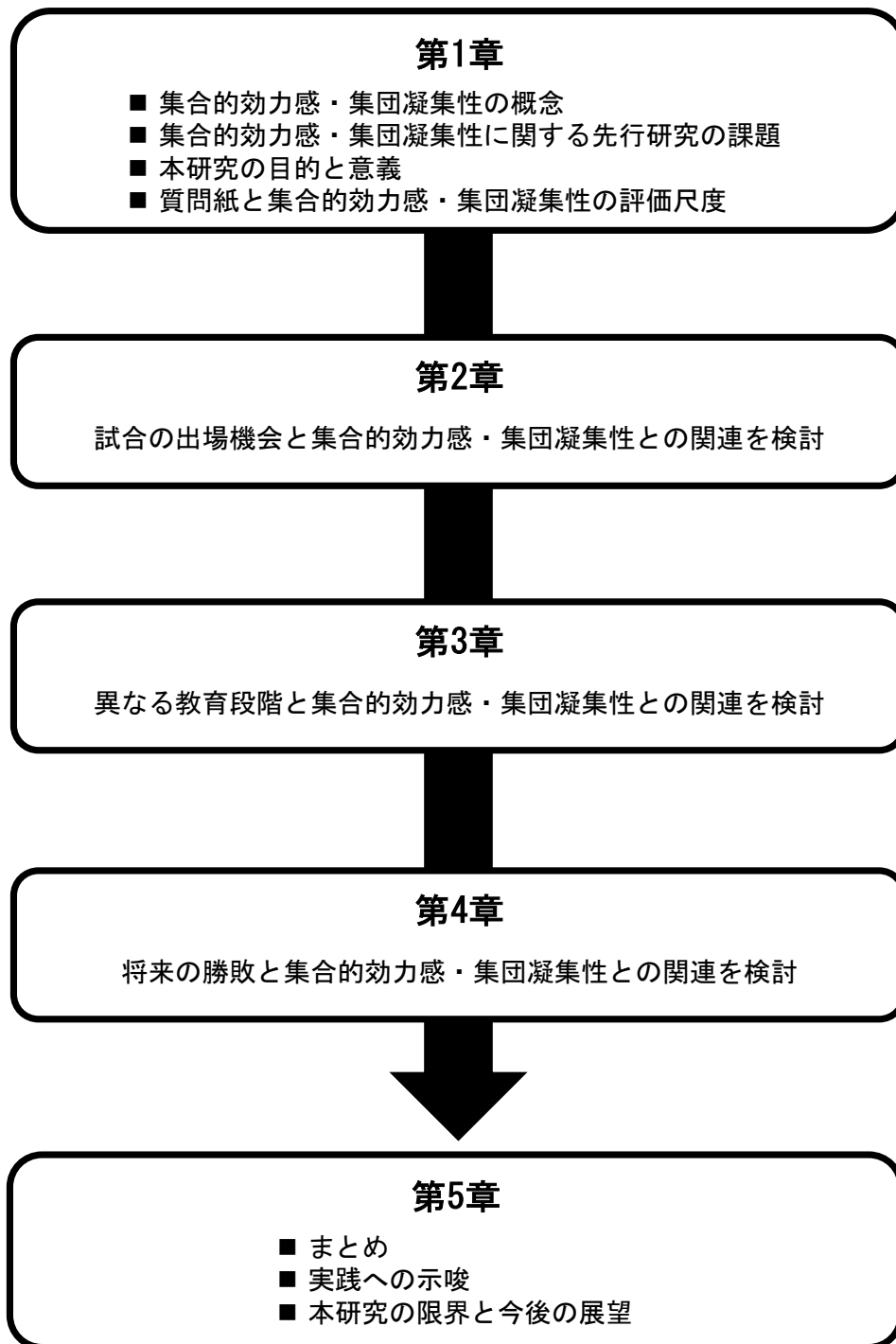


Figure 1.1 本研究の構成

1.6 本研究に用いた用語

集団とチームならびに構成員とメンバー

本研究では、下中（2006）に倣い、同じ競技スポーツ活動を共通目的として形成されたそれぞれの組織を「集団」ならびに「チーム」と表し、同義語として用いた。また、上述のそれぞれの組織に所属する一員を「構成員」ならびに「メンバー」と表し、同義語として用いた。

試合の出場機会

本研究では質問紙調査の直近の前後の試合に限定した上で、出場機会の有無を変数として扱う。そのため、本研究における「試合の出場機会」は、レギュラーや非レギュラーのように一定期間にわたる試合への出場機会を意味したものではなく、質問紙調査の直近の前後の試合のみに限定した「試合の出場機会」の有無を表している。

教育段階

本研究における「教育段階」とは、教育場面や課外活動の場面に限定したものではなく、学校環境や人間関係など、各教育機関における学校生活全般の違いや特徴を広く捉えたものである。

第2章

試合の出場機会と

集合的効力感および集団凝集性との関連

2.1 はじめに

試合の出場機会は各メンバーの集合的効力感や集団凝集性に影響を与え、ときにはスポーツチームの運営に負の影響を及ぼす可能性がある（竹村ほか, 2013；筒井・土屋, 2016；山田ほか, 2014）。特に競技スポーツチームにおいては、試合で勝つというチームの目的に直接的に関わる試合への出場機会を得ているか否かが、集合的効力感および集団凝集性に対する評価に影響を及ぼす可能性が示唆されている（山田ほか, 2014；横田, 2002）。

一方で、先述の通り、集合的効力感および集団凝集性は特性的なものではなく状態的な概念であり（阿江, 1985a; Bandura, 1997; Chow and Feltz, 2008; Kozub and Button, 2000）、集団のパフォーマンスと正の関連を有する（阿江, 1987；Carron et al., 2002；Feltz and Lirgg, 1998；Gully et al., 2002）。そのため、チームのピークパフォーマンスの発揮に向けては試合の出場機会の有無に関わらず、チームに所属する全メンバーの集合的効力感および集団凝集性を高めていくことが必要であると指摘されている（筒井・土屋, 2016；山田ほか, 2014）。しかし、試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性の経時的な変化を検証した研究は見当たらない。さらに、池田・内山（2012）は集合的効力感の例にあげ、実際の現場で獲得される過程や応用された例の少なさを問題とし、実践というコンテキストの中で取り扱うべき指標であると指摘した。加えて、山田ほか（2014）はスポーツチームにおける集団の心理的な概念を扱う際は、対象の属性も組み合わせた縦断研究により、交互作用および時系列的な変動性や共変性について検討することが必要であると論じた。

以上により、本章の目的は試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連を経時的な視点から検討することとした。さらに、集合的効力感および集団凝集性の変化に影響を及ぼした要因について、内省報告を用いて検討することとした。

競技スポーツでは、重要な試合に向けて心理的側面も含めたチーム力を高めていくことが重要である。そのため、集合的効力感および集団凝集性の動態を明らかにすることは意義があると言える。また、本章から得られる知見は集合的効力感および集団凝集性を検討する上で、試合の出場機会や時期を限定することの必要性を明らかにするものである。加えて、自省報告から得られる示唆は今後の集合的効力感および集団凝集性に関する研究に貢献すると考えた。

2.2 方法

2.2.1 調査内容および対象と時期

2.2.1.1 質問紙調査

対象はA 高等学校ラグビー部に所属するチームスタッフを除いた全 62 名の男子選手であった。A 高等学校ラグビー部は所属する都道府県内において多くの優勝経験を有し、全国大会でも上位に進出するなど高い競技レベルを有するチームであった。なお、調査対象期間におけるチームの最終目標は全国大会でベスト 4 以上の成績を収めることであった。

質問紙調査は 20XX 年の 7 月と同年 11 月に 1 度ずつ実施した。質問紙はフェイスシートおよび Collective Efficacy Questionnaire for Sports の邦訳版（以下、「CEQS」と略す）と Group Environment Questionnaire の邦訳版（以下、「GEQ」と略す）から構成した。分析対象は 2 回の調査に参加し、回答の記入漏れや不備があった者を除く 59 名（3 年生 26 名、2 年生 16 名、1 年生 17 名）（有効回答率 95.2%）とした。さらに、2 回目の調査直後に行なわれた試合において、ベンチ入りし、試合に出場する可能性があった 25 名（以下、「出場群」と略す）（3 年生 17 名、2 年生 7 名、1 年生 1 名）と、ベンチ入りせず、試合に出場する可能性のなかった 34 名（以下、「非出場群」と略す）（3 年生 9 名、2 年生 9 名、1 年生 16 名）の 2 群に分けた。1 回目の調査日は次の公式戦まで 3

ヶ月以上の期間があり、その前後2週間に練習試合も行なわれていなかったこと、また出場群と非出場群のように試合の出場機会による立場が分けられていなかったことからプレシーズンとした。2回目の調査日は全国大会への出場をかけた都道府県予選決勝戦の5日前であったこと、また同試合における出場群および非出場群が発表されていたことからインシーズンとした。いずれの調査も集合調査形式とし、実施時間は1回あたり約20分であった。

2.2.1.2 インタビュー調査

経時的な試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連に影響を及ぼした要因を具体的に検討するためにインタビュー調査を行った。そのため、これらの要因を調べるためには、最もチームを象徴し、かつ平均的な状態を表す語りを聴取する必要がある。以上から、対象者は出場群と非出場群各4名ずつとし、2回目の質問紙調査におけるCEQSおよびGEQのいずれかの合計得点において、チームの平均値に最も近い得点を示した者とした。なお、出場群4名のIDをA, B, C, Dとし、非出場群4名のIDをE, F, G, Hとした。Table 2.1にインタビュー調査における対象者の属性を示した。

実施時期は2回目の質問紙調査の2ヶ月後にあたる20XX年+1年1月とし、授業やクラブ活動に支障のない日程を対象者自身に選択をしてもらった。1人あたりの実施時間は約30分とし、研究者と1対1で行なった。実施場所については個室で静かにインタビューが行なえることを条件とし、プライバシーの保護に配慮をした。また、対象者の了解を得た上で、全ての語りをICレコーダーに録音した。

本調査では半構造化面接法を採用し、インタビュー・ガイドに準じてインタビューを実施した。加えて、適時、質問の追加および修正を行なった。インタビュー・ガイドは13項目から構成されており、1項目から4項目までは20XX年への想起を促すことや

ラポールの形成を目的とした導入項目であった。続いて、5項目から13項目まではCEQSとGEQを構成する下位尺度および質問項目について直接的に問う内容であった（資料2.1）。具体的には「チームの一体感について、あなたはどのように感じていましたか」や「あなたのチームは試合に向けて良い準備をすることが出来ましたか」などであった。全ての質問に対して、20XX年ならびにプレシーズンからインシーズンを想起した上で、回答するように求めた。そのため、インタビュー実施の約5日前に所属チームの代表メンバーで構成されたAチーム（トップチーム）の年間戦績表を対象者に配布し、想起を促した。更にインタビュー実施時にも同じ表を手元に用意した（Table 2.2）。なお、対象者からの語りの中でチーム内の立場を表す語句として、出場群と非出場群以外にAチーム、Bチーム、Cチームという表現がなされているが、これらは練習やスケジュールに応じて所属チーム内で使い分けられていたグレードを表す表現であり、どちらを用いるかは対象者に任せた。

Table 2.1 インタビュー調査における対象者の属性

試合の 出場機会	ID	学年	CEQSの 合計得点	GEQの 合計得点	属性
	A	3	159	128	キャプテンとして、1年間Aチームの試合に出続けた。1年生時からベンチ入りし、2年生ながら全国大会では中心選手として活躍した。ポジション的にもチームの司令塔としての役割も担った。高校日本代表候補。
	B	3	171	119	副キャプテンとして、1年間Aチームの試合に出続けた。ケガのために離脱することはあったが、1年時からベンチ入りし、2年時の全国大会では中心選手として活躍した。
出場群	C	3	160	110	新人戦ではレギュラーだったが、夏合宿では0チームも経験。秋の全国大会予選はレギュラーメンバーのケガにより、1試合のみスタメンだったが、他では出場がなかった。公式戦においては年間を通じて、ベンチ入りメンバーであった。
	D	3	155	120	3年時の新人戦途中にポジションを変更し、2/20に初めてAチームに選出。それまではベンチ入りの経験もなかった。その後はケガ以外ではAチームから外れることはなかった。
	E	2	148	96	前年度はAチームでの出場や公式戦におけるベンチ入りの経験はなかった。新チーム発足時は2学年しかなかったため、Bチームにいたがゴールデンウィーク以降はずっと0チームであった。
	F	2	135	107	新チーム発足時からBチーム。オーストラリア遠征では準Aチームのような扱い。しかし、その後最後までBチームに所属しており、公式戦用ジャージを着れたのは遠征時のみであった。
非出場群	G	1	147	117	高校入学前の3月頃から練習に参加していた。春は0チーム、オーストラリア遠征ではBチームになったが、夏合宿では0チームに戻った。そのままシーズン終了までBチームに上がることはなかった。
	H	1	159	106	高校入学前の3月頃から練習に参加し始めていた。4月末からの大会直前にAチームに入り、遠征にも帯同したが、試合には出れなかった。その後はAチームに入ることもベンチに入ることもなかった。

CEQS : Collective Efficacy Questionnaire for Sportsの邦訳版

GEQ : Group Environment Questionnaireの邦訳版

Table 2.2 20XX年におけるA高校ラグビー部Aチームの年間戦績表

試合・大会名	日付	対戦チーム	勝敗	スコア
1 新人戦2回戦	1/16(日)	N高校	O	98-0
2 新人戦3回戦	1/30(日)	R高校	O	77-0
3 新人戦準決勝	2/6(日)	K高校	O	25-0
4 新人戦決勝	2/13(日)	H高校	O	28-0
5 練習試合	2/20(日)	K高校	O	31-15
6 地域選抜大会1回戦	3/21(月)	O高校	O	31-19
7 地域選抜大会2回戦	3/23(水)	K高校	x	7-31
8 地域選抜選考試合	3/25(金)	H高校	O	47-7
9 練習試合	3/27(日)	H高校	x	5-43
10 練習試合	4/2(土)	O高校	x	7-12
11 練習試合	4/2(土)	O高校	x	0-15
12 練習試合	4/3(日)	T高校	x	14-15
13 練習試合	4/3(日)	O高校	x	0-31
14 練習試合	4/10(日)	G高校	x	0-46
15 選抜全国大会予選リーグ1	4/28(木)	Kハイスクール	O	29-12
16 選抜全国大会予選リーグ2	4/29(金)	J高校	x	19-38
17 選抜全国大会予選リーグ3	5/1(日)	T高校	x	15-17
18 選抜全国大会本戦1	5/2(月)	O高校	x	33-38
19 選抜全国大会本戦2	5/4(水)	O高校	O	22-15
20 選抜全国大会本戦3	5/5(木)	M高校	x	12-17
21 都道府県大会1回戦	5/21(土)	K高校	O	79-5
22 都道府県大会2回戦	5/28(土)	I高校	O	59-0
23 都道府県大会準決勝	6/4(土)	K高校	O	38-21
24 都道府県大会決勝	6/12(日)	K高校	△	14-14
25 招待試合	6/19(日)	J高校	x	10-12
26 招待試合	6/19(日)	T高校	x	7-14
27 オーストラリア遠征	7/24(日)	UI6・S選抜	x	25-39
28 オーストラリア遠征	7/26(火)	Tハイスクール	O	55-10
29 オーストラリア遠征	7/30(土)	Bハイスクール	x	10-21
30 夏合宿 練習試合	8/10(水)	A高校	O	10-7
31 夏合宿 練習試合	8/10(水)	O高校	O	31-0
32 夏合宿 練習試合	8/11(木)	T高校	x	7-36
33 夏合宿 練習試合	8/12(金)	O高校	x	15-17
34 夏合宿 練習試合	8/12(金)	K高校	x	0-14
35 夏合宿 練習試合	8/13(土)	N高校	O	21-14
36 夏合宿 練習試合	8/14(日)	D高校	O	28-26
37 夏合宿 練習試合	8/14(日)	M高校	O	36-0
38 定期戦	8/26(金)	K高校	O	48-21
39 練習試合	9/11(日)	J高校	O	22-7
40 練習試合	9/17(土)	O高校	x	14-19
41 練習試合	9/25(日)	K高校	x	14-31
42 練習試合	10/2(日)	T高校	O	55-0
43 練習試合	10/8(土)	M高校	O	31-12
44 招待試合	10/9(日)	G高校	x	10-14
45 招待試合	10/9(日)	T高校	O	14-0
46 招待試合	10/9(日)	K高校	x	12-14
47 招待試合	10/9(日)	I高校	O	7-0
48 練習試合	10/15(土)	O高校	△	17-17
49 全国大会予選3回戦	10/30(日)	A高校	O	104-3
50 全国大会予選4回戦	11/5(土)	K高校	O	64-0
51 全国大会予選準決勝	11/13(日)	K高校	O	40-3
52 全国大会予選決勝	11/23(水)	H高校	O	21-16
53 練習試合	12/18(土)	O高校	O	34-22
54 全国大会1回戦	12/28(水)	N高校	△	7-7

通算成績：29勝22敗3分

2.2.2 倫理的配慮

全ての調査はヘルシンキ宣言の精神に基づき、十分な倫理的配慮のもと実施した。調査に先立ち、チームの代表者として部長と監督に対して、口頭および書面にて、研究の目的と内容やプライバシーの保護について説明し、自署によって同意を得たこととした。各対象者にも、全ての調査実施前に口頭および書面にて上記と同様の説明を行った。また、研究参加は自由意志であることやチーム関係者も含め、本人以外に個人が特定される形で結果が公表されないことを約束した。以上の説明を終えた後に自署によって研究協力の同意を得たこととした。

2.2.3 分析方法

質問紙調査については、はじめに全対象者の CEQS および GEQ の下位尺度それぞれの得点と合計得点を算出した。次に独立変数を試合の出場機会（出場群・非出場群）と時期（インシーズン・プレシーズン）、従属変数を各尺度の下位尺度得点および合計得点とする、2 要因混合計画による分散分析を行った。交互作用がみられた場合には単純主効果の検定を行い、交互作用がみられなかった場合には主効果の検定を行った。統計処理には IBM SPSS statistics18 を用い、有意水準は $p < .05$ とした。

インタビュー調査については、IC レコーダーで録音した会話から質問項目ごとに逐語録を作成した。次に、両尺度を構成する各因子に関連深い語りや対象者 8 名に共通したキーワードを探索、抽出した。なお、調査開始から考察に至る全過程において、本研究法に熟知した研究者のスーパーヴィジョンを受け、妥当性と信頼性を高めた。

2.3 結果

2.3.1 CEQS の内的整合性

全対象者における CEQS の各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性を示した (Table 2.3) . 信頼性を示すクロンバックの α 係数がプレシーズンでは.67 から.83, インシーズンでは.79 から.86 の範囲となり, いずれも高い内的整合性が確認できた.

Table 2.3 CEQSにおける各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性 (n=59)

下位尺度	質問項目	ブレシーズン		インシーズン	
		平均値 ± 標準偏差	クロンバック α 係数	平均値 ± 標準偏差	クロンバック α 係数
持続性	われわれのチームは、プレッシャーがあってもいつも通りのプレーができる	5.76 ± 1.83		6.93 ± 1.64	
	われわれのチームは、困難な状況であってももちこたえることができる	6.81 ± 1.50	.73	7.68 ± 1.72	.80
	われわれのチームは、チャンスがほとんど無いような時でも、試合に集中できる	6.73 ± 1.91		7.39 ± 2.01	
	われわれのチームは、ベストメンバーでなくても良いプレーができる	6.02 ± 2.18		6.46 ± 1.80	
準備	われわれのチームは、試合に向けての準備をすることができる	7.25 ± 1.28		7.95 ± 1.74	
	われわれのチームは、試合のために心理的なコンディションを整えることができる	6.56 ± 1.93	.67	7.44 ± 2.00	.83
	われわれのチームは、試合のために身体的なコンディションを整えることができる	6.58 ± 1.83		7.46 ± 2.10	
	われわれのチームは、良い作戦を立てることができる	6.47 ± 1.73		8.29 ± 1.46	
まとまり	われわれのチームは、問題を解決できる	6.59 ± 1.49		7.58 ± 1.52	
	われわれのチームは、一致団結できる	7.37 ± 1.51	.80	8.66 ± 1.48	.81
	われわれのチームは、常に前向きな態度でいることができる	6.41 ± 2.17		7.71 ± 1.73	
	われわれのチームは、コミュニケーションを十分に取ることができる	6.63 ± 1.93		7.64 ± 1.57	
努力	われわれのチームは、努力を惜しまずプレーできる	7.14 ± 1.77		8.27 ± 1.57	
	われわれのチームは、能力を発揮できる	6.86 ± 1.46	.80	7.88 ± 1.37	.86
	われわれのチームは、情熱を見せることができる	7.12 ± 1.80		8.27 ± 1.57	
	われわれのチームは、チームにおこる様々な障害を乗り越えることができる	6.75 ± 1.50		7.92 ± 1.36	
能力	われわれのチームは、相手チームに勝つことができる	6.31 ± 1.41		8.03 ± 1.54	
	われわれのチームは、相手チームよりも実力を発揮できる	6.53 ± 1.58	.83	7.63 ± 1.53	.79
	われわれのチームは、相手チームよりも良いパフォーマンスをすることができる	5.68 ± 1.54		7.14 ± 1.59	
	われわれのチームは、相手チームよりも技術的に高いレベルのプレーができる	6.47 ± 1.58		7.63 ± 1.66	

CEQS : Collective Efficacy Questionnaire for Sportsの邦訳版

2.3.2 GEQ の内的整合性

全対象者における GEQ の各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性を示した (Table 2.4) . 信頼性を示すクロンバックの α 係数がプレシーズンでは.71 から.77, インシーズンでは.67 から.81 の範囲となり, いずれも高い内的整合性が確認できた.

Table 2.4 GEQIにおける各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性 (n=59)

下位尺度	質問項目	ブレシーズン		インシーズン	
		平均値 ± 標準偏差	クロンバック α 係数	平均値 ± 標準偏差	クロンバック α 係数
ATG-S	チームのメンバーとの付き合いは楽しい	7.75 ± 1.15		8.05 ± 1.07	
	シーズンが終わって、チームのメンバーと会わなくなると寂しい	6.68 ± 1.35		6.57 ± 1.82	
	親しい友人がチームの中に数人いる	8.09 ± 1.32	.73	8.20 ± 1.05	.81
	チーム以外の者との付き合いよりも、チームメンバーとの付き合いのほうが楽しい	7.07 ± 1.43		6.82 ± 1.69	
ATG-T	このチームでの活動は自分が所属している集団の中でも最も大切な集団のひとつである	7.86 ± 1.41		8.39 ± 0.93	
	試合のとき、自分の出場時間に満足している	7.07 ± 1.92		6.96 ± 2.01	
	チームが試合に勝とうとする意欲に満足している	6.41 ± 1.55		7.02 ± 1.48	
	このチームは自分のパフォーマンスを伸ばす機会を十分に与えてくれている	6.75 ± 1.81	.71	7.11 ± 1.74	.67
GI-S	このチームのプレースタイルが気に入っている	6.38 ± 1.79		7.00 ± 1.51	
	われわれのチームは、それぞれで出かけるよりも、チームメンバーと一緒に出かけたいことを好む	6.70 ± 1.54		7.04 ± 1.35	
	われわれのチームは、チームのメンバー同士でパーティ（食事会など）をよくひらく	6.38 ± 2.04		6.95 ± 1.69	
	われわれのチームは、シーズンオフの時でもチームのメンバーと一緒に過ごしたいと思っている	6.57 ± 1.44	.73	6.89 ± 1.49	.73
GI-T	われわれのチームは、試合や練習以外の時でも仲良しだ	7.70 ± 1.32		8.02 ± 1.04	
	われわれのチームは、一致団結して目標を達成しようとしている	6.66 ± 1.39		7.77 ± 1.19	
	われわれのチームは、試合で負けたら成績が思わしくない時は、チームメンバー全員が責任を感じる	6.04 ± 1.80		6.70 ± 1.61	
	われわれのチームは、練習中うまくできないメンバーがいるとき、メンバーみんなでサポートする	7.11 ± 1.45	.77	8.11 ± 1.09	.76
	われわれのチームは、練習中うまくできないメンバーがいるとき、メンバーみんなでサポートする	6.54 ± 1.63		7.11 ± 1.29	
	われわれのチームは、試合や練習のとき、それぞれの役割や責任などについて遠慮なく話し合う	5.86 ± 1.94		6.93 ± 1.40	

GEQ : Group Environment Questionnaireの邦訳版

ATG-S : Individual Attraction to the Group-Social Cohesion

ATG-T : Individual Attraction to the Group-Task Cohesion

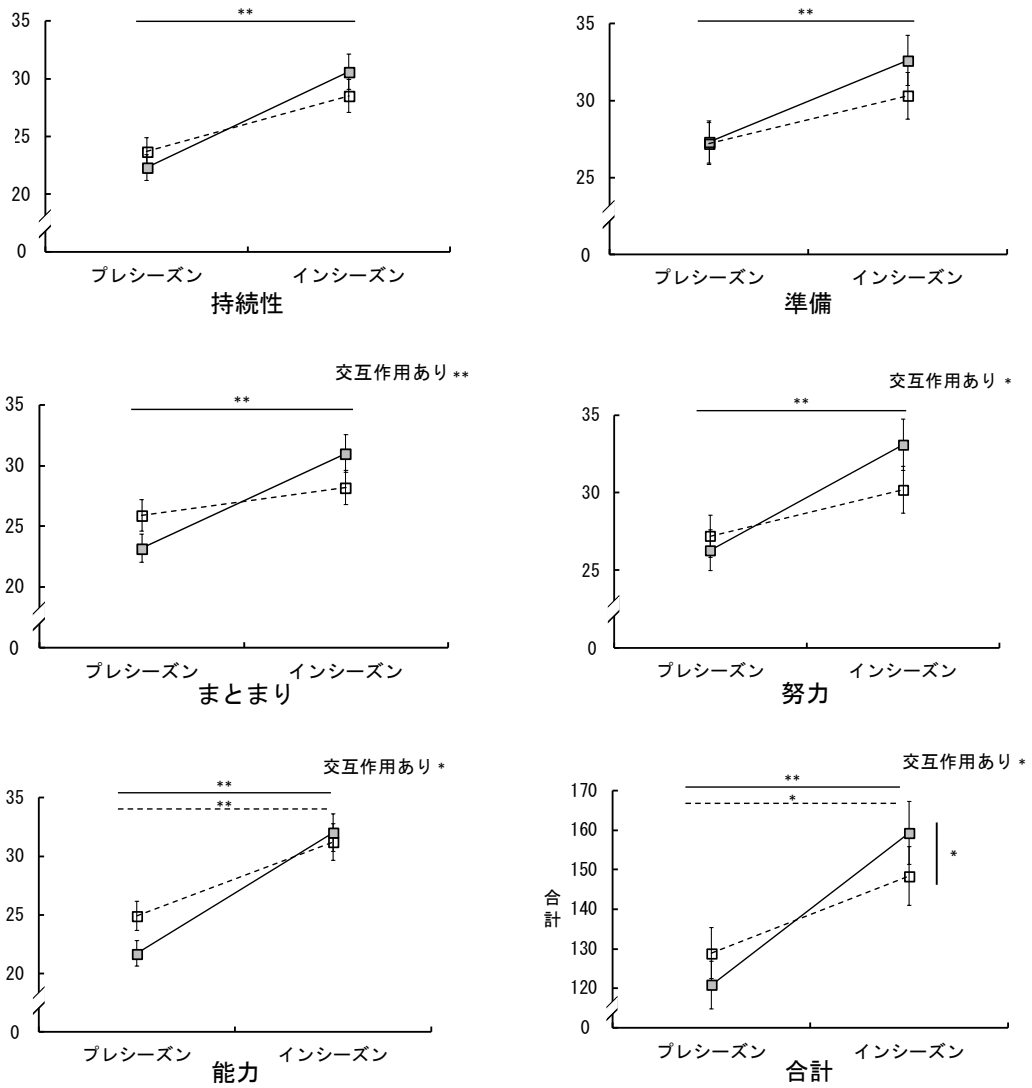
GI-S : Group Integration-Social Cohesion

GI-T : Group Integration-Task Cohesion

2.3.3 試合の出場機会および時期と集合的効力感との関連

Figure 2.1 に試合の出場機会および時期と CEQS との関連を示した。合計に交互作用がみられた [$F(1, 114) = 5.63, p < .05$]。そのため、単純主効果の検定を行ったところ、出場群と非出場群それぞれに時期の単純主効果がみられ、いずれもプレシーズンよりインシーズンの方が高い値を示した(順に [$F(1, 114) = 13.47, p < .01$] , [$F(1, 114) = 3.48, p < .05$])。また、インシーズンに出場機会の単純主効果がみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した [$F(1, 114) = 3.44, p < .05$]。

下位尺度についてはまとめ、努力、能力に交互作用がみられた(順に [$F(1, 114) = 7.56, p < .01$] , [$F(1, 114) = 4.53, p < .05$] , [$F(1, 114) = 5.47, p < .05$])。いずれの項目にも出場群に時期の単純主効果がみられ、プレシーズンよりインシーズンの方が高い値を示した(順に [$F(1, 114) = 8.77, p < .01$] , [$F(1, 114) = 8.31, p < .01$] , [$F(1, 114) = 21.08, p < .01$])。また、能力においては非出場群にも時期の単純主効果がみられ、プレシーズンよりインシーズンの方が高い値を示した [$F(1, 114) = 7.91, p < .01$]。一方、持続性と準備に交互作用はみられなかった(順に [$F(1, 114) = 3.84, n.s.$] , [$F(1, 114) = 1.50, n.s.$])。そのため、主効果の検定を行ったところ、いずれの項目にも時期の主効果がみられ、ともにプレシーズンよりインシーズンの方が高い値を示した(順に [$F(1, 114) = 50.93, p < .01$] , [$F(1, 114) = 22.75, p < .01$])。



CEQS : Collective Efficacy Questionnaire for Sportsの邦訳版
 **: $p < .01$, *: $p < .05$

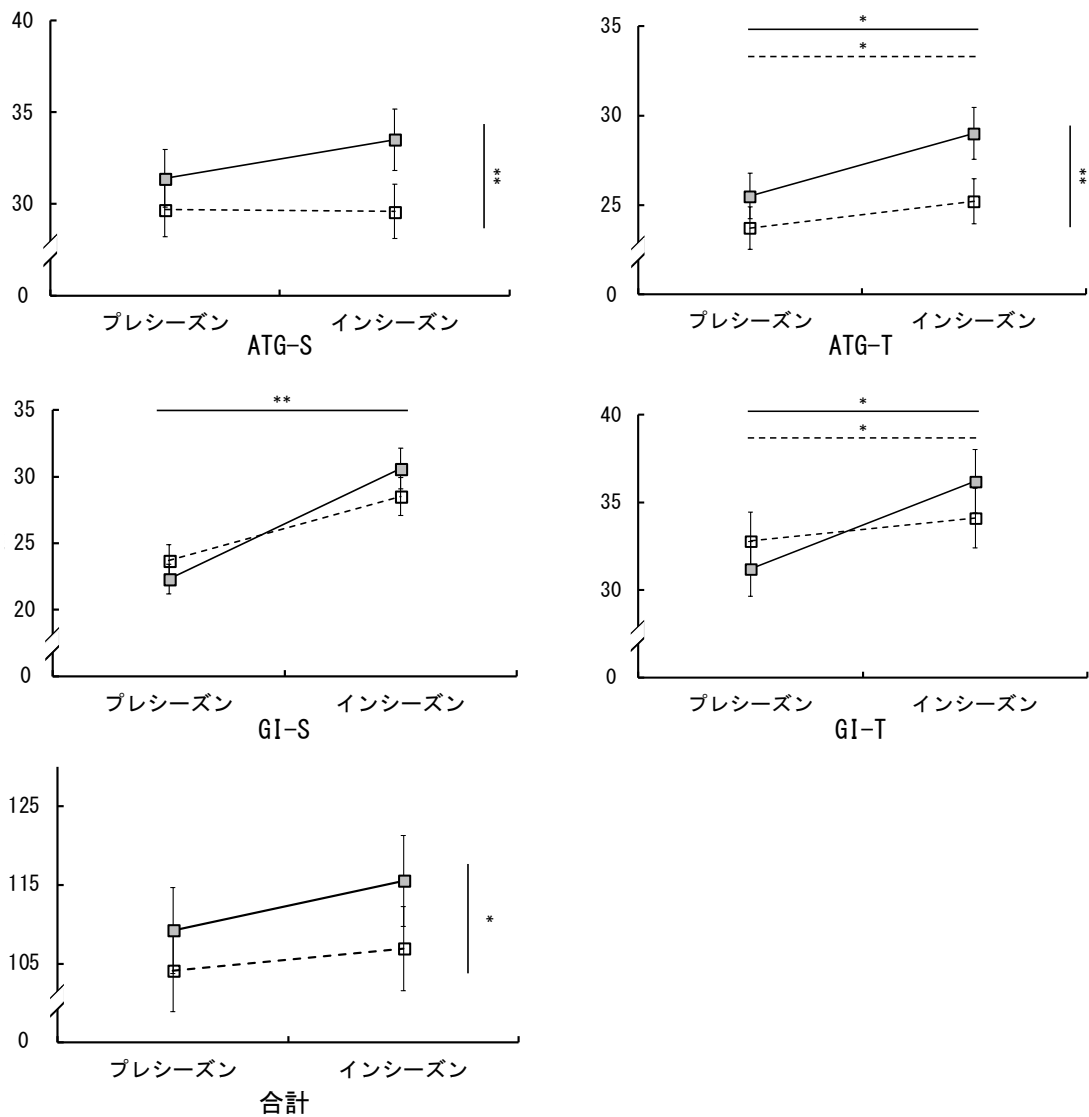
■ 出場群 (n=25)
 □ 非出場群 (n=34)

Figure 2.1 試合の出場機会および時期とCEQSとの関連

2.3.4 試合の出場機会および時期と集団凝集性との関連

Figure 2.2 に試合の出場機会および時期と GEQ との関連を示した。合計に交互作用はみられなかった [$F(1, 114) = 0.31, n.s.$]。そのため、主効果の検定を行ったところ、出場機会の主効果がみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した [$F(1, 114) = 4.65, p < .05$]。

下位尺度についても全ての項目に交互作用はみられなかった。ATG-S [$F(1, 114) = 3.02, n.s.$]、ATG-T [$F(1, 114) = 1.07, n.s.$]、GI-S [$F(1, 114) = 0.04, n.s.$]、GI-T [$F(1, 114) = 2.66, n.s.$]。主効果の検定を行ったところ、ATG-S、ATG-T、GI-S に立場の主効果がみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した（順に [$F(1, 114) = 17.38, p < .01$]、 [$F(1, 114) = 8.50, p < .01$]、 [$F(1, 114) = 17.41, p < .01$]）。また、ATG-T と GI-T に時期の主効果がみられ、ともにプレシーズンよりインシーズンの方が高い値を示した（順に [$F(1, 114) = 6.39, p < .05$]、 [$F(1, 114) = 6.22, p < .05$]）。



GEQ: Group Environment Questionnaireの邦訳版

ATG-S: Individual Attraction to the Group-Social Cohesion

ATG-T: Individual Attraction to the Group-Task Cohesion

GI-S: Group Integration-Social Cohesion

GI-T: Group Integration-Task Cohesion

** : $p < .01$, * : $p < .05$

■ 出場群 (n=25)

□ 非出場群 (n=34)

Figure 2.2 試合の出場機会および時期とGEQとの関連

2.3.5 集合的効力感に関する内省報告

本項以降ではインタビュー調査から得られた主な結果を示した。また、『』内に対象者の ID とその語りを示した。なお、資料 2.2 から資料 2.25 に全対象者から得られた逐語録を示した。

持続性については『A：やらされてでも練習後のタイヤ引きとか，綱昇りとかの基礎トレーニングを続けられたのは凄い自信になりました。』など，チームとしての継続的なトレーニングが効果的であったと語られた。また，『F：グラウンド内と外の切り替えは年間通して意識出来ていたと思います。学校とか日常生活の過ごし方はチームとして大事にしていたし，みんな意識していたと思います。』など，課外活動以外の場面に関する語りもみられた。以上から，持続性については直接的な競技練習以外のトレーニングや競技活動以外の場におけるチームとしての長期的な取り組みが影響を及ぼしやすいと示唆された。

準備については，練習や試合前のチーム内の雰囲気指し，良い準備が出来ていたという認識を持っていたことが多くの語りから確認できた。また，2 回目の質問紙調査の直前に行われた全国大会予選の準決勝に関して『B：準決勝の前日に（監督に）怒られたんですけど，それが結果的に良かったと思います。』や，『D：準決勝前や決勝前も先生（監督）が凄く怒ってくれて，引き締まったことが良い準備だったかなと思います。』など，監督との関係性について多く語られた。以上から，準備については練習や試合前のチーム内の雰囲気が反映され，それにはメンバー間だけではなく指導者からの働きかけも影響を及ぼすことが示唆された。

まとまりについては，多くの者が肯定的に語った。なかでも『G：各チームのスケジュールが違うことが多かったんですけど，昼食会などがあったから大丈夫でした。』など，夏以降に全部員で実施していた昼食会がまとまりを高めるのに貢献していたと 3 名から語られた。他には，『C：特に秋シーズンになってくると 3 年生だけのミーティング

が増えました。』や、『D：3年生のミーティングテーマは3年生が変わることと、下級生と共通の意識を持つということが多かったです。』など、チームのリーダーである3年生の取り組みがまとまりを高めるのに貢献していたことが6名から語られた。さらに『F：秋の全国大会予選の頃にはかなりまとまり始めていて、準決勝頃には完全に一つになっていました。それまではAチームを第三者的に見て、まあ勝てるやろうと思いつながりながら試合を見ていたけど、それ以降はAチームを自分たちの代表だと意識をしたり、自分たちも一緒に試合をしていると考え始めていました。』と、3年生だけのミーティングが実施され始めた時期から、チームのまとまりが更に高まっていたことが下級生の語りからも示唆された。以上から、まとまりについては競技場面以外におけるメンバー間の交流やチームリーダーである3年生がまとまることで、チーム全体のまとまりに貢献する可能性が示唆された。

努力に関しては『B：全員が努力できることがチームの強みだと思います。』や『H：朝練での先輩たちの個人練習への取り組みを見て凄いなと感じました。』のように、チームに所属するメンバー全体の努力について多く語られた。以上から、努力については自身やある特定の個人だけではなく、チーム全体における努力が反映されやすいと示唆された。

能力については『C：スクラムハーフとフルバック（ポジションの名称）の存在が大きかったです。あと、K君の存在もですね。ボックス（ポジションのユニットの名称）が外でトライを取る場面が多くなったんで。』や、『E：全国大会予選前の練習試合でO君が半年ぶりにケガから復帰したことはチームの自信になりました。』と語られた。以上から、能力についてはチーム全体に対する評価だけではなく、特定の個人の存在やプレーならびにパフォーマンスに対する評価が反映されやすいと示唆された。

2.3.6 集団凝集性に関する内省報告

ATG-S に関しては『B：あまり出来なかったんですけど、1年生の同じポジションのメンバーと食事に行ったりして、1年生の考えていることを知ろうとしました。』や『H：3年生には優しい人が多くて、支えてもらっていた感じが強いです。』など、先輩と後輩の関係に関するポジティブな語りが得られた。その一方で、『E：3年生は頑張っただけでまとめようとしてくれていましたけど、自分と同じCチームにいた先輩はちょっとなあと感じることもありました。チームのレベルによってバラバラな感じがあったかもしれないです。』など、ネガティブな語りも得られた。以上から、ATG-S については先輩・後輩など、異なる立場のメンバー間における交流と、その交流に対する評価が影響を及ぼしやすいと示唆された。

ATG-T については『G：夏までは自分のことに精一杯で、チーム目標を意識出来たのは9月頃からだったと思います。』と語られた。このように、夏以降にチーム目標や課題に対する考えが変わったという者が多かった。また、この年のチーム目標であった前年度を越えて全国ベスト4以上に入るという目標に対しては『C：高い目標設定は賛成だったんですけど、正直なところ他府県のチームに敗れることが多くて大丈夫なのかな、とは感じていました。』など、高くても難しい目標設定であるという認識や試合に敗れることによる目標達成および設定に対する不安を抱いていたことが明らかとなった。以上から、ATG-T については短期的なものではなく、長期的なチーム目標に対する個人的な認識が反映されやすいと示唆された。

GI-S について、出場群からは『A：Aチームでも出来るだけ下のチームを応援したりして、チームはまとまろうとしていたと思います。けど、下のチームがどう受け止めていたかは分かりません。多分、微妙かな。』や『D：下のチームにとっては、上（のチーム）や主力との練習は精度もやる気も上がると思います。』と語られた。一方、非出場群からは『G：夏合宿を過ぎてからはABCチームごとのチーム内の学年間の距離

はあまりなかったけど、各チーム間の距離はまだあったと思いますね。会わない日とかも結構あったんで。』や、『H：Cチームの立場からすると、AとかBチームと同じ時間にグラウンドにいないと、分けられていると感じますね、正直。そういうのは距離を感じます。』と語られた。このようにGI-Sについては、両群ともに共通意識を持つことやチームとして同じ時間を過ごすことの必要性を認識していたものの、それを実行する難しさに葛藤していた様子が窺えた。以上から、GI-Sについてはチーム全体における意思の疎通や時間の共有に対する認識が反映されやすいと示唆された。

GI-Tについては『B：春に負けかけたK高校に秋の本番で快勝したことは自信に繋がったし、チームとしてもモチベーションが上がったと思います。春の結果から危機感を持てたことが良かったと思います。』や『C：春はゲームメイクに迷いがあったかもしれないですけど、最後はスタイルが確立されて、チームとしての戦術も浸透していたと思います。』など、チームの調子が上がっていくことに関する語りがみられた。一方で『A：Cチームにとっては現実味がなくて、あまり分からなかったのではないかと思います。』や『F：Aチームは確実に意思統一されていたけど、下のチームはバラツキがあったかもしれないですね、分からないですけど。』といったようにチーム間での課題共有の難しさを示唆する語りも得られた。以上から、GI-Tについてはチーム全体の調子および動機に対する評価や、チーム全体に共有された認識の程度に対する評価が影響を及ぼしやすいと示唆された。

2.4 考察

2.4.1 試合の出場機会および時期と集合的効力感

CEQSの合計において、出場群と非出場群ともにプレシーズンからインシーズンにかけて高まり、インシーズンに限っては非出場群より出場群の方が高い値を示した。つま

り、集合的効力感は試合の出場機会に関わらずプレシーズンからインシーズンにかけて高まったが、試合の出場機会を得ていた方がより顕著に高まったことが明らかとなった。

持田ほか（2015）は、集団に所属する各構成員が集団の成功に向けて責任ある行動を取ることが集合的効力感の高まりに貢献すると論じた。また、松竹ほか（2018）は、集合的効力感を高めるためには自身が試合で活躍することを意識させることが有効であると述べた。つまり、自身が試合に出場することで、勝利するというチームの課題達成に、具体的かつ直接的に関わることが集合的効力感を高める要因の一つであると解釈できる。したがって、インシーズンにおいて、試合への出場機会というチームの勝利に直接的に関わる機会に差が生じたことが、インシーズンにおける出場群と非出場群の集合的効力感に差を生じさせた要因であると示唆された。

また、Jowett et al.（2012）はチームが用いている戦術に対するメンバーの満足度が集合的効力感に影響を及ぼすことを明らかにしている。本章における内省報告をみると『C：全国大会の予選の頃には練習で準備をしてきた形で得点を取ることが多くなってきて、狙い通りのプレーが出来る回数が増えました。』や『D：夏以降は練習とミーティングを続けてきたおかげで、ハーフ団（ポジションのユニットの名称）とか、リーダーと他の選手が考えていることがフィットすることが多くなってきて、チームとしての攻撃の精度が高まってきたなと感じてました。』といった、戦術に対する理解や満足度に関する内容が確認されたが、これらは全て出場群のみから示されたものであった。つまり、戦術に対する満足度には試合への出場機会が関係している可能性が高く、この点もインシーズンに限って、非出場群より出場群の方が集合的効力感が高まっていた要因の一つであると推察された。特にチームにとって重要な試合が続く場合は、勝敗に強い影響を及ぼすと考えられる戦術に対する満足度が反映されやすい可能性があると考えられる。

他方、両群ともにプレシーズンからインシーズンにかけて集合的効力感が高まった要因として、次の3つがあげられた。

1つ目は、2回目の質問紙調査前の試合の成績の影響が考えられた。A 高等学校ラグビー部の年間成績を見ると、前期にあたる1月から6月までは12勝13敗1分であった。それに対して、後期にあたる7月から2回目の質問紙調査実施までの成績は15勝9敗1分と概ね良好な成績であった。加えて、2回目の質問紙調査実施前の5試合では敗けておらず、直近3試合では大差で勝利をしていた。先行研究では、集合的効力感過去の試合成績や事前のパフォーマンスと正の関連を有することが示唆されており（Chow and Feltz, 2008 ; Heuze et al. , 2006）, 本章においてもこれらが両群の集合的効力感を高めた要因の一つであると示唆された。さらに、集合的効力感に対しては過去の経験が最も強い影響を及ぼすと述べられており（Bandura, 1997 ; George and Feltz, 1995 ; Zaccaro et al. , 1995）, 本章の結果はこれらを支持するものであった。

2つ目の理由として、2回目の質問紙調査直前までのトーナメントを勝ちあがるという経験の影響が考えられた。トーナメントは勝ち上がることで対戦チームのレベルも上がり、自チームには新たな課題が課せられることになる。そして、それらを達成するためには、より高いパフォーマンスの発揮が求められる。Ronglan (2007) は、行動の達成を経験することが集合的効力感を高めるために有効であると論じたが、内省報告をみると『C：勝ち上がることが一番自信になったし、徐々にチームの気持ちが一つになっていったと思います。』や『G：準決勝の頃には敗ける気がしなかったです。優勝という目標が見えてきて現実的になっていたし、勢いがついていました。』など、トーナメントを勝ち上がることで動機や自信が高まっていく様子が伺えた。このように、本章の対象においてもトーナメントを勝ち上がるたびに行動の達成経験が増していた可能性があり、これらが集合的効力感を高めた要因の一つであったと推察された。

3つ目の理由として、指導者からの働きかけの影響が考えられた。Jowett et al. (2012)によると、メンバーと指導者の良好な関係性が集合的効力感を高めるとされている。本章においても対象者8名のうち6名の語りから、指導者からの指導が集合的効力感の高まりに貢献していた可能性が示唆された。具体的には『C：（秋の全国大会予選の）準決勝の前日の練習でミスがあって、先生（監督）にすごく怒られて何度も同じトレーニングを繰り返しましたが、それが不安の解消になって、翌日の良い結果に繋がったと思います。』や『H：どの試合前でも先生（監督）が怒ってくれて、それ自体がチームの良い準備となっていたと思います。』など、指導者からの指導が個人ならびにチームの動機の高まりに貢献していたと推察された。以上から、指導者からの有効な働きかけが集合的効力感の高まりに影響を与えたと示唆された。

2.4.2 試合の出場機会および時期と集団凝集性

GEQの合計に交互作用はみられなかった。また、出場機会の主効果はみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した。つまり、時期に関わらず非出場群より出場群の方が集団凝集性が高まっていたことが明らかとなった。なお、GEQの4つの下位尺度のうちATG-S、GI-S、ATG-Tに合計と同様の結果が示された。したがって、これらの3項目が特に合計の値に影響を及ぼしたと考えられた。

ATG-SとGI-Sは社会凝集性を反映し、それぞれ「チーム内の個人が、他のメンバーとの人間関係にどの程度魅力を感じているか」と「所属チームがどの程度、人間関係に関することでまとまっているか」を表す項目である（河津ほか, 2012b）。この2つの項目に該当する内省報告をみると『H：試合メンバーと同じ時間にグラウンドにいないことがちよくちよくあって、チームとして距離感を感じることはありました。』や、『G：夏合宿を過ぎてからはABCチームごとのチーム内の学年間の距離はあまりなかったけど、各チーム間の距離はまだあったと思いますね。会わない日とかも結構あったんで。』

他には『F：Cチームの立場からすると、AとかBチームと同じ時間にグラウンドにいないと、分けられていると感じますね、正直。そういうのは距離を感じます。』など、チーム内のグレードによってスケジュールが異なるケースがあり、これらが要因となって、下のグレードのメンバーは上のグレードのメンバーに対して距離を感じていたことが示唆された。また、『A：Aチームでも出来るだけ下のチームを応援したりして、チームはまとまろうとしていたと思います。けど、下のチームがどう受け止めていたかは分からないです。多分、微妙かな。』のように、上のグレードのメンバーの語りからもチームとしてまとまることに苦慮した様子が伺えた。その他、Sullivan and Short (2011) や徳永 (2005) によると、チームのまとまりを高めるためにはメンバー間における率直な意見交換や問題解決のための議論をする場を提供することが有効であると示されている。しかし、内省報告では『A：先生（監督）からの指示に対しては、その時ごとに試合に出ているメンバーが中心となってミーティングをしていました。』と語られており、A 高等学校ラグビー部においては、時期に関わらず出場群を中心にチームミーティングが行われるケースが多かったことが示唆された。以上のことから、日常的なチーム練習やミーティングなどのチーム活動における出場群と非出場群の共有時間ならびに意思疎通を図る機会が十分ではなかったことが、両群の ATG-S と GI-S の得点に差が生じた要因の一つであると考えられた。

また、社会凝集性を高めるには競技場面から離れたところで感じるメンバーとの情緒的な繋がりも必要であり、そのためには余暇活動の共有が有効であると指摘されている (Rainey and Schweickett, 1988 ; 筒井・土屋, 2016) 。しかし、A 高等学校ラグビー部は通常のチーム練習以外にも早朝やチーム練習後の個別練習などを積極的に取り入れていた。また、これらの活動はインシーズンになるとさらに増え、全国大会予選を控えた頃にはチームミーティングなどの時間も増していた。したがって、A 高等学校ラグビー部においては、メンバー間で共有される余暇活動の時間は決して十分ではなかったと予

測された。さらに、内省報告においても8名のいずれからも余暇活動およびそれらに伴うメンバー間の交流については語られておらず、『H：チーム全体でいうと、もっと上級生と下級生の交流が多くてもいいかなと思います。学校生活とか私生活も含めて。』など、メンバー間の交流の不足を認識する語りもみられた。なお、本章における両群の内訳に鑑みると、上級生の多くは出場群であり、下級生の多くは非出場群であったと考えられる。以上から、競技場面以外におけるメンバー間の交流が十分でなかったこともATG-SとGI-Sの結果に影響を及ぼした要因の一つであると示唆された。

課題凝集性を構成するATG-Tについては、「試合のとき、自分の出場時間に満足している」という試合の出場機会に対する直接的な質問が含まれており、この点が非出場群におけるATG-Tの値を低下させた要因の一つであると示唆された。また、「このチームは自分のパフォーマンスを伸ばす機会を十分に与えてくれている」という質問に対しては、『F：試合メンバーは直接、先生（監督）から指導されることが多かったんですけど、自分は少なかったので相手にされていないのかな、と思うことがたまにありました。』という語りから分かるように、出場群と非出場群では度々、練習時間や環境が異なっていたことが推察された。以上のことから、自身の試合の出場機会が少ないことや、指導者から平等な指導を受けることが出来なかったという認識が、非出場群におけるATG-Tの値を低下させた要因の一つであると推察された。

2.5 まとめ

本章では、高い競技レベルを有する高校のラグビー1チームを対象に、試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連を経時的な視点から検討した。また、集合的効力感および集団凝集性の変化に影響を及ぼした要因について、内省報告を用いて検討した。

集合的効力感については、インシーズンに限り非出場群より出場群の方が高まっていた。その要因として、インシーズンにおいて、試合への出場機会というチームの勝利に直接的に関わる機会に差が生じたことが影響を及ぼしたと考えられた。加えて、内省報告の結果から、実際に試合に出場していた出場群のみが戦術に対する理解や満足度を得ていた可能性が示唆され、この点も集合的効力感に影響を及ぼしたと推察された。また、出場群・非出場群ともにプレシーズンからインシーズンにかけて集合的効力感が高まっていたことが明らかとなった。その要因として、2回目の質問紙調査前の良好なチームの成績とトーナメントを勝ち上がる経験ならびに指導者との良好な関係性が影響を及ぼしたと示唆された。

集団凝集性については、時期に関わらず非出場群より出場群の方が高まっていたことが明らかとなった。その要因として、両群における共有時間ならびに意思疎通を図る機会が十分ではなかったことが影響を及ぼしたと示唆された。また、非出場群において、自身の試合の出場機会が少ないことや指導者から平等な指導を受けることが出来なかったという認識が、集団凝集性を低下させた要因の一つであると推察された。

以上により、同一チームに所属していても試合の出場機会が異なることによって、集合的効力感および集団凝集性に差が生じることが明らかとなった。また、競技スポーツチームにおける集合的効力感および集団凝集性を検討する際は、試合の出場機会やチームのパフォーマンスならびに勝敗、他には時期などを考慮することが必要であると示唆された。ただし、本章の結果は単一のチームから示されたものである。そのため、得られた知見をより一般化するためには横断的な検討も必要であろう。

第3章

異なる教育段階と

集合的効力感および集団凝集性との関連

3.1 はじめに

競技スポーツチームにおける集合的効力感および集団凝集性を検討する際には、教育段階の違いを考慮する必要があると考える。例えば筒井・土屋（2016）は、大学生の体育会部活動の特徴として、部員数が多いためにレギュラーメンバーとそれ以外のメンバーに分かれて練習を行うケースが少なくないこと、そしてそれに伴いチーム全体のまとまりを維持することが困難になることを示唆している。その他、教育段階が異なることにより、集合的効力感の下位概念である自己効力感に差が生じる（神藤ほか, 2017）ことや、大学生より高校生の方が所属チームに対する一体感が高い（山田ほか, 2014）ことが示唆されている。以上から、同じ競技を行うスポーツチームであっても、教育段階が異なることにより、集合的効力感および集団凝集性が異なる可能性がある。

これまでにラグビーチームを対象に集合的効力感および集団凝集性を検討した研究はいくつかみられる。しかし、いずれも高校生のみ（勝田・栗木, 1994；菅田・西山, 1984；寺田ほか, 1996）や大学生のみ（丹羽ほか, 1992；岡本ほか, 1998）など、教育段階を限定した検討に留まっており、競技レベルや時期なども限定されていない。したがって、対象を限定した上で異なる教育段階に着目し、それぞれの特徴や差を比較・検討することが必要であろう。

以上から、本章の目的は、異なる教育段階と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討することとした。

3.2 方法

3.2.1 調査内容と時期

本章では郵送による質問紙調査を実施した。質問紙はフェイスシートおよび Collective Efficacy Questionnaire for Sports の邦訳版（以下、「CEQS」と略す）と Group Environment Questionnaire の邦訳版（以下、「GEQ」と略す）から構成した。調査期間は

20YY年10月から20YY年+1年12月とし、競技スポーツにおいて重要であると考えられるインシーズンとした。また、対象者間の統制を図るため、全ての調査は調査直前の公式戦（以下、「前の試合」と略す）から1週間後以内かつ、調査直後の公式戦（以下、「次の試合」と略す）前1週間以内の期間で実施した。加えて、いずれの試合も試合前から明らかな勝敗予測がつかないように、可能な限り実力が拮抗したチーム同士の試合の前後とした。その内訳は、高校生が各都道府県における全国大会予選の準決勝もしくは決勝戦ならびに各地域の選抜大会および全国大会とした。また、大学生は各地域における最上位のリーグ戦もしくは順位決定トーナメントならびに全国大会予選の準決勝と決勝戦であった。

3.2.2 対象者

対象者は高校と大学の各5チームに所属するマネージャーやトレーナーなどのスタッフを除いた全男子選手にあたる792名であった。その中から、調査回答の記入漏れや不備があった者を除外し、766名（有効回答率96.7%）を分析対象とした。さらに、高校生と大学生それぞれにおいて、前の試合と次の試合（以下、「両試合」と略す）に登録選手としてベンチ入りし、試合に出場する可能性があった者を出場群、どちらか一方もしくは両試合においてベンチ入りせず、試合に出場する可能性がなかった者を非出場群に分類した。その内訳は、高校生の出場群116名と非出場群206名、大学生の出場群108名と非出場群336名であった。なお、全ての対象チームは両試合で勝利しており、全国大会ベスト16以上の成績を残している競技レベルの高いチームであった。Table 3.1に対象チームの属性ならびに前の試合と次の試合の形式を示した。

Table 3.1 対象チームの属性ならびに前の試合と次の試合の形式

高校生					大学生				
チーム	過去の最高戦績	前の試合の形式	次の試合の形式	チーム	過去の最高戦績	前の試合の形式	次の試合の形式		
A (n=97)	全国大会優勝	トーナメント	トーナメント	F (n=72)	全国大会ベスト16	トーナメント	リーグ戦		
B (n=39)	全国大会ベスト16	トーナメント	トーナメント	G (n=60)	全国大会ベスト16	リーグ戦	リーグ戦		
C (n=69)	全国大会ベスト4	トーナメント	トーナメント	H (n=102)	全国大会優勝	リーグ戦	リーグ戦		
D (n=42)	全国大会ベスト16	トーナメント	トーナメント	I (n=97)	全国大会ベスト4	リーグ戦	リーグ戦		
E (n=75)	全国大会ベスト4	トーナメント	トーナメント	J (n=113)	全国大会優勝	リーグ戦	リーグ戦		

前の試合は調査直前の公式戦を指し、次の試合は調査直後の公式戦を指す

3.2.3 倫理的配慮

全ての調査はヘルシンキ宣言の精神に基づき、十分な倫理的配慮のもと実施した。調査に先立ち、部長や監督などチームの代表者に、口頭および書面にて研究の目的と内容やプライバシーの保護について説明をした。その後、自署によって同意を得た上で、質問紙を郵送した。各対象者にも、調査実施前に書面にて上記と同様の説明と研究参加は自由意志であることを伝え、自署によって研究協力の同意を得たこととした。調査終了後はチームの代表者が調査用紙の回収と封緘ならびに返送をした。なお、その際には記入内容を確認することがないように依頼をした。

3.2.4 分析方法

はじめに全対象者の CEQS および GEQ の合計得点と下位尺度それぞれの得点を算出した。次に、独立変数を教育段階（高校生・大学生）と出場機会（出場群・非出場群），従属変数を各尺度の合計得点および下位尺度得点とする，2 要因被験者間計画による分散分析を行なった。交互作用がみられた場合には単純主効果の検定を行い，交互作用がみられなかった場合には主効果の検定を行った。統計処理には IBM SPSS statistics 25 を用い，有意水準は $p < .05$ とした。

3.3 結果

3.3.1 CEQS の内的整合性

全対象者における CEQS の各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性を示した (Table 3.2)。信頼性を示すクロンバックの α 係数が .90 から .92 の範囲となり，いずれも高い内的整合性が確認できた。

Table 3.2 CEQSにおける各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性 ($n=766$)

下位尺度	質問項目	平均値 ± 標準偏差	クローンバック α 係数
持続性	われわれのチームは、プレッシャーがあってもいつも通りのプレーができる	7.18 ± 1.98	.90
	われわれのチームは、困難な状況であってももちこたえることができる	7.94 ± 1.90	
	われわれのチームは、チャンスがほとんど無いような時でも、試合に集中できる	7.64 ± 2.02	
	われわれのチームは、ベストメンバーでなくても良いプレーができる	7.59 ± 1.97	
準備	われわれのチームは、試合に向けての準備をすることができる	8.11 ± 1.90	.91
	われわれのチームは、試合のために心理的なコンディションを整えることができる	7.85 ± 1.92	
	われわれのチームは、試合のために身体的なコンディションを整えることができる	7.80 ± 2.09	
	われわれのチームは、良い作戦を立てることができる	7.79 ± 1.95	
まとめ	われわれのチームは、問題を解決できる	7.78 ± 1.87	.91
	われわれのチームは、一致団結できる	8.41 ± 1.78	
	われわれのチームは、常に前向きな態度でいることができる	7.81 ± 1.93	
	われわれのチームは、コミュニケーションを十分に取ることができる	7.89 ± 1.88	
努力	われわれのチームは、努力を惜しまずプレイできる	8.21 ± 1.82	.92
	われわれのチームは、能力を発揮できる	7.90 ± 1.82	
	われわれのチームは、情熱を見せることができる	8.18 ± 1.89	
	われわれのチームは、チームにおこる様々な障害を乗り越えることができる	8.04 ± 1.87	
能力	われわれのチームは、相手チームに勝つことができる	8.11 ± 1.84	.92
	われわれのチームは、相手チームよりも実力を発揮できる	7.79 ± 1.90	
	われわれのチームは、相手チームよりも良いパフォーマンスをすることができる	7.67 ± 2.02	
	われわれのチームは、相手チームよりも技術的に高いレベルのプレイができる	7.94 ± 1.85	

CEQS: Collective Efficacy Questionnaire for Sportsの邦訳版

3.3.2 GEQ の内的整合性

全対象者における GEQ の各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性を示した (Table 3.3) . 信頼性を示すクロンバックの α 係数が.78 から.89 の範囲となり, いずれも高い内的整合性が確認できた.

Table 3.3 GEQにおける各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性 ($n=766$)

下位尺度	質問項目	平均値 ± 標準偏差	クロンバック α 係数
ATG-S	チームのメンバーとの付き合いは楽しい	8.14 ± 1.53	.88
	シーズンが終わって、チームのメンバーと会わなくなると寂しい	7.15 ± 2.04	
	親しい友人がチームの中に数人いる	8.11 ± 1.54	
	チーム以外の者との付き合いよりも、チームメンバーとの付き合いのほうが楽しい	7.40 ± 1.82	
	このチームでの活動は自分が所属している集団の中でも最も大切な集団のひとつである	8.03 ± 1.59	
ATG-T	試合のとき、自分の出場時間に満足している	6.49 ± 2.30	.81
	チームが試合に勝とうとする意欲に満足している	7.49 ± 1.72	
	このチームは自分のパフォーマンスを伸ばす機会を十分に与えてくれている	7.34 ± 1.80	
	このチームのプレースタイルが気に入っている	7.02 ± 1.88	
GI-S	われわれのチームは、それぞれで出かけるよりも、チームメンバーと一緒に出かけることを好む	7.18 ± 1.71	.78
	われわれのチームは、チームのメンバー同士でパーティ（食事会など）をよくひらく	6.30 ± 2.10	
	われわれのチームは、シーズンオフの時でもチームのメンバーと一緒に過ごしたいと思っている	7.09 ± 1.83	
	われわれのチームは、試合や練習以外の時でも仲良しだ	7.85 ± 1.55	
	われわれのチームは、一致団結して目標を達成しようとしている	7.73 ± 1.62	
	われわれのチームは、試合で負けたり成績が悪く思うときは、チームメンバー全員が責任を感じる	6.89 ± 1.78	
	われわれのチームは、練習中にうまくできないメンバーがいるとき、メンバーみんなでサポートする	7.91 ± 1.53	
GI-T	われわれのチームのメンバーは、チーム目標が一致している	7.01 ± 1.68	.89
	われわれのチームのメンバーは、試合や練習のとき、それぞれの役割や責任などについて遠慮なく話し合う	7.20 ± 1.67	

GEQ : Group Environment Questionnaireの邦訳版

ATG-S : Individual Attraction to the Group-Social Cohesion

ATG-T : Individual Attraction to the Group-Task Cohesion

GI-S : Group Integration-Social Cohesion

GI-T : Group Integration-Task Cohesion

3.3.3 異なる教育段階と集合的効力感との関連

Figure 3.1 に異なる教育段階および試合の出場機会と CEQS との関連を示した。なお、本項以降ではグラフ上に尺度得点と標準偏差を示すために横棒グラフを用いた。

合計に交互作用がみられた [$F(1, 762) = 15.96, p < .01$]。そのため、単純主効果の検定を行ったところ、出場群と非出場群それぞれに教育段階の単純主効果がみられ、いずれも大学生より高校生の方が高い値を示した（順に [$F(1, 762) = 50.54, p < .01$] , [$F(1, 762) = 11.71, p < .01$]）。また、高校生と大学生にも出場機会の単純主効果がみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した（順に [$F(1, 762) = 61.42, p < .01$] , [$F(1, 762) = 5.87, p < .05$]）。

下位尺度についても全ての項目に交互作用がみられた。持続性 [$F(1, 762) = 9.64, p < .01$] , 準備 [$F(1, 762) = 5.05, p < .05$] , まとまり [$F(1, 762) = 20.73, p < .01$] , 努力 [$F(1, 762) = 9.40, p < .01$] , 能力 [$F(1, 762) = 17.70, p < .01$]。

単純主効果検定の結果、全ての下位項目で出場群に教育段階の単純主効果がみられ、いずれも大学生より高校生の方が高い値を示した（持続性 [$F(1, 762) = 45.12, p < .01$] , 準備 [$F(1, 762) = 50.73, p < .01$] , まとまり [$F(1, 762) = 31.70, p < .01$] , 努力 [$F(1, 762) = 31.90, p < .01$] , 能力 [$F(1, 762) = 30.93, p < .01$]）。また、持続性、準備、努力の非出場群にも教育段階の単純主効果がみられ、いずれも大学生より高校生の方が高い値を示した（順に [$F(1, 762) = 19.69, p < .01$] , [$F(1, 762) = 43.29, p < .01$] , [$F(1, 762) = 8.50, p < .01$]）。

一方、出場機会の単純主効果については全ての下位項目の高校生にみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した（持続性 [$F(1, 762) = 39.24, p < .01$] , 準備 [$F(1, 762) = 24.08, p < .01$] , まとまり [$F(1, 762) = 76.84, p < .01$] , 努力 [$F(1, 762) = 35.87, p < .01$] , 能力 [$F(1, 762) = 60.80, p < .01$]）。また、持続性、まとまり、能力の大学生にも出場機会の単純主効果がみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い

値を示した（順に $[F(1, 762) = 4.27, p < .05]$, $[F(1, 762) = 6.70, p < .01]$, $[F(1, 762) = 4.31, p < .05]$) .

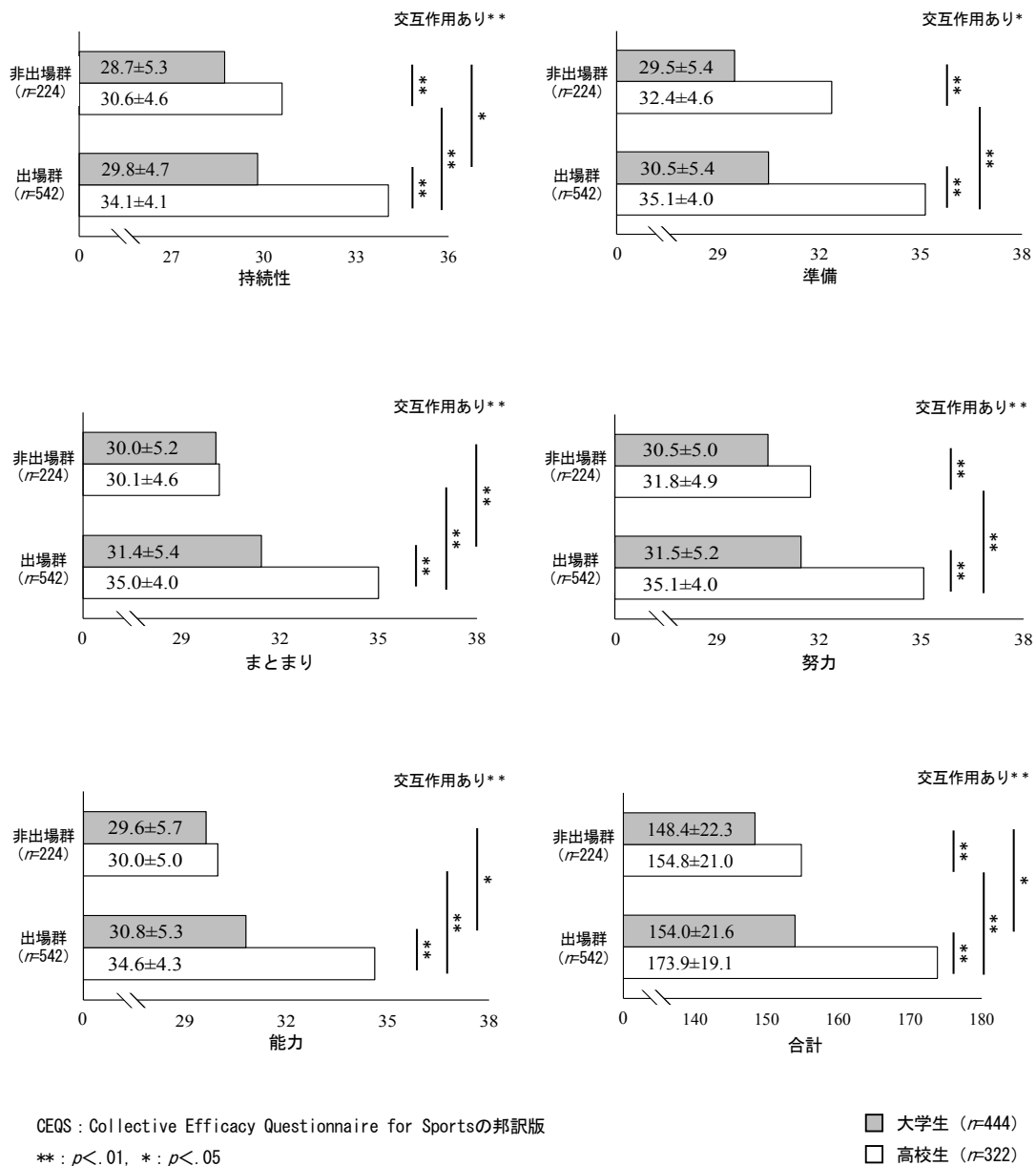


Figure 3.1 異なる教育段階および試合の出場機会とCEQSとの関連

3.3.4 異なる教育段階と集団凝集性との関連

Figure 3.2 に異なる教育段階および試合の出場機会と GEQ との関連を示した。合計に交互作用はみられなかった [$F(1, 762) = 0.47, n.s.$]。一方、教育段階の主効果はみられ、大学生より高校生の方が高い値を示した [$F(1, 762) = 59.33, p < .01$]。また、出場機会の主効果もみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した [$F(1, 762) = 30.83, p < .01$]。

下位尺度についても全ての項目に交互作用はみられなかった。ATG-S [$F(1, 762) = 0.03, n.s.$]、ATG-T [$F(1, 762) = 0.72, n.s.$]、GI-S [$F(1, 762) = 0.10, n.s.$]、GI-T [$F(1, 762) = 1.69, n.s.$]。一方、全ての項目に教育段階の主効果がみられ、いずれも大学生より高校生の方が高い値を示した (ATG-S [$F(1, 762) = 26.80, p < .01$]、ATG-T [$F(1, 762) = 41.23, p < .01$]、GI-S [$F(1, 762) = 13.05, p < .01$]、GI-T [$F(1, 762) = 67.85, p < .01$])。また、出場機会の主効果も全ての下位項目にみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した (ATG-S [$F(1, 762) = 14.33, p < .01$]、ATG-T [$F(1, 762) = 33.24, p < .01$]、GI-S [$F(1, 762) = 13.31, p < .01$]、GI-T [$F(1, 762) = 15.89, p < .01$])。

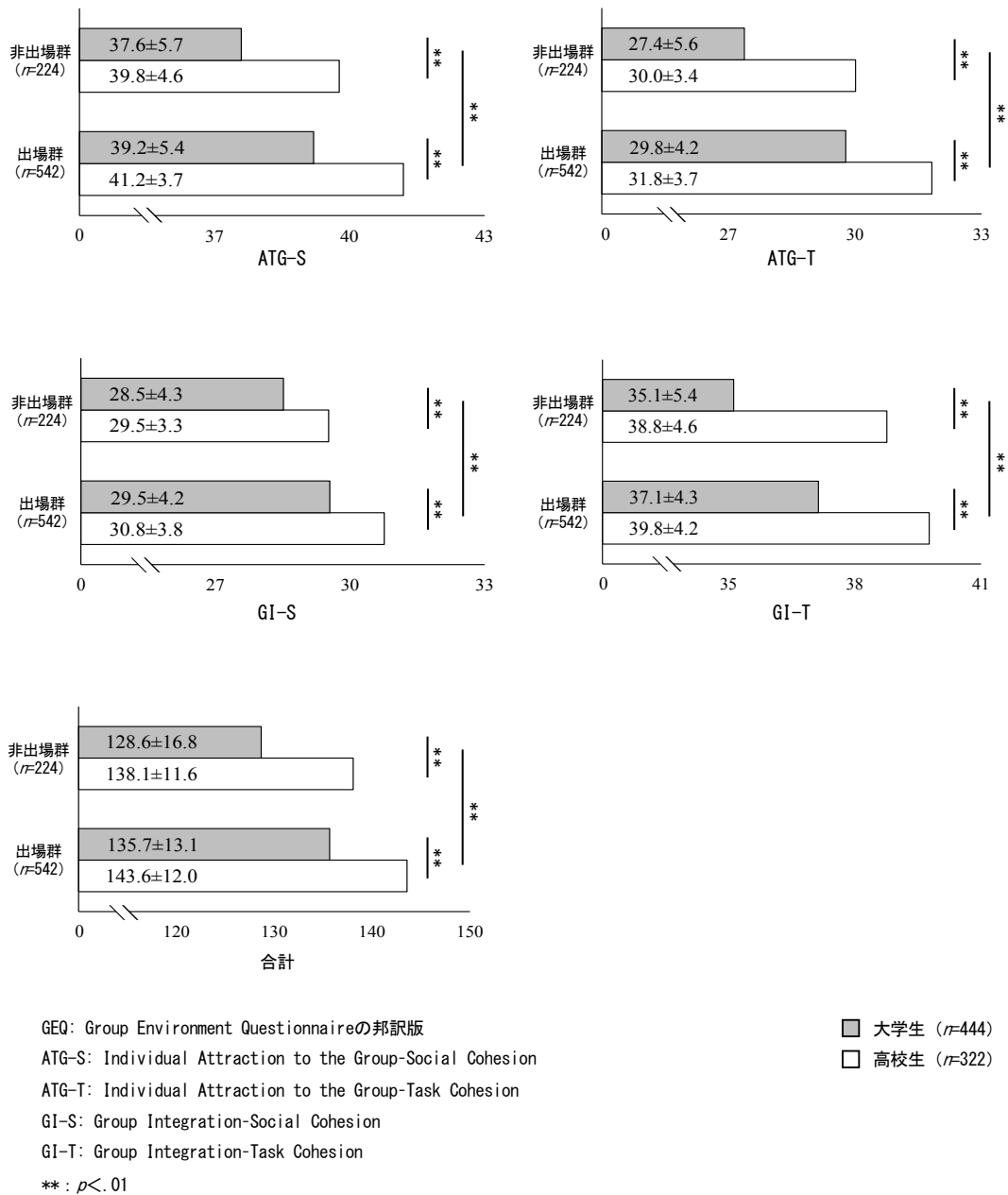


Figure 3.2 異なる教育段階および試合の出場機会とGEQとの関連

3.4 考察

3.4.1 異なる教育段階と集合的効力感

CEQS の合計において、非出場群より出場群の方が高い値を示し、その差は大学生より高校生において大きくなった。また、大学生より高校生の方が高い値を示し、その差は非出場群より出場群において大きくなった。つまり、高校生の出場群は特に高い値を示した。以上から、大学生より高校生の方が集合的効力感が高く、教育段階による差は試合の出場機会を得ていることで、より顕著に表れることが明らかとなった。

集合的効力感とは自己効力感を集団レベルに拡大した概念である (Feltz et al., 2007)。また、神藤ほか (2017) は競技種目を問わず横断的に調査をした結果、高校生においてはチーム競技を専門とすることと、試合の出場機会に恵まれているレギュラーであることが自己効力感を高める要因であると論じた。そのため、本章で対象となった高校生においても出場群の方が高い自己効力感を有していた可能性があり、特に競技レベルの高いチームにおいては、試合の出場機会を得ていることがこの傾向を強めると推察された。したがって、この点が本章における高校生の出場群における集合的効力感を特に高めた要因の一つであると示唆された。

他方、Tatsumi and Tsuchiya (2018) は集合的効力感を高めるためには、試合における勝利経験を得ることが有効であると論じた。その上で、対象試合の試合形式について、リーグ戦よりもノックアウト方式であるトーナメント戦における勝利の方が集合的効力感の高まりに強い影響を与えると述べた。加えて、試合に出場し、勝利ならびにトーナメントを勝ち上がるというチームの目標達成に直接的に関わるという経験を得ているか否かが、メンバー間の集合的効力感の高まりに更に差を生じさせることを示唆した。本章の対象試合をみると、大学生の前の試合におけるトーナメント戦は 1 試合あり、1 勝であった。一方、高校生は全 5 試合がトーナメント戦であり、全て勝利であった。つまり、調査直前の段階で高校生の方が集合的効力感を高めやすく、なおかつ試合への出

場機会によりメンバー間の集合的効力感に差が生じやすいトーナメント戦における勝利という経験を得ていた。そのため、この点が本章における集合的効力感の結果に影響を及ぼした可能性が示唆された。なお、このような教育段階ごとに試合形式が異なることは、我が国のラグビー競技においては特段珍しいことではない。現在、我が国の大学ラグビーの主要な大会は各地域におけるリーグ戦である。その後、各地域のトップリーグの上位チーム、もしくは一部の順位決定および地区代表決定トーナメントを勝ち抜いたチームのみによる全国大会がトーナメント方式で実施されている。そのため、トーナメント戦を経験する大学ラグビーチームは一部のみであると思われる。その一方で、高校生においては春・冬の15人制ラグビーおよび夏の7人制ラグビーを合わせた3度の全国大会と、それらに伴う地域予選が行われる。それらの試合形式は一部で予選リーグが実施されるものの、そのほとんどはトーナメント方式である。つまり、高校生は日常的に集合的効力感の高まりに影響を与えるトーナメント戦を多く経験することになる。さらに、本章のように競技レベルの高いラグビーチームに限定すると、高校生はトーナメント戦において多くの勝利経験を得ることが予測されるため、特に試合の出場機会の有無によりメンバー間の集合的効力感に差が生じやすくなると推察された。

3.4.2 異なる教育段階と集団凝集性

GEQの合計において、試合の出場機会に関わらず大学生より高校生の方が高い値を示した。また、教育段階に関わらず非出場群より出場群の方が高い値を示した。

先行研究により、高校生は目標に向かってチームが一致団結して戦う傾向が強い（藤田・野本, 2015）ことや、大学生より高校生の方が所属チームに対する一体感が強い（山田ほか, 2014）ことが示されている。これらの研究例と本章で得られた結果を合わせると、大学生より高校生の方が高い集団凝集性を有する傾向にあり、これらは試合の出場機会の影響を受けないことが推察された。

他方、武良ほか（1998）は高校生と大学生を比較し、高校生の人間関係は学校環境を主として形成されやすいことを明らかにした。ここで示した人間関係とは、他者との情緒的な繋がりとして、集団凝集性の構成概念である社会凝集性に反映されると考えられる。そのため、本章の対象のように同じ学校に通う生徒らで構成されるチームにおいては、大学生より高校生の方が集団凝集性の構成概念である社会凝集性を高く評価する傾向にあったと示唆された。また、中村ほか（2009）は高校生以下と比べると、大学生はチームの課題よりも自身の課題達成のための行動を優先する傾向にあると述べた。そのため、大学生はチームとしての目標達成やその過程のチームとしての取り組みよりも、自身の課題や目標を達成することを優先する傾向にあると推察された。つまり、高校生と比較をすると大学生は集団凝集性の構成概念である課題凝集性を積極的には評価しない可能性があると考えられた。以上により、教育段階の違いによって生じる集団凝集性の差には、人間関係に伴う社会凝集性および競技活動への動機に伴う課題凝集性の差が影響を及ぼしたと推察された。

3.5 まとめ

本章では、教育段階と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した。その結果、集合的効力感においては大学生より高校生の方が高く、特に高校生の出場群において高まっていた。つまり、集合的効力感における教育段階の差は試合の出場機会を得ていることで、より顕著に表れることが明らかとなった。この要因として、集合的効力感の下位概念である自己効力感による影響が示唆された。

一方、集団凝集性においては試合の出場機会に関わらず、大学生より高校生の方が高いことが明らかとなった。この要因として、人間関係に伴う社会凝集性および競技活動への動機に伴う課題凝集性の差が影響を及ぼしたと推察された。

本章から得られた結果は、同一競技を専門とし、同等の競技レベルや時期であったとしても、教育段階が異なることにより競技スポーツチームの集合的効力感および集団凝集性が異なることを示唆するものであった。

第4章

将来の勝敗と

集合的効力感および集団凝集性との関連

4.1 はじめに

競技スポーツに携わる者が最も関心を示すものの1つとして、試合の勝敗が考えられる。集合的効力感と集団凝集性は、試合で勝つことで高まり、敗けることで低下することが明らかとなっている (Carron et al., 2002 ; Feltz and Lirgg, 1998) 。しかし、競技レベルならびに時期や対戦チームとの優劣などの複数の条件を設定した上で、横断的に勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した研究は見当たらない。また、両概念が集団の状態的な概念 (阿江, 1985a ; Bandura, 1997 ; Chow and Feltz, 2008 ; Kozub and Button, 2000) であることから、寮概念と将来の試合における勝敗との関連を検討することは、勝敗を競う競技スポーツ集団の指導や運営に携わる者に有益な示唆を提供すると考えられる。

他方、寺田ほか(1996)はラグビーは番狂わせが起こらない競技であるとしながらも、これは大学生以上に該当することとし、高校生においては集団の心理的要因の影響により、大方の戦前の勝敗予測を覆す結果が起こりやすいと述べた。しかし、これらは一般論として示されるに留まっており、集団の心理的要因と将来の勝敗との関連は未だ検討されていない。

以上から、本章の目的は高校生と大学生それぞれにおいて、調査実施直後の試合 (以下、「次の試合」と略す) の勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討することとした。

4.2 方法

4.2.1 調査内容と時期

本章では郵送による質問紙調査を実施した。質問紙はフェイスシートおよび Collective Efficacy Questionnaire for Sports の邦訳版 (以下、「CEQS」と略す) と Group Environment Questionnaire の邦訳版 (以下、「GEQ」と略す) から構成した。調査期間は

20YY年10月から20YY年+2年7月とし、第3章と同様に競技スポーツにおいて重要であると考えられるインシーズンとした。また、対象者間の統制を図るため、全ての調査は調査直前の公式戦（以下、「前の試合」と略す）から1週間後以内かつ、次の試合の前1週間以内の期間で実施した。なお、いずれの試合も試合前から明らかな勝敗予測がつかないように、可能な限り実力が拮抗したチーム同士の試合の前後とした。その内訳は、高校生が各都道府県における全国大会予選の準決勝もしくは決勝戦ならびに各地域の選抜大会および全国大会とした。また、大学生は各地域における最上位のリーグ戦もしくは順位決定トーナメントならびに全国大会予選の準決勝と決勝戦であった。

4.2.2 対象者

本章では、公益財団法人日本心理学会（2009）におけるデータの再掲載と再利用に関する倫理規程に基づいた上で、第3章の対象者に新たな対象者を加え、異なる視点から分析と解釈を行った。第3章では、調査前後の直近の両試合（以下、「両試合」と略す）で勝利していたチームのみを対象としていたため、勝敗との関連を検討することが出来なかった。したがって、本章では次の試合における勝敗との関連を検討するため、第3章の対象者に次の試合で敗戦をしたチームを加えた上で検討を行った。

第3章では、両試合で勝利したチームに所属する766名（高校生5チーム322名、大学生5チーム444名）を分析対象とした。一方、新たな対象者は前の試合では勝利したが、次の試合では敗戦したチームに所属する602名（高校生4チーム212名、大学生4チーム390名）とし、回答の記入漏れや不備があった者を除く584名（高校生208名、大学生376名）（有効回答率97.0%）を分析対象とした。

以上を合わせて、本章では1350名を分析対象とした（高校生9チーム530名、大学生9チーム820名）。また、高校生と大学生それぞれにおいて、次の試合における勝敗（勝つ前・敗ける前）と試合の出場機会（出場群・非出場群）の4群ずつに分類した。

その内訳は，高校生における勝つ前の出場群 116 名と勝つ前の非出場群 206 名，敗ける前の出場群 99 名と敗ける前の非出場群 109 名であった．大学生においては，勝つ前の出場群 108 名と勝つ前の非出場群 336 名，敗ける前の出場群 87 名と敗ける前の非出場群 289 名であった．本章における出場群とは両試合に登録選手としてベンチ入りし，試合に出場する可能性があった者とした．非出場群は，どちらか一方もしくは両試合においてベンチ入りせず，試合に出場する可能性がなかった者とした．なお，全ての対象チームは全国大会ベスト 16 以上の成績を残している競技レベルの高いチームであった．Table 4. 1 に対象チームの属性ならびに次の試合の勝敗を示した．

Table 4.1 対象チームの属性ならびに次の試合の勝敗

	次試合の勝敗		高校生		大学生	
	チーム	過去の最高戦績	チーム	過去の最高戦績	チーム	過去の最高戦績
第3章の対象	A (n=97)	全国大会優勝	J (n=72)	全国大会ベスト16	J (n=72)	全国大会ベスト16
	B (n=39)	全国大会ベスト16	K (n=60)	全国大会ベスト16	K (n=60)	全国大会ベスト16
	C (n=69)	全国大会ベスト4	L (n=102)	全国大会優勝	L (n=102)	全国大会優勝
	D (n=42)	全国大会ベスト16	M (n=97)	全国大会ベスト4	M (n=97)	全国大会ベスト4
	E (n=75)	全国大会ベスト4	N (n=113)	全国大会優勝	N (n=113)	全国大会優勝
新たに加えた対象	F (n=46)	全国大会ベスト4	O (n=85)	全国大会ベスト8	O (n=85)	全国大会ベスト8
	G (n=25)	全国大会ベスト16	P (n=106)	全国大会ベスト4	P (n=106)	全国大会ベスト4
	H (n=93)	全国大会優勝	Q (n=104)	全国大会ベスト8	Q (n=104)	全国大会ベスト8
	I (n=44)	全国大会ベスト4	R (n=81)	全国大会ベスト16	R (n=81)	全国大会ベスト16
	敗け					

次の試合は調査直後の公式戦を指す

4.2.3 倫理的配慮

全ての調査はヘルシンキ宣言の精神に基づき、十分な倫理的配慮のもと実施した。調査に先立ち、部長や監督などのチームの代表者に対して、口頭および書面にて研究の目的と内容やプライバシーの保護について説明をした。その後、自署によって同意を得た上で、質問紙を郵送した。各対象者にも、調査実施前に書面にて上記と同様の説明と研究参加は自由意志であることを伝え、自署によって研究協力の同意を得たこととした。調査終了後はチームの代表者が調査用紙の回収と封緘ならびに返送をした。なお、その際には記入内容を確認することがないように依頼をした。

4.2.4 分析方法

はじめに全対象者の CEQS および GEQ の合計得点と下位尺度それぞれの得点を算出した。次に高校生と大学生それぞれにおいて、独立変数を次の試合における勝敗（勝つ前・敗ける前）と試合への出場機会（出場群・非出場群）、従属変数を各尺度の合計得点および下位尺度得点とする、2 要因被験者間計画による分散分析を行なった。交互作用がみられた場合には単純主効果の検定を行い、交互作用がみられなかった場合には主効果の検定を行った。統計処理には IBM SPSS statistics 25 を用い、有意水準は $p < .05$ とした。

4.3 結果

4.3.1 CEQS の内的整合性

全対象者における CEQS の各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性を示した (Table 4.2)。信頼性を示すクロンバックの α 係数が.84 から.92 の範囲となり、いずれも高い内的整合性が確認できた。

Table 4.2 CEQSにおける各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性 (n=1350)

下位尺度	質問項目	平均値 ± 標準偏差	クロンバック α 係数
持続性	われわれのチームは、プレッシャーがあってもいつも通りのプレーができる	7.13 ± 1.92	.90
	われわれのチームは、困難な状況であってももちこたえることができる	7.77 ± 1.88	
	われわれのチームは、チャンスがほとんど無いような時でも、試合に集中できる	7.46 ± 1.97	
	われわれのチームは、ベストメンバーでなくても良いプレーができる	7.42 ± 1.95	
準備	われわれのチームは、試合に向けての準備をすることができる	7.90 ± 1.87	.90
	われわれのチームは、試合のために心理的なコンディションを整えることができる	7.68 ± 1.91	
	われわれのチームは、試合のために身体的なコンディションを整えることができる	7.61 ± 2.09	
	われわれのチームは、良い作戦を立てることができる	7.55 ± 1.94	
まとめり	われわれのチームは、問題を解決できる	7.61 ± 1.81	.91
	われわれのチームは、一致団結できる	8.24 ± 1.76	
	われわれのチームは、常に前向きな態度でいることができる	7.65 ± 1.89	
	われわれのチームは、コミュニケーションを十分に取ることができる	7.77 ± 1.81	
努力	われわれのチームは、努力を惜しまずプレーできる	8.06 ± 1.80	.92
	われわれのチームは、能力を発揮できる	7.77 ± 1.79	
	われわれのチームは、情熱を見せることができる	8.07 ± 1.85	
	われわれのチームは、チームにおこる様々な障害を乗り越えることができる	7.89 ± 1.82	
能力	われわれのチームは、相手チームに勝つことができる	7.82 ± 1.88	.84
	われわれのチームは、相手チームよりも実力を発揮できる	7.63 ± 1.85	
	われわれのチームは、相手チームよりも良いパフォーマンスをすることができる	7.44 ± 2.93	
	われわれのチームは、相手チームよりも技術的に高いレベルのプレーができる	7.71 ± 1.83	

CEQS : Collective Efficacy Questionnaire for Sportsの邦訳版

4.3.2 GEQ の内的整合性

全対象者における GEQ の各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性を示した (Table 4.3) . 信頼性を示すクロンバックの α 係数が.81 から.90 の範囲となり, いずれも高い内的整合性が確認できた.

Table 4.3 GEQにおける各質問項目の平均値と標準偏差ならびに各下位尺度における内的整合性 (n=1350)

下位尺度	質問項目	平均値 ± 標準偏差	クロンバック α 係数
ATG-S	チームのメンバーとの付き合いは楽しい	8.11 ± 1.52	.89
	シーズンが終わって、チームのメンバーと会わなくなると寂しい	7.14 ± 1.95	
	親しい友人がチームの中に数人いる	8.07 ± 1.50	
	チーム以外の者との付き合いよりも、チームメンバーとの付き合いのほうが楽しい	7.38 ± 1.73	
	このチームでの活動は自分が所属している集団の中でも最も大切な集団のひとつである	7.98 ± 1.59	
ATG-T	試合のとき、自分の出場時間に満足している	6.57 ± 2.24	.82
	チームが試合に勝とうとする意欲に満足している	7.41 ± 1.68	
	このチームは自分のパフォーマンスを伸ばす機会を十分に与えてくれている	7.25 ± 1.76	
	このチームのプレースタイルが気に入っている	6.92 ± 1.83	
GI-S	われわれのチームは、それぞれで出かけるよりも、チームメンバーと一緒に出かけることを好む	7.23 ± 1.65	.81
	われわれのチームは、チームのメンバー同士でパーティ（食事会など）をよくひらく	6.51 ± 2.00	
	われわれのチームは、シーズンオフの時でもチームのメンバーと一緒に過ごしたいと思っている	7.15 ± 1.74	
	われわれのチームは、試合や練習以外の時でも仲良しだ	7.83 ± 1.53	
	われわれのチームは、一致団結して目標を達成しようとしている	7.67 ± 1.61	
GI-T	われわれのチームは、試合で負けたり成績が悪く思わしくない時は、チームメンバー全員が責任を感じる	6.86 ± 1.76	.90
	われわれのチームのメンバーは、チーム目標が一致している	7.84 ± 1.54	
	われわれのチームは、練習中にうまくできないメンバーがいるとき、メンバーみんなでサポートする	7.08 ± 1.60	
	われわれのチームのメンバーは、試合や練習のとき、それぞれの役割や責任などについて遠慮なく話し合う	7.16 ± 1.63	

GEQ : Group Environment Questionnaireの邦訳版

ATG-S : Individual Attraction to the Group-Social Cohesion

ATG-T : Individual Attraction to the Group-Task Cohesion

GI-S : Group Integration-Social Cohesion

GI-T : Group Integration-Task Cohesion

4.3.3 高校生における将来の勝敗と集合的効力感との関連

Figure 4.1 に高校生における将来の勝敗および試合の出場機会と CEQS との関連を示した。なお、本章ではグラフ上に尺度得点と標準偏差を示すために横棒グラフを用いた。

合計に交互作用がみられた [$F(1, 526) = 10.27, p < .01$]。そのため、単純主効果の検定を行ったところ、出場群において勝敗の単純主効果がみられ、敗ける前より勝つ前の方が高い値を示した [$F(1, 526) = 12.72, p < .01$]。また、勝つ前と敗ける前のそれぞれに出場機会の単純主効果がみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した（順に [$F(1, 526) = 69.14, p < .01$] , [$F(1, 526) = 7.88, p < .01$]）。

下位尺度については、まとまりに交互作用がみられた [$F(1, 526) = 27.39, p < .01$]。単純主効果検定の結果、出場群と非出場群に勝敗の単純主効果がみられ、出場群においては敗ける前より勝つ前の方が高い値を示し [$F(1, 526) = 20.10, p < .01$]、非出場群においては勝つ前より敗ける前の方が高い値を示した [$F(1, 526) = 7.96, p < .01$]。また、勝つ前における出場機会にも単純主効果がみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した [$F(1, 526) = 86.39, p < .01$]。能力にも交互作用がみられた [$F(1, 526) = 15.93, p < .01$]。単純主効果検定の結果、出場群に勝敗の単純主効果がみられ、敗ける前より勝つ前の方が高い値を示した [$F(1, 526) = 18.65, p < .01$]。また、勝つ前における出場機会にも単純主効果がみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した [$F(1, 526) = 72.67, p < .01$]。他方、持続性 [$F(1, 526) = 2.34, n.s.$]、準備 [$F(1, 526) = 1.41, n.s.$]、努力 [$F(1, 526) = 2.90, n.s.$] に交互作用はみられなかった。また、これら3項目全てに出場機会の主効果がみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した（持続性 [$F(1, 526) = 47.17, p < .01$]、準備 [$F(1, 526) = 31.76, p < .01$]、努力 [$F(1, 526) = 37.76, p < .01$]）。勝敗の主効果については、持続性のみにみられ、敗ける前より勝つ前の方が高い値を示した [$F(1, 526) = 11.61, p < .01$]。一方、準備と努力に勝敗の主効果はみられなかった（順に [$F(1, 526) = 1.87, n.s.$]、 [$F(1, 526) = 0.22, n.s.$]）。

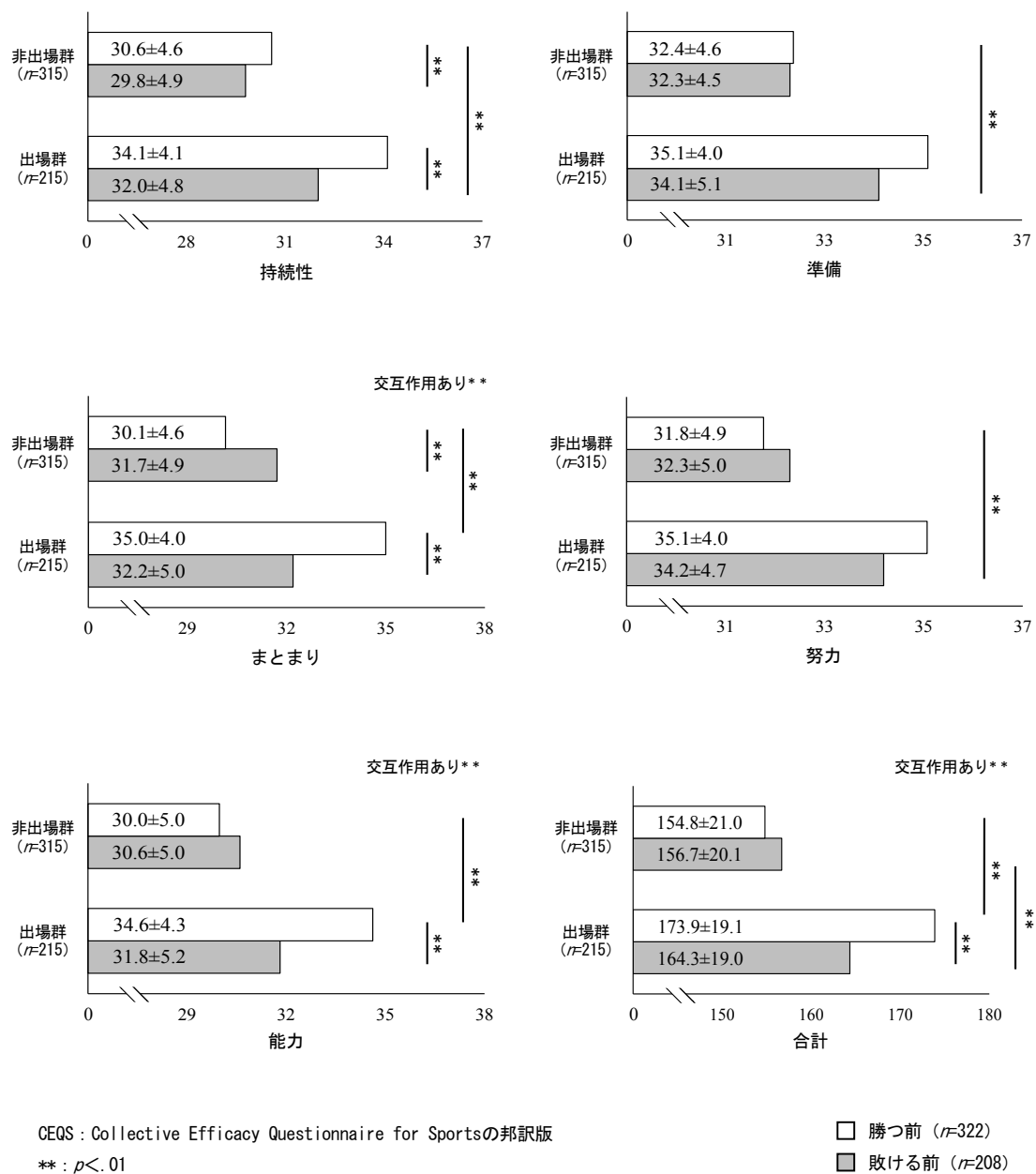


Figure 4.1 高校生における将来の勝敗および試合の出場機会とCEQSとの関連

4.3.4 大学生における将来の勝敗と集合的効力感との関連

Figure 4.2 に大学生における将来の勝敗および試合の出場機会と CEQS との関連を示した。合計に交互作用と勝敗の主効果はみられなかった（順に $[F(1, 816) = 0.01, n.s.]$, $[F(1, 816) = 0.14, n.s.]$) 。一方、出場機会の主効果はみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した $[F(1, 816) = 8.56, p < .01]$ 。

下位尺度についても、全ての項目に交互作用はみられなかった。持続性 $[F(1, 816) = 0.34, n.s.]$, 準備 $[F(1, 816) = 0.04, n.s.]$, まとまり $[F(1, 816) = 1.95, n.s.]$, 努力 $[F(1, 816) = 0.01, n.s.]$, 能力 $[F(1, 816) = 0.02, n.s.]$ 。また、勝敗の主効果も全ての項目にみられなかった（持続性 $[F(1, 816) = 1.21, n.s.]$, 準備 $[F(1, 816) = 0.12, n.s.]$, まとまり $[F(1, 816) = 0.03, n.s.]$, 努力 $[F(1, 816) = 0.16, n.s.]$, 能力 $[F(1, 816) = 0.29, n.s.]$) 。出場機会の主効果については、持続性 $[F(1, 816) = 9.08, p < .01]$, 準備 $[F(1, 816) = 5.97, p < .05]$, 努力 $[F(1, 816) = 5.44, p < .05]$, 能力 $[F(1, 816) = 7.15, p < .01]$ にみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した。なお、まとまり $[F(1, 816) = 3.12, n.s.]$ に出場機会の主効果はみられなかった。

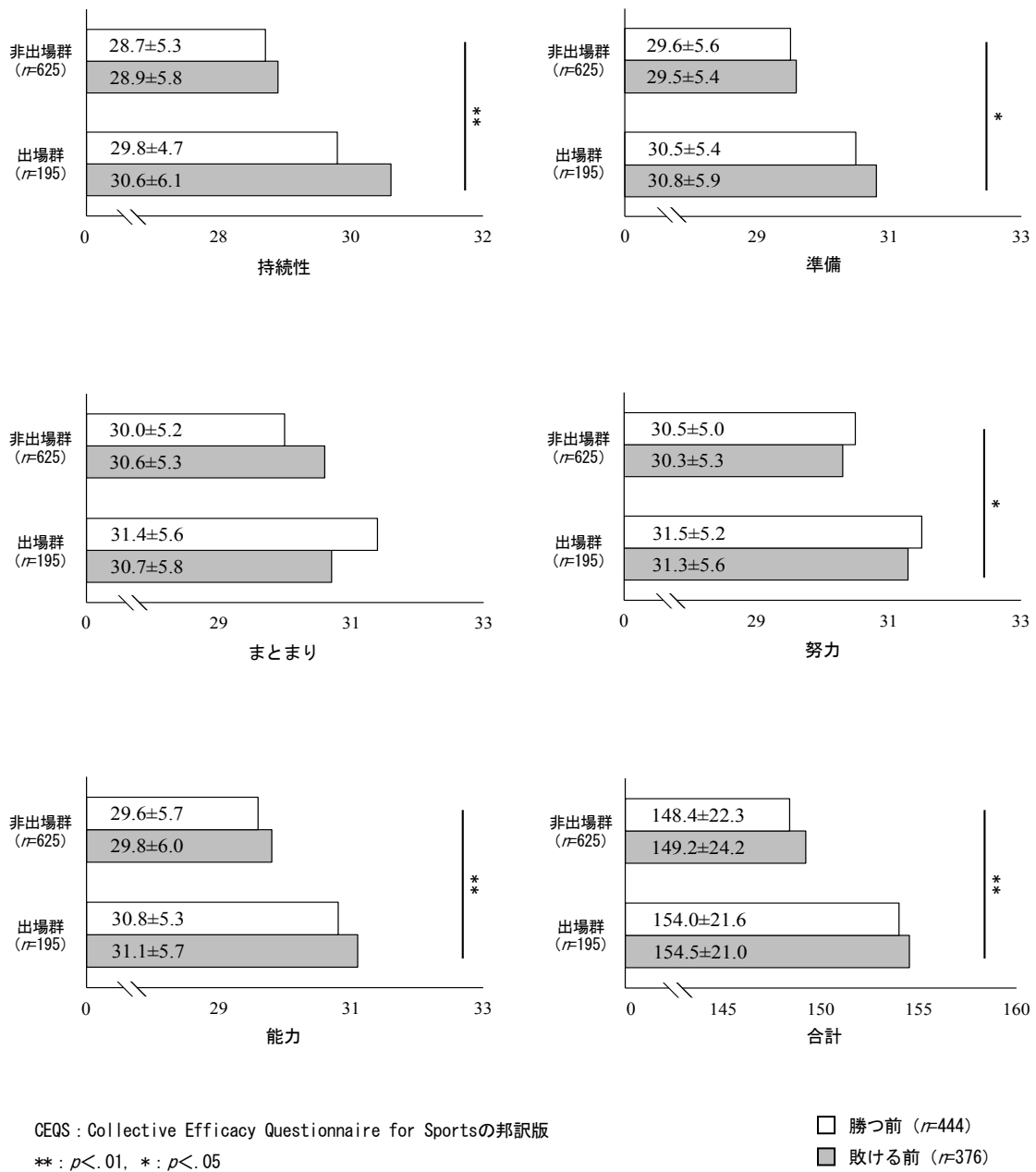
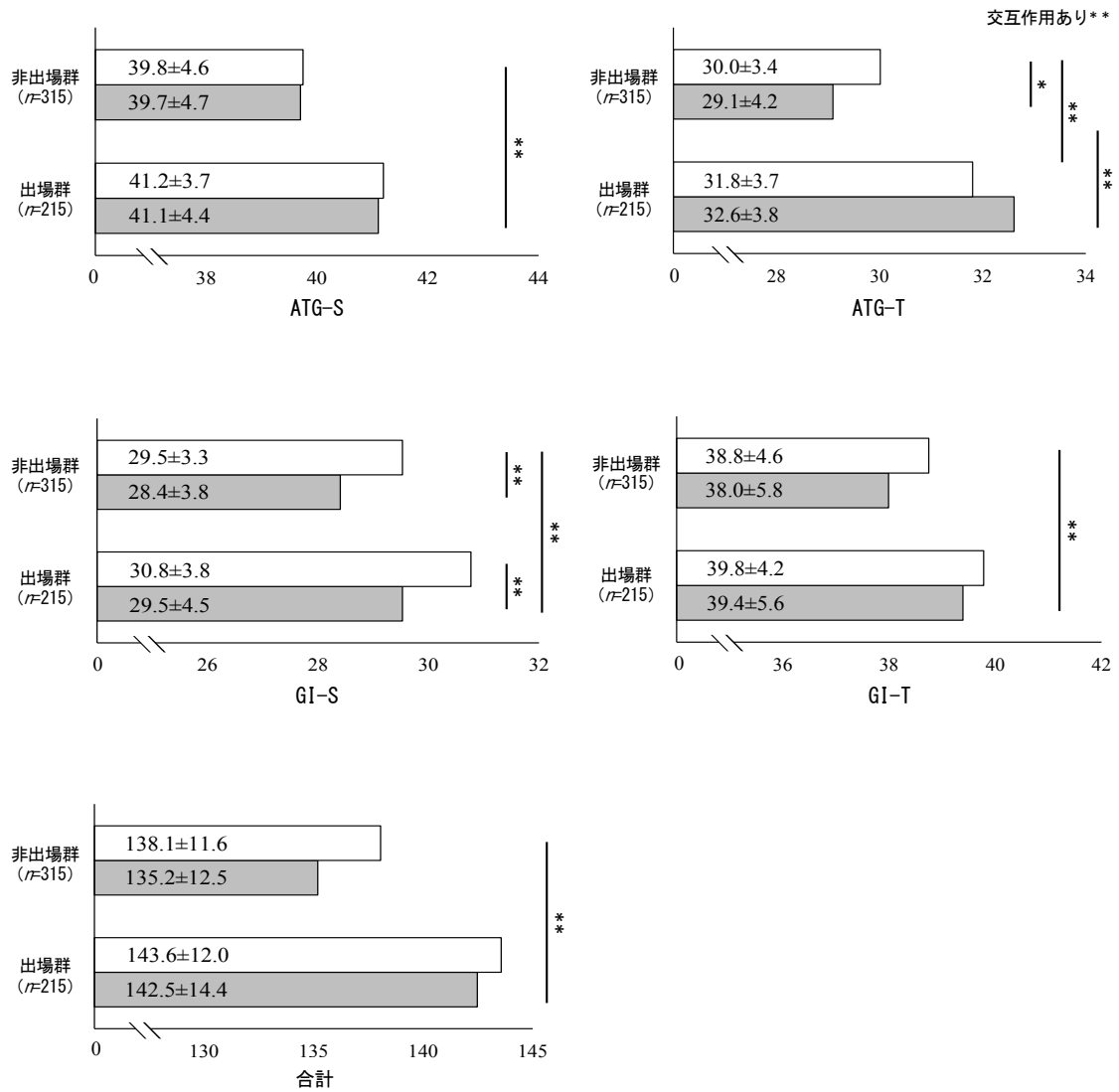


Figure 4.2 大学生における将来の勝敗および試合の出場機会とCEQSとの関連

4.3.5 高校生における将来の勝敗と集団凝集性との関連

Figure 4.3 に高校生における将来の勝敗および試合の出場機会と GEQ との関連を示した。合計に交互作用と勝敗の主効果はみられなかった（順に $[F(1, 526) = 0.72, n.s.]$, $[F(1, 526) = 3.17, n.s.]$)。一方、出場機会の主効果はみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した $[F(1, 526) = 33.34, p < .01]$ 。

下位尺度については、ATG-T に交互作用がみられた $[F(1, 526) = 6.77, p < .01]$ 。単純主効果検定の結果、非出場群に勝敗の単純主効果がみられ、敗ける前より勝つ前の方が高い値を示した $[F(1, 526) = 4.32, p < .05]$ 。また、勝つ前と敗ける前に出場機会の単純主効果がみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した（順に $[F(1, 526) = 18.08, p < .01]$, $[F(1, 526) = 46.88, p < .01]$)。その他の項目に交互作用はみられなかった（ATG-S $[F(1, 526) = 0.01, n.s.]$, GI-S $[F(1, 526) = 0.07, n.s.]$ GI-T $[F(1, 526) = 0.21, n.s.]$)。勝敗の主効果については GI-S にみられ、敗ける前より勝つ前の方が高い値を示した $[F(1, 526) = 12.94, p < .01]$ 。また、ATG-S と GI-T に勝敗の主効果はみられなかった（順に $[F(1, 526) = 0.08, n.s.]$, $[F(1, 526) = 1.91, n.s.]$)。一方、出場機会の主効果は全ての項目にみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した（ATG-S $[F(1, 526) = 12.76, p < .01]$, GI-S $[F(1, 526) = 11.42, p < .01]$ GI-T $[F(1, 526) = 7.66, p < .01]$)。



GEQ: Group Environment Questionnaireの邦訳版
 ATG-S: Individual Attraction to the Group-Social Cohesion
 ATG-T: Individual Attraction to the Group-Task Cohesion
 GI-S: Group Integration-Social Cohesion
 GI-T: Group Integration-Task Cohesion
 **: $p < .01$, *: $p < .05$

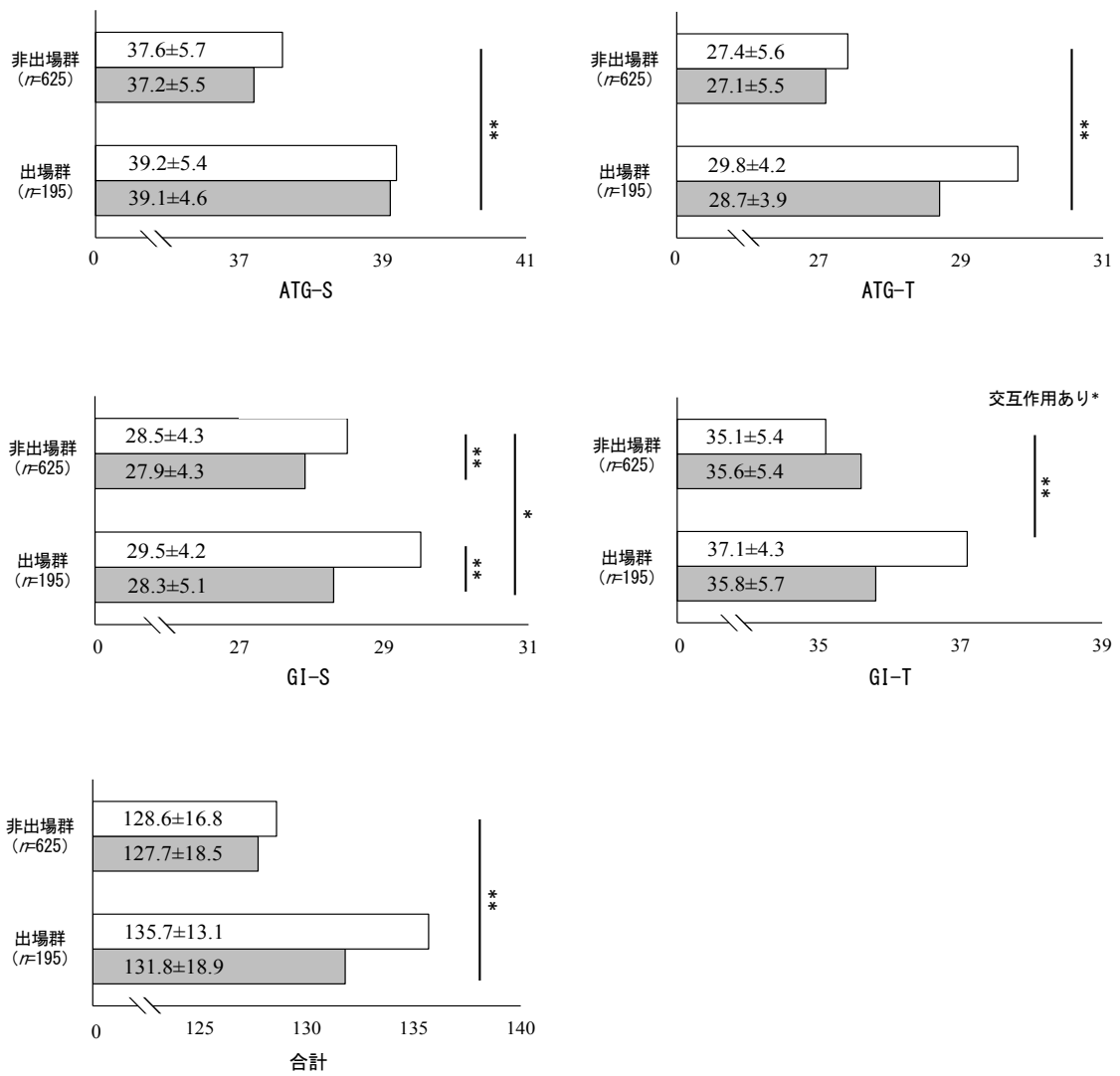
□ 勝つ前 (n=322)
 ■ 敗ける前 (n=208)

Figure 4.3 高校生における将来の勝敗および試合の出場機会とGEQとの関連

4.3.6 大学生における将来の勝敗と集団凝集性との関連

Figure 4.4 に大学生における将来の勝敗および試合の出場機会と GEQ との関連を示した。合計に交互作用と勝敗の主効果はみられなかった（順に $[F(1, 816) = 1.11, n.s.]$, $[F(1, 816) = 2.86, n.s.]$)。一方、出場機会の主効果はみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した $[F(1, 816) = 15.53, p < .01]$ 。

下位尺度については、GI-T に交互作用がみられた $[F(1, 816) = 4.50, p < .05]$ 。単純主効果検定の結果、勝つ前に出場機会の単純主効果がみられ、非出場群より出場群の方が高い値を示した $[F(1, 816) = 12.27, p < .01]$ 。その他の項目に交互作用はみられなかった（ATG-S $[F(1, 816) = 0.12, n.s.]$, ATG-T $[F(1, 816) = 0.93, n.s.]$, GI-S $[F(1, 816) = 0.78, n.s.]$)。勝敗の主効果については GI-S にみられ、敗ける前より勝つ前の方が高い値を示した $[F(1, 816) = 7.31, p < .01]$ 。その他の項目に勝敗の主効果はみられなかった（ATG-S $[F(1, 816) = 0.40, n.s.]$, ATG-T $[F(1, 816) = 2.51, n.s.]$)。一方、出場機会の主効果は全ての項目にみられ、いずれも非出場群より出場群の方が高い値を示した（ATG-S $[F(1, 816) = 15.20, p < .01.]$, ATG-T $[F(1, 816) = 21.40, p < .01]$, GI-S $[F(1, 816) = 4.05, p < .05]$)。



GEQ: Group Environment Questionnaireの邦訳版

ATG-S: Individual Attraction to the Group-Social Cohesion

ATG-T: Individual Attraction to the Group-Task Cohesion

GI-S: Group Integration-Social Cohesion

GI-T: Group Integration-Task Cohesion

** : $p < .01$, * : $p < .05$

□ 勝つ前 (n=444)

■ 敗ける前 (n=376)

Figure 4.4 大学生における将来の勝敗および試合の出場機会とGEQとの関連

4.4 考察

4.4.1 高校生と大学生における将来の勝敗と集合的効力感

CEQS の合計で、高校生の出場群において次の試合で敗ける前より勝つ前の方が高い値を示した。つまり、高校生における試合の出場機会を得ているメンバーの集合的効力感に限っては、次の試合の勝敗と関連することが明らかとなった。

高校生の出場群において、次の試合で敗ける前より勝つ前の方が集合的効力感が高まっていた要因として、試合の出場機会の差から生じる集合的効力感に対する評価過程の違いと、第3章で示した高校生における試合の出場機会を得ているメンバーが高い自己効力感を有しているという2点が考えられた。内田ほか(2017)は、集団に課せられた課題に対する遂行能力の優劣が、集合的効力感に対する評価過程に及ぼす影響について検討した。その結果、課題達成に対する遂行能力が劣るグループは過去の経験だけをもとに集合的効力感を評価するが、遂行能力が優れているグループは過去の経験から自身が集団の課題達成に貢献出来る可能性を考慮した上で集合的効力感を評価すると述べた。この報告を本章に置き換えると、集団の課題とは試合において勝利することと仮定することができる。そして、課題に対する遂行能力が優れているグループとは出場群のことであり、遂行能力が劣るグループとは非出場群のこととなるであろう。つまり、出場群は自身が次の試合に出場するという立場から、試合場面ならびに対戦チームを想定していたと考えられた。その上で、自身がどの程度チームの勝利に貢献できるかを厳密に想定し、自身の貢献度を予測した上で集合的効力感を評価していたと予測された。また、例えば、「自分は活躍できる」や「トライを取ることができる」などの自身の貢献を高く予測する際は、自身の行動達成に対する確信を示す概念である自己効力感が関連すると考えられる。以上のことから、次の試合に対する自身の貢献度を高く予測する場合、高校生の出場群においては高い自己効力感に伴い、自身の貢献度をより高く予測する可能性がある。そのため、高校生の出場群に限っては、次の試合で敗ける前より勝つ

前の段階の方が集合的効力感が高まっていたと推察された。

他方、集合的効力感の下位尺度のまとまりについては、高校生の非出場群に限って、次の試合で勝つ前より敗ける前の方が高い値を示した。この結果は、本章の結果の中でも唯一、次の試合で勝つ前より敗ける前の方が高い値を示した項目であった。山崎・鈴木（2015）は試合の出場機会に恵まれていないメンバーは、仲間を応援することや他者を支援することに競技活動の意義や面白さを見出していることを明らかにした。加えて、藤田・野本（2015）は高校生の特徴として、課題の達成に向けてチームが団結する傾向が強いと述べた。これらの報告を援用すると、例えば敗戦前などのチームの課題達成の可能性が低くなっているような正念場では、直接的に試合に出場できない非出場群は、チームならびに他者への支援という関わりを強めるのかもしれない。その結果、非出場群においては、次の試合で勝つ前より敗ける前の方がまとまりが高まった可能性がある。

続いて、大学生の結果について述べる。Ronglan（2007）は集合的効力感の高まりに最も強い影響を及ぼす要因として、事前の行動の達成や試合における勝利など、集団としての成功体験であると論じた。また、内田ほか（2017）は大学生を対象とし、集団で共有される過去の経験が全構成員の集合的効力感を一律に上昇・低下させたと報告した。本章における全ての対象チームは前の試合において勝利していた。さらに、高い競技レベルを有するため、試合における勝利というチームの成功体験を過去に多く経験していたと予測された。したがって、本章で対象となった大学生においては、試合の出場機会の有無が集合的効力感に差を生じさせたものの、その主な要因は過去の経験によるものであると想定された。そのため、次の試合における勝敗とは関連を示さなかった可能性が示唆された。

4.4.2 高校生と大学生における将来の勝敗と集団凝集性

GEQ の合計において、高校生と大学生ともに次の試合の勝敗との関連は示されなかった。つまり、集団凝集性は教育段階に関わらず次の試合の勝敗と関連しないことが明らかとなった。

富永・田口（2007）は競技レベルと集団凝集性の関連を検討した結果、競技レベルが高いチームにおいては、主に強豪チームの一員であることやメンバー間の親密さへの魅力が集団凝集性に強い正の影響を及ぼすと論じた。つまり、高い競技レベルを有するチームにおいては、例えばチームのパフォーマンスや次の試合における対戦チームとの優劣よりも、強豪チームに所属しているということ自体やそのチーム内のメンバーと交流を図ることへの魅力の方が集団凝集性に及ぼす影響が強い可能性がある。そのため、本章で対象となった競技レベルが高いチームにおいては、集団凝集性が次の試合の勝敗と関連しなかったと考えられた。したがって、この点が本章において、高校生と大学生ともに次の試合における勝敗と集団凝集性との関連がみられなかった要因であると示唆された。

4.5 まとめ

本章では、高校生と大学生それぞれにおいて、次の試合の勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した。

その結果、高校生の出場群の集合的効力感のみ、次の試合で敗ける前より勝つ前の方が高まっていた。つまり、高校生における試合の出場機会を得ているメンバーに限り、集合的効力感が次の試合の勝敗と関連することが明らかとなった。この要因として、試合の出場機会の差から生じる集合的効力感に対する評価過程の違いと、集合的効力感の下位概念である自己効力感による影響が示唆された。

一方、集団凝集性については高校生と大学生ともに次の試合の勝敗との関連は示されなかった。つまり、集団凝集性は教育段階に関わらず次の試合の勝敗とは関連しないことが明らかとなった。この要因として、競技レベルの高いチームにおいては、次の試合における対戦チームとの優劣よりも、強豪チームの一員であることやメンバー間の親密さの方が集団凝集性に強い影響を及ぼすためであると示唆された。

以上により、高校生における試合の出場機会を得ているメンバーに限っては、集合的効力感が次の試合の勝敗と関連することが明らかとなった。本章から得られた結果は、競技スポーツに携わる者にとって有益な知見を提供したと考えられた。

第5章

総括と今後の展望

5.1 本研究のまとめ

本研究の目的は競技レベルの高いラグビーチームに所属するメンバーの試合の出場機会、教育段階、および調査実施直後の試合（以下、「次の試合」と略す）における勝敗が集合的効力感と集団凝集性にどのように関連するのかを明らかにすることであった。本研究で焦点を当てた集合的効力感と集団凝集性は集団の状態的な概念である（阿江, 1985a ; Bandura, 1997 ; Chow and Feltz, 2008 ; Kozub and Button, 2000） . そのため、対象競技やメンバーの属性ならびに状況など、特定の対象ごとに特化した知見の蓄積が必要であった。したがって、本研究では対象の選出に際して複数の条件を設定した上で、多くの対象者データを用いた。具体的には、高い競技レベルを有する高校と大学のラグビーチームに所属するメンバーのみを対象とした。また、第2章の一部を除き、全ての調査は実力が拮抗したチームとの公式戦期間に行い、調査実施前後の直近の試合における勝敗の統制も行った。

以下に、各章の概要と主要な結果を示す。

第2章では、高校1チームに所属する59名を対象に試合の出場機会と集合的効力感および集団凝集性との関連を経時的な視点から検討した。加えて、内省報告を用いて集合的効力感および集団凝集性の変化に影響を及ぼした要因について検討をした。その結果、集合的効力感と集団凝集性ともに試合の出場機会を得ている方が高まっていた。また、集合的効力感についてはプレシーズンからインシーズンにかけて高まり、インシーズンに限っては、試合の出場機会を得ていることでより高まることが明らかとなった。これらの主な要因として、試合の出場機会を得ているメンバーの方がチームの勝利に直接的に関わる機会が多いことや、戦術に対する理解や満足度を高める傾向にあったことが示唆された。その他、試合の出場機会の差に伴う共有時間の不足や、指導者から指導を受ける機会の不均衡も要因の一つであると示唆された。

第3章では、高校生322名と大学生444名を対象とし、異なる教育段階と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した。その結果、集合的効力感においては大学生より高校生の方が高く、特に高校生の出場群において高まっていた。つまり、集合的効力感における教育段階の差は試合の出場機会を得ていることでより顕著に表れることが明らかとなった。この要因として、集合的効力感の下位概念である自己効力感による影響が示唆された。一方、集団凝集性においては試合の出場機会に関わらず、大学生より高校生の方が高まっていた。この要因として、人間関係に伴う社会凝集性および競技活動への動機に伴う課題凝集性の差が影響を及ぼしたと推察された。

第4章では、高校生530名と大学生820名を対象とし、高校生と大学生それぞれにおける次の試合の勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した。その結果、高校生の出場群の集合的効力感に限り、次の試合で敗ける前より勝つ前の方が高まっていた。つまり、高校生における試合の出場機会を得ているメンバーに限り、集合的効力感が次の試合の勝敗と関連することが明らかとなった。この要因として、試合の出場機会の差から生じる集合的効力感に対する評価過程の違いと、集合的効力感の下位概念である自己効力感による影響が示唆された。一方、集団凝集性については高校生と大学生ともに次の試合の勝敗との関連は示されなかった。

以上により、本研究全体を通して以下の3つの結論を得た。

- 1) 教育段階に関わらず、試合の出場機会を得ているメンバーの方が高い集合的効力感と集団凝集性を有する。
- 2) 大学生より高校生の方が高い集合的効力感と集団凝集性を有する。また、試合の出場機会を得ている高校生は特に高い集合的効力感を有する。
- 3) 試合の出場機会を得ている高校生に限り、集合的効力感が次の試合の勝敗と関連する。

本研究により、これまで明らかにされていなかった試合の出場機会ならびに教育段階や次の試合の勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連が明らかとなった。これらは、今後の競技スポーツチームを対象にした研究のみならず、実際の指導や運営に対しても有益な示唆を提供したと考えられる。

5.2 実践への示唆

本研究の結果から、チームに所属するメンバーの集合的効力感および集団凝集性を一律に高めるためには、教育段階に関わらず試合の出場機会に恵まれないメンバーへの対策が必要であると考えられた。なかでも、高校生の集合的効力感については試合の出場機会を得ているか否かで差が大きくなりやすいため、特に試合の出場機会に恵まれないメンバーへの対策が必要であると考えられた。

また、高校生の試合の出場機会を得ているメンバーに限っては、集合的効力感が次の試合の勝敗と関連することが明らかとなった。つまり、高校生の試合の出場機会を得ているメンバーの集合的効力感を高めることが次の試合における勝利につながる可能性が示唆された。そのため、次の試合で勝利するために、という見方をすると、高校生の試合に出場するメンバーに限っては、集合的効力感を高めるような働きかけが有効であると推察された。

ここまで述べたように、同一競技を専門とし、同等の競技レベルや同じ時期であったとしても、試合の出場機会ならびに教育段階が異なることにより集合的効力感および集団凝集性に対する評価が異なることが明らかとなった。そのため、集団としての心理的要因を高めるための有効な指導ならびにチーム運営の方法は、対象や状況により異なると考えられた。今後は、実践的な取り組みやその成果を検討するなど、集合的効力感および集団凝集性を高めるための、より具体的な方法の検証が期待される。

5.3 本研究の限界と今後の展望

本研究より得られた結果は、競技スポーツチームに携わる者に対して有益な知見を示したと考えられた。しかし、その一方でいくつかの限界が認められた。

本研究では、高い競技レベルを有するラグビーチームを対象に検討を進めた。そのため、得られた知見を異なる競技レベルや他の競技に応用するためには、慎重な議論が必要である。

また、本研究では質問紙調査により得られた得点の差に注目して検討を進めた。そのため、得られた得点自体が望ましいものなのか否かについては検討をしていない。今後は、得られた得点そのものに対する解釈も合わせた検討の実施が望まれる。

その他、勝敗を変数として扱ったことについても思索が求められる。この点については、対象試合を可能な限り実力が拮抗したチーム同士の公式戦とするなどの配慮をした。しかし、勝敗には自チームの出来のみならず、対戦チームの好不調やミスなど、自チームのパフォーマンス以外の要因も影響を及ぼす可能性がある。したがって、客観的な視点によるチーム・パフォーマンスの得点化などを試み、これらを新たな変数として加えた上で、集合的効力感および集団凝集性との関連を検討することも有効であろう。

今後は対象の拡大や異なる変数を用いることなど、新たな視点からの探索を行い、より多くのスポーツチームの指導や運営に活かされる包括的な知見の蓄積が期待される。

文献

- 阿江美恵子 (1985a) チームゲームと集団凝集性-ゲームによる凝集性の変化-. 体育の科学, 35 (2) : 96-99.
- 阿江美恵子 (1985b) 集団凝集性と集団志向の関係, および集団凝集性の試合成績への効果. 体育学研究, 29 (4) : 315-323.
- 阿江美恵子 (1986) 集団凝集性尺度の再検討. スポーツ心理学研究, 13 : 116-18.
- 阿江美恵子 (1987) スポーツ集団の凝集性に関する文献的研究. 体育学研究, 32 (2) : 117-125.
- 尼崎光洋・清水安夫 (2008) 高校野球部員を対象とした集団効力感の研究 : 集団凝集性及び部活動ストレスとの関連による検討. 学校メンタルヘルス, 11 : 23-31.
- 荒井弘和 (2011) 競技者における心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーとその関連要因. 体育学研究, 56 (1) : 229-238.
- 荒井弘和 (2013) 心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーの関連要因と増強方略. スポーツ産業学研究, 23 (2) : 165-175.
- Bandura, A. (1977) Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84 (2) : 191-215.
- Bandura, A. (1982) Self-efficacy mechanism in human agency. American psychologist, 37 : 122-147.
- Bandura, A. (1997) Self-efficacy : the exercise of control. W. H. Freeman, p.477-520.
- Cannon-Bowers, J., Salas, E., and Converse, S. (1990) Cognitive psychology and team training : training shared mental model in complex system. Human factors society bulletin, 33 (12) : 1-4.
- Carron, A. V. (1982) Cohesiveness in sport groups: interpretations and considerations. Journal of Sport Psychology, 4 : 123-138.

- Carron, A. V., Colman, M. M., Wheeler, J., and Stevens, D. (2002) Cohesion and performance in sport : a meta analysis. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 24 : 168-188.
- Carron, A. V., and Eys, M. A. (2012) *Group dynamics in sport* (4th ed.) . Fitness Information Technology.
- Carron, A. V., Widmeyer, W. N., and Brawley, L. R. (1985) The development of an instrument to assess cohesion in sport teams : the group environment questionnaire. *Journal of Sport Psychology*, 7 : 244-266.
- Chow, G. M., and Feltz, D. L. (2008) Exploring the relationships between collective efficacy, perceptions of success, and team attributions. *Journal of Sports Sciences*, 26 : 1179-1189.
- DeRue, D. S., Hollenbeck, J., Ilgen, D., and Feltz, D. (2010) Efficacy dispersion in teams : moving beyond agreement and aggregation. *Personnel Psychology*, 63 (1) : 1-40.
- Feltz, D. L., and Lirgg, C. D. (1998) Perceived team and player efficacy in hockey. *Journal of Applied Psychology*, 83 (4) : 557-564.
- Feltz, D. L., Short, S. E., and Sullivan, P. J. (2007) *Self-efficacy in sport : research and strategies for working with athletes, teams, and coaches*. Champaign, IL : Human Kinetics.
- 藤田依久子・野本堯希 (2015) 野球競技における指導者のタイプとチームの特徴の関係 -中学生・高校生年代の指導者に着目して-. *環境と経営：静岡産業大学論集*, 21 (1) : 67-79.
- George, T. R., and Feltz, D. L. (1995) Motivation in sport from a collective efficacy perspective. *International Journal of Sport Psychology*, 26 : 98-116.
- Greenlees, I. A., Graydon, J. K., and Maynard, I. W. (1999) The impact of collective efficacy beliefs on effort and persistence in a group task. *Journal of sports sciences*, 17 (2) : 151-158.
- Gully, S. M., Incalcaterra, K. A., Joshi, A., and Beaubien, J. M. (2002) A meta- analysis of team-

- efficacy, potency, and performance: interdependence and level of analysis as moderators of observed relationships. *Journal of Applied Psychology*, 87 (5) : 819-832.
- ハガー・ハヅィザランティス：湯川進太郎ほか訳（2007）スポーツ社会心理学-エクササイズとスポーツへの社会心理学的アプローチ-。北大路書房, p. 173-187. < Hagger, M., Chatzisarantis, N. (2005) *The social psychology of exercise and sport*. Open University Press. >
- Heuze, J. P., Raimbault, N., and Fontayne, P. (2006) Relationships between cohesion, collective efficacy and performance in professional basketball teams: an examination of mediating effects. *Journal of Sports Sciences*, 24 : 59-68.
- Hodge, K., Henry, G., and Smith, W. (2014) A case study of excellence in elite sport: motivational climate in a world champion team. *The Sport Psychologist*, 28 : 60-74.
- Hodge, K., Lonsdale, C., and McKenzie, A. (2005) Thinking rugby: using sport psychology to improve rugby performance. In J. Dosil (ed.) *The Sport Psychologist's Handbook: A Guide for Sport-Specific Performance Enhancement*. John Wiley and Sons, p.183-209.
- 池田英治・内山治樹（2012）Collective Efficacy 理論によるチーム・パフォーマンス向上の試み：バスケットボール競技を対象に。 *体育学研究*, 57 : 663-682.
- 磯貝浩久（2000）運動行動に対する動機づけ理論とその文化規定。 *健康支援*, 1 (2) : 15-26.
- 神藤隆志・鈴川一宏・甲斐裕子・北濃成樹・松原功・植木貴頼・小山内弘和・越智英輔・青山健太・永松俊哉（2017）青年期男子における特性的自己効力感と関連するスポーツ活動の特徴。 *体力研究*, 115 : 8-14.
- Jowett, S., Shanmugam, V., and Caccoulis, S. (2012) Collective efficacy as a mediator of the association between interpersonal relationships and athlete satisfaction in team sports. *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, 10 (1) : 66-78.

- 亀田達也 (1999) 集団凝集性. 中島義明ほか編, 心理学辞典. 有斐閣, p. 185.
- 勝田隆・粟木一博 (1994) ラグビー高校トッププレイヤーの心理的特性に関する研究.
仙台大学紀要, 25 : 37-49.
- 河津慶太・杉山佳生・中須賀巧 (2012a) スポーツチームにおける組織市民行動, チームメンタルモデルとパフォーマンスの関係の検討: 大学生球技スポーツ競技者を対象として. スポーツパフォーマンス研究, 4 : 117-134.
- 河津慶太・杉山佳生・中須賀巧 (2012b) スポーツチームにおける集団効力感とチームパフォーマンスの関係の種目間検討. スポーツ心理学研究, 39 (2) : 153-167.
- 小林未季代・内田遼介・土屋裕睦 (2016) スポーツ集団の心理状態を評価する枠組みの提案: 集合的効力感と集団凝集性による 2 次元アプローチ. 体育学研究, 61 (1) : 245-255.
- Kitayama, S., Markus, H. R., and Kurokawa, M (2000) Culture, emotion, and well-being : Good feelings in Japan and the United States. *Cognition & Emotion*, 14 (1) : 93-124.
- 公益財団法人日本ラグビーフットボール協会 (2020) 2019 年度チーム登録数および競技者登録数, https://rugby-japan.s3.ap-northeast-1.amazonaws.com/file/article/142252_5efbdeef27738.pdf, (参照日 2021 年 3 月 14 日) .
- 公益財団法人日本心理学会 (2009) 公益財団法人日本心理学会倫理規程, https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2017/09/rinri_kitei.pdf, (参照日 2021 年 3 月 14 日) .
- Kozub, S. A., and Button, C. J. (2000) The influence of a competitive outcome on perceptions of cohesion in rugby and swimming teams. *International Journal of Sport Psychology*, 31 : 82-95.
- Markus, H. R., and Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological review*, 98 (2) : 224.
- 松竹貴大・谷優太郎・田部井祐介・中山雅雄・浅井武 (2018) 大学女子サッカー選手の

- シーズンを通した集団凝集性および集合的効力感の変化. いばらき健康・スポーツ科学, 34 : 1-10.
- 蓑内豊 (2013) ラグビーの競技特性と心理的要因 : 個人に求められる要因. 北星学園大学文学部北星論集, 50 : 45-54.
- 蓑内豊・梶山俊仁 (2015) ラグビーの競技特性と心理的要因 : チームに求められる要因. 北星学園大学文学部北星論集, 52 (2) : 11-18.
- 持田和明・高見和至・島本好平 (2015) チームスポーツ競技における集団凝集性および集団効力感に影響する個人要因の検討-構成員のライフスキルが集団に及ぼす影響-. スポーツ産業学研究, 25 (1) : 25-37.
- 持田和明・高見和至・島本好平 (2016) スポーツ組織市民行動尺度の作成. コーチング学研究, 30 (1) : 15-27.
- 村瀬浩二・安部久貴 (2014) 指導者の指導方針が構成員の集団凝集性に与える影響. 和歌山大学教育学部紀要. 教育科学, 64 : 49-54.
- 武良徹文・田村進・埴森武雄・關谷武司・藤側宏喜 (1998) 男子の高校生と大学生における生活習慣と精神的健康の関係. 発育発達研究, 26 : 43-52.
- Myers, N. D., Payment, C. A., and Feltz, D. L. (2004) Reciprocal relationships between collective efficacy and team performance in women's ice hockey. *Group Dynamics : Theory, Research, and Practice*, 8 (3) : 182.
- Myers, N. D., Payment, C. A., and Feltz, D. L. (2007) Regressing team performance on collective efficacy : considerations of temporal proximity and concordance. *Measurement in Physical Education and Exercise Science*, 11 : 1-24.
- 永尾雄一・杉山佳生 (2013) 日本版スポーツ集団効力感尺度の作成. 九州体育・スポーツ学研究, 27 (2) : 1-11.
- 中込四郎 (2016) 競技生活の心理サポート. 日本スポーツ心理学会編, スポーツメンタ

- ルトレーニング教本三訂版. 大修館書店, p. 2-6.
- 中村仁・繁田進・有吉正博 (2009) 運動部活動におけるソーシャルサポートが適応感と達成動機に及ぼす影響. 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系, 61 : 121-127.
- 丹羽劭昭・岡仁詩・黒田公子・蔦川譲・林昌一郎 (1992) 戦績での強さからみたラグビー一部の権限構造と集団魅力. 体育学研究, 37 (1) : 29-43.
- 織田憲嗣・山本勝昭・徳永幹雄 (2007) スポーツにおける集団凝集性の構造検証ならびにパフォーマンスとの関係. 財団法人ミズノスポーツ振興会 スポーツ医科学研究助成報告書.
- 岡本昌也・高津浩彰・寺田泰人 (1998) 大学ラグビー選手の心理的競技能力：競技経験, バランス, 開始時期についての検討. 愛知工業大学研究報告, 33A : 85-88.
- Organ, D. W. (1988) Organizational citizenship behavior : The good soldier syndrome. Lexington Books / DC Heath and Com.
- Prapavessis, H., and Carron, A. V. (1997) Cohesion and work output. Small Group Research, 28 (2) : 294-301.
- Rainey, D. W., and Schweickert, G. J. (1988) An exploratory study of team cohesion before and after a spring trip. The Sport Psychologist, 2 : 314-317.
- Ronglan, L. T. (2007) Building and communicating collective efficacy: a season-long-in-depth study of an elite sport team. The Sport Psychologist, 21 : 78-93.
- 関矢寛史 (2016) メンタルトレーニングとは. 日本スポーツ心理学会編, スポーツメンタルトレーニング教本三訂版. 大修館書店, p. 7-11.
- Senecal, J., Loughead, T. M., and Bloom, G. A. (2008) A season-long team-building intervention : examining the effect of team goal setting on cohesion. Journal of Sport and Exercise Psychology, 30 : 186-199.
- 下中直人 (2006) 体育心理学. (社) 日本体育学会監, 最新スポーツ科学辞典. 平凡社,

p. 480-481.

Short, S. E., Sullivan, P., and Feltz, D. L. (2005) Development and preliminary validation of the collective efficacy questionnaire for sports. *Measurement in Physical Education and Exercise Science*, 9 : 181-202.

清水裕士・村山綾・大坊郁夫 (2006) 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1) : コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用. 電子情報通信学会技術研究報告, ヒューマンコミュニケーション基礎, 106 (146) : 1-6.

Spink, K. S. (1992) Group cohesion and starting status in successful and less successful elite volleyball teams. *Journal of Sports Sciences*, 10 (4) : 379-388.

Stajkovic, A. D., Lee, D., and Nyberg, A. J. (2009) Collective efficacy, group potency, and group performance : meta-analyses of their relationships, and test of a mediation model. *Journal of Applied Psychology*, 94 : 814-828.

菅田圭次・西山常夫 (1984) 運動部のモラルの研究: 高等学校におけるラグビー部について. 飯山論叢, 1 (1) : 212-207.

杉山卓也・中村武彦・西井良 (2021) スポーツにおける集団凝集性尺度の作成. *体育学研究*, 66 : 327-342.

Stevens, D., and Bloom, G. (2003) The effect of team building on cohesion. *Avante-ontario*, 9 (2) : 43-54.

Sullivan, P. J., and Short, S. (2011) Further operationalization of intra-team communication in sports: an updated version of the scale of effective communication in team sports. *Journal of Applied Social Psychology*, 41 (2) : 471-487.

竹村りょうこ・島本好平・加藤貴昭・佐々木三男 (2013) スポーツ集団における学生アスリートのセルフマネジメントに関する研究-スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度の開発-. *体育学研究*, 58 : 483-503.

- Tatsumi, Y., and Tsuchiya, H. (2018) Changes in high school rugby team's dynamics : focusing on group cohesion and collective efficacy. *Journal of Sports Science and Health Academic Journal of Faculty of Sports Science, Chulalongkorn University*, 19 : 30-50.
- 寺田泰人・岡本昌也・高田正義・高津浩彰 (1996) 高校ラグビー選手の心理的競技能力に関する研究. *人文科学論集*, 57 : 39-44.
- 徳永幹雄 (2005) チームづくりに必要な心理的要因は何か. 徳永幹雄編, *教養としてのスポーツ心理学*. 大修館書店, p60-63.
- 富永徳幸・田口節芳 (2007) 集団凝集性と競技水準との関連. *近畿大学工学部紀要. 人文・社会科学篇*, (37) : 23-29.
- 筒井香・土屋裕睦 (2016) 大学生男子サッカー部員によるチームのまとまりを感じる体験の探索. *スポーツ産業学研究*, 26 (1) : 143-150.
- 内田遼介・町田萌・土屋裕睦・釘原直樹 (2014) スポーツ集合的効力感尺度の改訂・邦訳と構成概念妥当性の検討. *体育学研究*, 59 (2) : 841-854.
- 内田遼介・土屋裕睦・菅生貴之 (2011) スポーツ集団を対象とした集合的効力感研究の現状と今後の展望 : パフォーマンスとの関連性ならびに分析方法に着目して. *体育学研究*, 56 (2) : 491-506.
- 内田遼介・釘原直樹・東亜弓・土屋裕睦 (2017) 過去経験が集合的効力感に及ぼす影響 - 成員の道具性に着目した検討 -. *心理学研究*, 88 (3) : 219-229.
- Watson, C. B., Chemers, M. M., and Preiser, N. (2001) Collective efficacy : a multilevel analysis. *Personality and social psychology bulletin*, 27 (8) : 1057-1068.
- Yamada, K., Arai, H., Nakazawa, T., Kawata, Y., Kamimura, A., and Hirose, M. (2013) A study of the unity of sports teams : development of a scale and examination of related factors. *Journal of Physical Education and Sport*, 13 (4) : 489-497.
- 山田快・荒井弘和・中澤史・川田裕次郎・上村明・北村薫・広沢正孝 (2014) スポーツ

チームの一体感と組織風土との関係性-コミュニケーションを起点とした一体感向上へのアプローチ方法の検討. スポーツ産業学研究, 24 (2) : 113-127.

山口裕幸 (2008) チームワークの心理学-よりよい集団づくりをめざして-. サイエンス社.

山崎駿・鈴木秀人 (2015) 高校生・大学生の運動継続に関する研究：補欠選手が運動部活動へ関わり続ける要因に焦点を当てて. 東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 67 : 121-127.

安田貢 (2013) バレーボールにおけるチームメイトのセルフ・トークおよび行動尺度の開発. バレーボール研究, 15 (1) : 16-22.

横田匡俊 (2002) 運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動. 体育学研究, 47 (5) : 427-437.

Zaccaro, S. J., Blair, V., Peterson, C., and Zazanis, M. (1995) Collective efficacy. In : James, E. M. (ed.) Self-efficacy, adaptation, and adjustment. Springer, p. 305-328.

本論文は、以下の論文に基づき作成されたものである。

関連論文

1. 辰見康剛・土屋裕睦（2020）大学生と高校生における試合の出場機会からみた集合的効力感と集団凝集性：競技レベルの高いラグビーチームにおける世代別の特徴. コーチング学研究, 33（2）：85-196.
2. Tatsumi, Y., and Tsuchiya, H. (2021) Associations between different educational stages and match playing opportunities with collective efficacy and group cohesion : an examination of competitive high school and university rugby teams in japan. *International Journal of Sport and Health Science*, doi : 10. 5432/ ijshs. 202016.

参考論文

1. Tatsumi, Y., and Tsuchiya, H. (2018) Changes in high school rugby team's dynamics : focusing on group cohesion and collective efficacy. *Journal of Sports Science and Health Academic Journal of Faculty of Sports Science, Chulalongkorn University*, 19: 30-50.
2. 辰見康剛・土屋裕睦 高校と大学それぞれにおける将来の勝敗および試合の出場機会 と集合的効力感ならびに集団凝集性との関連. (未公刊)

資料

ラグビー選手の心理的特徴に関する調査

九州共立大学スポーツ学部

辰見 康剛

メールアドレス：※※※@※※※※※※

本調査の目的は「ラグビー選手の心理的特徴」を明らかにすることです。以下の各設問に対して、回答をして頂きます。実施時間は約 10 分程度です。各設問に対して、該当する項目に☑で回答して下さい。

本調査で得られた情報は研究目的以外に使用致しません。はじめに氏名を記載して頂きますが、試合の出場記録との確認が目的であり、得られた情報は全て統計的に処理され、チームならびに個人が特定される形で公表されることはありません。また、チーム関係者を含む第三者にも公表致しません。本調査への参加は自由意志であり、調査開始後も不利益を受けることなく撤回することが可能です。

以下への署名と本調査用紙の提出によって、調査協力に同意して頂いたものとします。ご協力のほど宜しくお願い致します。

実施日： _____ 年 _____ 月 _____ 日

フリガナ
氏名： _____

高校・大学（いずれかに○） 学年： _____

主なポジション： _____

■ 直近の試合に対する、あなたのチームに対する自信はどの程度ですか？“われわれのチームは・・・”に続けて、“全く自信がない(0点)”～“かなり自信がある(11点)”までの11段階で回答してください。

1	相手チームに勝つことができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
2	問題を解決できる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
3	プレッシャーがあってもいつものプレーができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
4	試合に向けての準備をすることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
5	努力を惜しまずプレイできる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
6	相手チームよりも実力を発揮できる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
7	一致団結できる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
8	困難な状況であってももちこたえることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
9	試合のために心理的なコンディションを整えることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
10	能力を発揮できる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
11	相手チームよりも技術的に高いレベルのプレーができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
12	常に前向きな態度でいることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
13	チャンスがほとんど無いような時でも、試合に集中できる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
14	試合のために身体的なコンディションを整えることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
15	情熱を見せることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
16	相手チームよりも良いパフォーマンスをすることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
17	コミュニケーションを十分に取ることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
18	ベストメンバーでなくても良いプレーができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
19	良い作戦を立てることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある
20	チームにおこる様々な障害を乗り越えることができる	全く自信がない 0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	かなり自信がある

■ チームに対するあなたの個人的な感情について、下記の質問をよく読んで“全く違う(1点)”～“全くその通りだ(9点)”までの9段階で回答してください。

1 チームのメンバーとの付き合いは楽しい	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
2 試合のとき、自分の出場時間に満足している	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
3 シーズンが終わって、チームのメンバーと会わなくなると寂しい	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
4 チームが試合に勝とうとする意欲に満足している	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
5 親しい友人がチームの中に数人いる	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
6 このチームは自分のパフォーマンスを伸ばす機会を十分に与えてくれている	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
7 チーム以外の者との付き合いよりも、チームメンバーとの付き合いのほうが楽しい	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
8 このチームのプレースタイルが気に入っている	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
9 このチームでの活動は自分が所属している集団の中でも最も大切な集団のひとつである	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9

■ チーム全体に対するあなたの認識について、下記の質問をよく読んで“全く違う(1点)”～“全くその通りだ(9点)”までの9段階で回答してください。

10 われわれのチームは一致団結して目標を達成しようとしている	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
11 われわれのチームは、それぞれで出かけるよりも、チームメンバーと一緒に出かけることを好む	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
12 われわれのチームは、試合で負けたり成績が思わしくない時は、チームメンバー全員が責任を感じる	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
13 われわれのチームは、チームのメンバー同士でパーティ（食事会など）をよくひらく	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
14 われわれのチームのメンバーは、チーム目標が一致している	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
15 われわれのチームは、シーズンオフの時でもチームのメンバーと一緒に過ごしたいと思っている	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
16 われわれのチームは、練習中にうまくできないメンバーがいるとき、メンバーみんなでサポートする	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
17 われわれのチームは、試合や練習以外の時でも仲良しだ	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9
18 われわれのチームのメンバーは、試合や練習のとき、それぞれの役割や責任などについて遠慮なく話し合う	全く違う 1	2	3	4	5	6	7	8	全くその通りだ 9

資料 2.1

ID : ○○

CEQS合計得点

GEQ合計得点

プレシーズン : ○○点 / インシーズン : ○○点 プレシーズン : ○○点 / インシーズン : ○○点

<p>Q1. 20XX年シーズンを振り返って</p> <p>Q2. チームおよび個人の目標, チーム内における自分の立場や役割を振り返って</p> <p>Q3. チーム全体のパフォーマンスや課題, 人間関係などを振り返って</p> <p>Q4. 個人的なパフォーマンスや課題, 人間関係などを振り返って</p>	
<p>Collective Efficacy Questionnaire for Sports</p>	<p>Q5. 持続性</p> <p>Q6. 準備</p> <p>Q7. まとまり</p> <p>Q8. 努力</p> <p>Q9. 能力</p>
<p>Group Environment Questionnaire</p>	<p>Q10. 集団の社会的側面に対する個人的魅力 (ATG-S)</p> <p>Q11. 集団の課題的側面に対する個人的魅力 (ATG-T)</p> <p>Q12. 集団の社会的側面に対する集団の一体感 (GI-S)</p> <p>Q13. 集団の課題的側面に対する集団の一体感 (GI-T)</p>

インタビュー調査導入時におけるAの逐語録

<p>Q1. 20XX年シーズンを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 春のH高校戦でボロ負けしたことがショックで試合後に1人で泣きました。それが一番の思い出です。あとは、地域ブロック大会でK高校に負けたのも印象深いです。 	<p>Q2. チームおよび個人の目標、チーム内における自分の立場や役割を振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個人的にもチーム目標と同時で昨年度を越えることを考えていました。 ・ 自分の役割はキャプテンだったけど、自分は練習後に喋るタイプではないので練習中からプレーを通じて喋ることを意識しました。 	<p>Q3. チーム全体のパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 夏合宿が印象的です。最初の2試合は実力的にも勝てる相手にきっちり勝ったけど、その後は3連敗して、チーム内ではこのままではダメだという感じがあって、個人的にはキックの精度も低かったり、みんなでもう一回やり直そうと話し合いました。その後の3試合は接戦で勝って特にN高校戦とD高校戦は良い試合で、立て直しが上手くいきましました。具体的にはプレイの必死さが出ていて、試合後に熱中症で倒れるのが2人いましたね。オーストラリア遠征では、私生活での注意を沢山受けました。特に1, 2年生がよくなくて3年生もバタバタしてました。 	<p>Q4. 個人的なパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5月の都道府県大会頃からスクラムハーフ（ポジションの名称）をしまして、そこから調子は向上になりました。 ・ 副キャプテン（ID:B君）とマネージャーのF君とは怒られる時もあるけど、話しながら帰ったり、悩みとかも共有出来てすごく助かりました。
--	---	---	--

集会的効力感に関するAの逐語録

Collective Efficacy Questionnaire for Sports	<p>Q5. 持続性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どちらかというところが多かったかな、負けが続くと不安なことも多かったです。 ・ やらされてでも練習後のタイヤ引きとか、綱昇りとかの基礎トレーニングを続けたのは凄い自信になりました。 <p>Q6. 準備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 良い準備は出来ていたと思います。たまに上手くいかないこともあったんですけど、それも上手くいくための要素になっていったと思います。 ・ 各試合に向かうまでの平日の練習でも（監督から）よく怒られました。準決とか決勝前でもメッチャ怒られてへこんだんですけど、逆にそれで開き直れたと思います。 <p>Q7. まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 先生からまとまっていないと指摘されて、夏以降からシーズン終了まで全員で食堂に集まって昼ご飯を食べるようにしました。それはとても良い取り組みだったと思いますし、チームの交流が増えたと思います。 ・ みんなで一緒に練習しないと雰囲気は難しくなると思います。けど、それでもチームはまとまっていたと自分は思います。 ・ 下のチームの3年生が頑張ってくれていました。3年生だけのミーティングが結構あって、そういう話しもしました。 <p>Q8. 努力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 努力はもちろんしていました。特別なことじゃないし、普通というか当たり前だと思います。 <p>Q9. 能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 能力というよりもモチベーションが上がってきていました。先が見えずにやっていた時と比べると、目標が明確になったので、モチベーションが上がって、それがパフォーマンスを高めたと思います。最後はみんな良い状態だったと思います。
--	--

集団凝集性に関するAの逐語録

Group Environment Questionnaire	
<p>Q10. 集団の社会的側面に対する個人的魅力 (ATG-S)</p> <ul style="list-style-type: none"> 最後の県予選頃にはやりたいことも形になってきて、方向性も定まってきたし、試合に出ているメンバーは楽しく出来ていたのかなあと思います。 迷いを解消するために先生（監督）からの指示や聞かれたりすることもあったんですけど、みんなまで話し合ってそれを先生に伝えるに行くこともありました。 先生（監督）からの指示に対しては、その時ごとに試合に出ているメンバーが中心となってミーティングをしていました。 	
<p>Q11. 集団の課題的側面に対する個人的魅力 (ATG-T)</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人的には良い目標だとは感じていたけど、途中で自信をなくすこともあったので春の負けが続いた時期は大丈夫かなと思っていました。夏以降は春のように何も出来ずに負けることがなくなっていたので大丈夫でした。 	
<p>Q12. 集団の社会的側面に対する集団の一体感 (GI-S)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分は上のチームの経験しかないけど、下のチームは上のチームを見ているので、上のチームが勝っていれば下も自信がつくし、負けていればこのチームどうなんやろうと思われれると思います。だから、Aチームは見られているという意識があったはずです。 Aチームでも出来るだけ下のチームを応援したりして、チームはまとまろうとしていたと思います。けど、下のチームがどう受け止めていたかは分からないです。多分、微妙かな。 	
<p>Q13. 集団の課題的側面に対する集団の一体感 (GI-T)</p> <ul style="list-style-type: none"> Cチームにとっては現実味がなくて、あまり分からなかったのではないかと思います。それに対して、勝手にしててもついでこないで、1年生は全国大会の経験者もないし、そう言う意味で練習中に厳しくしたりしました。出来るだけ理解をしてもらうために色んな人と1対1で話しをするようにもしました。 	

インタビュー調査導入時におけるBの逐語録

<p>01. 20XX年シーズンを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日が経つにつれて大崩れしなくなりました。地域ブロック大会後の練習試合は負けが続いて全く自信がなかったし、自分たちはダメだと思いきい混んでいました。 ・ 5月の選抜大会では負けの中にも手応えを感じたのに、その後の都道府県大会で悪い所が目立ちました。春シーズンは浮き沈みが大きかったですね。秋の練習試合は負けたとしてもやるべきことが出来ていたので問題なかったです。
<p>02. チームおよび個人の目標、チーム内における自分の立場や役割を振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 去年は先輩についていくだけで、自分のことだけやればよかったです。今年からは自分がそんな3年生になりたかったです。新チームになってからはプレーで引っ張ってほしいと思ってたけど、それだけではダメで怒られもしました。だから、途中からは声を掛けることも意識して、年間を通じて意識しました。
<p>03. チーム全体のパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 春先は去年の継続という意識が強かったです。春シーズンの後半から自分たちのチームとして1つ2つ要素を足していった感じですが。 ・ チーム目標ははずと忘れず意識してたし、他のメンバーも意識してくれてると信じています。リーダーとして発信もするようにしています。 ・ シーズン後半には3年生だけのミーティングを多くやって、練習中はあまり喋れないメンバーの意見を聞く機会が増えて、まとまりが出てきたかなと思います。けど、回教を重ねると話すメンバーに限られる場面もありましたね。 ・ シーズン中のミーティングでは相手チームの情報を各自が知ったうえで行なわれることが多くて、そういう雰囲気や試合に向けてやる気を高めやすかったです。
<p>04. 個人的なパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 春はフォワード（ポジションのユニットの名称）の仕事をしつつ、バックス（ポジションのユニットの名称）の役割もやっていたけど、それをやめるように言われました。フォワードの仕事をやっでないとと言われて、以前はそれが誓められていたのに自分でも理由は分かっでないです。もつとフォワードをまとめるとい意味だったのかな、と感じてますけど分らないです。 ・ 春に負けたS高校に秋にも同じ展開で負けた時と0高校に2回負けた時は個人的にもフォワードとしてもめっちゃ怒られてやばかったです。全国大会前の自分は病んでいたかもしれないと「このチームに副キャプテンはいない」とか言われて、かなり落ちてました。じゃ、メンバーに選ぶなよと思ったりもしましたね。でも、キャプテンの方がもつと言われていると思ってたんで、自分が折れてはいけないと思いきい踏ん張りました。 ・ 夏合宿中は隣のポジションの3年生2人がケガをしていて、その時に2人の大きさを感じました。

集会的効力感に関するBの逐語録

Collective Efficacy Questionnaire for Sports	
Q5. 持続性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段から先生に言われている礼儀とか学校生活を大事にすることは当たり前だけど、きちんと続けていました。
Q6. 準備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 準決勝の前日に（監督に）怒られたんですけど、それが結果的に良かったと思います。 ・ 秋に向けてケガ人が増えたことはチームの間だったと思います。よくなかったです。
Q7. まとまり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 秋に向けてまとまりはよくなっていました。例えば、練習中に声が少なかった選手がだんだん喋るようになってきたりとかです。リーダーとして安心したし、嬉しかったです。特に3年生の頑張りが大きかったし、嬉しかったです。 ・ AからCチームまでスケジュールが分かれていても、3年生の中でABC関係なく3年生が頑張ろうと言っていたからやってくれていたはずですよ。多分ですけど。
Q8. 努力	<ul style="list-style-type: none"> ・ AからCチームまで頑張っていたと思います。練習とか全てを見れていたわけではないですけど、練習試合とかを見て感じました。 ・ 全員が努力できることがチームの強みだと思います。
Q9. 能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大幅に上がってはないけど、下がってはいなかったと思います。

集団凝集性に関するBの逐語録

Group Environment Questionnaire	
<p>Q10. 集団の社会的側面に対する個人的魅力 (ATG-S)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あまり出来なかったんですけど、1年生の同じポジションのメンバーと食事に行ったりして、1年生の考えていることを知ろうとしました。 ・オーストラリア遠征は勝ち負けに関わらずとも楽しくて、先生（監督）の機嫌も良かったと思います。単純に楽しくて、行ってよかったです。 ・春に苦戦したK高校に秋の本番で快勝した時は自信に繋がりました。春の結果から危機感を持たせたことが良かったと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> ・試合に負けた直後とかは、やばいと思うこともあったんですけど、そんなこと言ってもらえないので次の練習には切り変えるようにしていました。 ・前年度よりもチーム目標が高くなってしまいましたけど、自分たちがこれからは強くなっていくために必要なことだと考えていたし、妥協はなかったです。やるしかないみたいな感じでした。
<p>Q11. 集団の課題的側面に対する個人的魅力 (ATG-T)</p>	<p>Q12. 集団の社会的側面に対する集団の一体感 (GI-S)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生は大丈夫か、秋シーズンも春と同じような気持ちで過ごしていなか心が心配でした。
<p>Q13. 集団の課題的側面に対する集団の一体感 (GI-T)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・春に負けかけたK高校に秋の本番で快勝したことは自信に繋がったし、チームとしてもモチベーションが上がったと思います。春の結果から危機感を持たせたことが良かったと思います。 ・8月の夏合宿の後は特に下の（チームの）メンバーもチームが勝つことを大事に練習に取り組んでいきたいと思います。 ・BチームはAIに上がる。AIに勝つことがモチベーションだったと思います。BCはチームが勝つことを大事にしながら自分の練習も一生懸命やってくれていたと思います。 ・普段なかなか誉めてくれない先生（監督）が誉めてくれると、凄いモチベーションが上がるし自信もつきます。ちなみに秋以降は全然誉められなかったですね。春の後半は結構誉められたのに。チームとしては8月のK高校戦が誉められました。

インタビュー調査導入時におけるCの逐語録

<p>Q1. 20XX年シーズンを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新チームが始まった直後は調子が良かったです。新人戦は優勝まで失点がなかったし、とにかくスタートが良くて負ける気がしなかったです。 ・ 春の後半とか夏は負けることがあったんですけど、秋の頃には結構自信がありました。勝ち上がることが一番自信になりました。徐々にチームの気持ちが一つになっていったと思います。
<p>Q2. チームおよび個人の目標、チーム内における自分の立場や役割を振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1年前の全国大会でスクラムで負けたのが悔しくて、スクラムは負けないようにしようと思ってました。 ・ チーム目標は前年度（全国大会ベスト4）を越えるだったんですけど、正直なところ去年ほどのチームではないと思っていました。まずH高校に勝って全国大会に出たいと思っていました。 ・ 個人的には気ままに自分のことを一生懸命頑張った感じがです。
<p>Q3. チーム全体のパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オーストラリア遠征ぐらいから、新しいメンバーがAチームに入ってきてチームが変わり始めた気がします。 ・ 夏合宿中にH高校（後の全国大会予選の決勝戦で対戦するチーム）の試合結果を聞いたりして焦ったりしましたね。 ・ キャプテンはチーム目標とは関係なく、自分のチームという感じで頑張っていました。副キャプテンは最後の方になってテンパって悩んでいたんじゃないかと思います。あと、8月のK高校との定期戦では気合いが入っていた印象です。
<p>Q4. 個人的なパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個人的にはダメでした。色々工夫はしたけど、先生（監督）が欲しい選手ではなかったですね、応えなかったです。 ・ チーム目標への意識は持ち続けてましたけど、少し薄れました。正直に言うとうと、まずは自分が試合に出たいと思ってましたね。

集会的効力感に関するCの逐語録

Collective Efficacy Questionnaire for Sports	
05. 持続性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 思い出そうとしても怒られていたことしか思い出せないです。何も持續出来ていなかったから怒られていたのかもしれないです。
06. 準備	<ul style="list-style-type: none"> ・ (秋の全国大会予選の) 準決勝の前日の練習でミスがあって、先生(監督)にすごく怒られて何度も同じトレーニングを繰り返しましたけど、それが不安の解消になって、翌日の良い結果に繋がったと思います。 ・ 準備は良かったと思います。特に秋の全国大会予選の後半はゲームアップが良くなっていました。声が出ていて、みんなの気合いが伝わっていました。うるさく感じるぐらいで。
07. まとまり	<ul style="list-style-type: none"> ・ まとまりはあったと思います。ただ、去年の経験(全国大会ベスト4)があったせいで、全体的にゆとりがありすぎた感じがしますが、今思えば。 ・ 下のチームは監督からの直接の指導とかミーティングが減っていくけど、3年生とかは見てもらいたいと思っていたと思います。同じチームにいてもスケジュールが違ふとまとまりは向上しにくいし、お互いに気を使います。けど、自分たちはまとまっていたと思います。どのカテゴリも3年生が頑張っていたのが大きいです。特に秋シーズンになってくると3年生だけのミーティングが増えました。ただ、内容によっては全てまとまりに繋がるかは分らないですね。
08. 努力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的にみんな真面目だし、サボる人はいないと思います。
09. 能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ スクラムハーフとフルバック(ポジションの名称)の存在が大きかったです。あと、K君の存在もですね。ハックス(ポジションのユニットの名称)が外でトライを取る場面が多くなったんで。 ・ 全国大会の予選の頃には練習で準備をしてきた形で得点を取ることが多くなってきて、狙い通りのプレーが出来る回数が増えてました。

集団凝集性に関するCの逐語録

Group Environment Questionnaire	
Q10. 集団の社会的側面に対する個人的魅力 (ATG-S)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 秋の全国大会予選ではレギュラメンバーのケガでチャンスが回ってきて、すごくやる気になってました。
Q11. 集団の課題的側面に対する個人的魅力 (ATG-T)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高い目標設定は賛成だったんですけど、正直なところ他府県のチームに負けることが多くて大丈夫なのかな、とは感じていました。
Q12. 集団の社会的側面に対する集団の一体感 (GI-S)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 監督への不満が出てました。特に上のチームが多かった気がします。それはAチームの選手は直接、先生（監督）の指導を受ける機会が多いからだと思います。逆にBチームにいた自分は相手にされないのかなという思いがありました。
Q13. 集団の課題的側面に対する集団の一体感 (GI-T)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 春はゲームメイクに迷いがあってもいいですけど、最後はスタイルが確立されて、チームとしての戦術も浸透していたと思います。 ・ 秋の全国大会予選が始まる頃には強制的にチーム全体に頑張らないとやばい、という雰囲気が出てきていました。

インタビュー調査導入時におけるDの逐語録

<p>Q1. 20XX年シーズンを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ こんなに負けてたのかあと思いました。それが第一印象です。 	<p>Q2. チームおよび個人の目標、チーム内における自分の立場や役割を振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ラグビーするのは最後の年だと思っていたので、この1年で出し切ろうと思っていました。家に帰ってからとか、早朝のランニングを続けようと思つて、本当に1年間続けられました。 ・ 3年生なんですけど、個人的には人を怒ったりするのが苦手なので周りの人のメンタルを回復させる役割が出来たらと考えていました。怒られている人の肩をチョンチョン叩いて叩いてあげてあげような、ボチボチ達成出来たと思います。
<p>Q3. チーム全体のパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オーストラリア遠征と夏合宿でアタックはどんどん良くなりました。攻め方が明確になってきたからかな。それはハーフ団（ポジションのユニットの名称）がフィットしてきたからそう感じました。 ・ オーストラリア遠征で1年が3年にメッチャ怒られていて、あまり関係は良くなかったですね。 ・ 秋以降はAチームとOチームで少し距離があった気がします。モチベーションの差かもしれないです。Aチーム主体のスケジュールが多かったからかもですね。 	<p>Q4. 個人的なパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域ブロック大会後のメンバーに入り始めた時は調子が良かったんですけど、5月の大会では周りの調子が上がってきたのに乗り遅れた気がして、少し落ち込んでいました。その後ケガをしたけど、復帰した後の5月の都道府県大会後半ですぐにA復帰をさせてもらえたことが嬉しかったです。覚えてます。 ・ 秋の全国大会予選では少しパフォーマンスが落ちた、置きにいった感じ。 ・ オーストラリア遠征で凄く1年生と仲良くなって距離が近づいて、その1年生に良い所を見せたくて頑張りました。で、それと同時に自分の音を思い出して、初心って感じでやれました。

集会的効力感に関するDの逐語録

Collective Efficacy Questionnaire for Sports	
Q5. 持続性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特にこれというのは思いつかないですね、すいません。
Q6. 準備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 準決勝前や決勝前も先生（監督）が凄く怒ってくれて、引き締まったことが良い準備だったかなと思います。
Q7. まとまり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 結構、チームはまとまっていたと思います。多分ですけど。 ・ 全国大会予選が始まってから何回か3年生だけでミーティングをしました。そこでコー子から3年生が変わることの必要性を聞かされて、更にまとまっていたと思います。 ・ ミーティングのきっかけは先生に言われたからというのものもあるけど、自分たちで集まっていたことも多かったです。3年生のミーティングチームは3年生が変わること、下級生と共通の意識を持つということが多かったんです。3年生全体が頑張っていたと思います。
Q8. 努力	<ul style="list-style-type: none"> ・ タイヤ引きと綱昇りを全員で続けたのは自信に繋がりました。
Q9. 能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夏以降は練習とミーティングを続けてきたおかげで、ハーフ団（ポジションのユニットの名称）とか、リーダーと他の選手が考えていることがフィットすることが多くなってきて、チームとしての攻撃の精度が高まってきたなと感じてました。

集団凝集性に関するDの逐語録

Group Environment Questionnaire	
Q10. 集団の社会的側面に対する個人的魅力 (ATG-S)	<ul style="list-style-type: none"> ・ お互いに厳しく言い合っている時とか、ミスに厳しい時はイヤになりました。秋の全国大会予選後半では少し厳しすぎるかなと思っていました。メンバー間で厳しくするのは苦手ではないです。
Q11. 集団の課題的側面に対する個人的魅力 (ATG-T)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年中、目標に対しての意識は強く持っていました。特に春先と秋の後半以降は強く思っていました。
Q12. 集団の社会的側面に対する集団の一体感 (GI-S)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 下のチームにとっては、上 (のチーム) や主力との練習は精度もやる気も上がると思います。
Q13. 集団の課題的側面に対する集団の一体感 (GI-T)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新人戦と全国大会予選中は全チーム (A, B, Cチーム) が意識して取り組んでいたと思います。けど、途中は緩んだかもしれないです。秋の本番前は3年生が今までにないぐらい必死になり始めて、それが下の学年に伝わっていったと思います。どのグレードにいる3年生も必死でした。

インタビュー調査導入時におけるEの逐語録

<p>Q1. 20XX年シーズンを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個人的にはオーストラリア遠征が印象深いです。相手チームのメンバーの兼ね合いで自分がAチームの敵として試合に出たんです。 ・ 全国大会予選の決勝も印象深いです。新人戦の時は28点差もつけて勝って、（全国大会予選の）決勝でも3トライ先制したの到最后はあわや逆転負けというところまでいったからです。
<p>Q2. チームおよび個人の目標、チーム内における自分の立場や役割を振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個人的な目標はメンバー入りだったんですけど、日経っていくとメンバーも固定されていくので諦めはしなかったけど、今年も厳しいかと思いました。特にその後は次の目標に切り替えたりすることはなかったですね。
<p>Q3. チーム全体のパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 夏以降は2年生の中で週2,3回の朝練日を決めていました。0君（1年生からレギュラーの同級生）がリーダーとなって決めていました。今思うと、朝練に行って3年生との交流が増えたことは良かったと思います。
<p>Q4. 個人的なパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分と同じ0チームにいた3年生には自分たちを引っ張ってってくれるということとか、リーダーらしさを感じることは少なくて、ABチームにいる先輩には感じていました。

集会的効力感に関するEの逐語録

Collective Efficacy Questionnaire for Sports	
05. 持続性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 筋トレとかタイヤ引きとか、綱昇りとかはずっと続けてました。でも、メンバー間でバラツキはあったかもしれないです。
06. 準備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 秋とかは練習中だけじゃなくて、練習前から引き締まった雰囲気になっていました。
07. まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・ チームはまとまっていたと思います。けど、理由は分からないです。勝っていくごとに気持ちが一つになっていった感覚はありました。今年も花園（全国大会）に行けるぞっていう感覚で。 ・ B0チームがAチームを応援するのは勝ちたいというか、負けたくないからですね。多分、自分が出てなくてもチームとしての試合だから、それは当然だと思います。
08. 努力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多分、ほとんどの人が努力をしていたと思います。あまり特別なことだとは思ってないと思います。
09. 能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全国大会予選前の練習試合で0君が半年ぶりにケガから復帰したことはチームの自信になりました。 ・ チームとして大事にしていることなので、試合の時のディフェンスとかタックルの内容が自信に直結します。

集団凝集性に関するEの逐語録

Group Environment Questionnaire	
Q10. 集団の社会的側面に対する個人的魅力 (ATG-S)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3年生は頑張っってまよめようとしてくれましたけど、自分と同じ0チームにいた先輩はちょっとなあと思いました。チームのレベルによってバラバラな感じがあったかもしないです。 ・ チームがバラバラになりそうになったかもしないですけど、3年生が頑張っってまよめてくれたと思います。
Q11. 集団の課題的側面に対する個人的魅力 (ATG-T)	<ul style="list-style-type: none"> ・ シーズンが進んで、試合メンバーがチーム目標を意識するのは当たり前だと思っですけど、自分も結構、意識出来ていたと思っます。多分、他のメンバー外も同じように考えていたと思っます。 ・ 下のチーム (0チーム) がグラウンドの隅っこで、ABチームがグラウンドを広く使っって試合形式の練習という状況でも練習の負荷には差がないと思っているので、モチベーションが下がっることはなかつたです。羨ましさはありますけど、ただ、試合形式の練習をしたらやっぱりモチベーションは上がっると思っます。
Q12. 集団の社会的側面に対する集団の一体感 (GI-S)	<ul style="list-style-type: none"> ・ Aチームは試合が控えているのでミーティングとかがあっって当たり前だっけど、やっぱり同じチームなのにBCチームが別々の練習とかスケジュールだったりするのは、なんか違っなあと思っます。 ・ 9月ぐらゐから部員全員で食堂に集まっって昼ご飯を食べるようになったんで、会話が增えようになっただけで、学年とかかチームに関係なく交流が增えて、チームのまとまりは良くなっっていたと思っます。けど、それを練習中に感じることは少なかつたです。
Q13. 集団の課題的側面に対する集団の一体感 (GI-T)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全国大会の予選が近づいてきた頃から、どのグレードの3年生も必死に練習をしていて、それがチーム全体に伝わっていた感じがありました。 ・ 練習の質だけを考えるとBCチームの方がグラウンドを広く使えたりと良い面もありますけど、チームのバランスを考えると一緒にいる時間は多い方が良いと思っます。

インタビュー調査導入時におけるFの逐語録

<p>01. 20XX年シーズンを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新人戦でH高校に優勝して優勝して、今年も花園（全国大会）に出て勝てると思ってました。けど、春の練習試合では負けが続いたり、5月の都道府県大会では同点優勝で終わってしまったりして、甘くないんだなあと感じました。全国大会でも同点のまま、抽選負けしたし、簡単ではないなあと思いました。 ・ オーストラリア遠征でファーストジャージを着れたのはめっちゃ嬉しかったですね。 	<p>02. チームおよび個人の目標、チーム内における自分の立場や役割を振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個人的な目標はメンバー入りでした。同じポジションの先輩には、正直勝てるとは思ってなかったのですがレギュラーは無理でもベンチには入りたかったです。 ・ 下の学年に混ざって遊びに行ったり、下級生との仲は良かったので他の同級生よりかは下級生への声の掛け方や接し方は分かっているつもりでしたし、練習中も馴れ合いとかではなく、先輩との良い距離感を作れることを心掛けてました。 	<p>03. チーム全体のパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ チームの目標は気に入っていて、新人戦後は“いけるぞ”と思っていただけ、練習試合で負け続けて目標達成の難しさに気がきました。 ・ オーストラリア遠征では1年生が結構問題で、その時は2年も少しバラバラだったと思います。チームのまとまりを感じ出したのは秋の全国大会予選が始まってからでしたね。 ・ AチームとBチームのバックス（ポジションのユニットの名称）はギクシャクしている時期があったと思います。それが解消されて、まとまり始めたのは全国大会予選の頃だったと思います。 ・ 秋の全国大会予選の頃からAチームに入りたいたいと思いつつも、Aチームに勝ってもらいたいたいとも思っていました。 	<p>04. 個人的なパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新人戦の時は自分はBチームで、周りの同級生がAチーム入りしていて焦りました。 ・ 同じBチームにいる先輩たちは上手い人多くて、自分はBチームですら、いさせてもらっているという感じでした。 ・ 全国大会の予選の後から全国大会までの間にケガ人が多く出たからチャンスだと思っていただけ、自分はAチームには入れなかったですね。ほぼBチームにいたんですけど、自分は常に前向きに頑張りました。
--	---	--	---

集会的効力感に関するFの逐語録

Collective Efficacy Questionnaire for Sports	
Q5. 持続性	<ul style="list-style-type: none"> グラウンド内と外の切り替えは年間通して意識出来ていたと思います。学校とか日常生活の過ごし方はチームとして大事にしていたし、みんな意識していたと思います。
Q6. 準備	<ul style="list-style-type: none"> チームごとでスケジュールがずれることが多かったのですが、集まれる時こそ全員での声かけとか一体感を大事に練習出来ました。練習前にキャプテンからもそのようなことを多く言われていたと思います。
Q7. まとまり	<ul style="list-style-type: none"> 秋の全国大会予選の頃にはかなりまとまり始めていて、準決勝頃には完全に一つになっていました。それまではAチームを第三者的に見て、まあ勝てるやろうかと思いがながら試合を見ていたけど、それ以降はAチームを自分たちの代表だと意識したり、自分たちも一緒に試合をしていると考え始めていました。自分以外にも思いの人が多かったと思います。 Aチームと下のチームでスケジュールや練習メニューが違ふことは自分にとってはモチベーションの向上に繋がっていましたが、Aがない時こそ、Aよりも練習しようと思えました。けど、チームのまとまりという意味ではマイナスだったかもしれないですね。
Q8. 努力	<ul style="list-style-type: none"> 努力はしていたつもりだったんですけど、まだ周りに遠慮していたかもしれないです。
Q9. 能力	<ul style="list-style-type: none"> 夏合宿の終わりの方のD高校戦の接戦をものにしたのは大きかったと思います。秋に向けての自信になったと思います。

集団凝集性に関するFの逐語録

<p>Group Environment Questionnaire</p>	<p>Q10. 集団の社会的側面に対する個人的魅力 (ATG-S)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 試合形式の練習ではAチームの同じポジションの先輩に結構やられたんですけど、その人たちがよくアドバイスをくれていたので嬉しかったし、良いチームだなと感じました。逆に同じチームの先輩から厳しく言われることが多かったです。けど、自分にとっては厳しく言われてプレッシャーを感じるものがよかったですし、上達に繋がったと感じています。 <p>Q11. 集団の課題的側面に対する個人的魅力 (ATG-T)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 試合メンバーは直接、先生（監督）から指導されることが多かったんですけど、自分は少なかったので相手にされていないのかなと思うことがたまにありました。 ・ 自分たちが全国大会に出るとか、勝ちたいという思いより、H高校（秋の全国大会予選の決勝戦の対戦チーム）に負けたくないという思いの方が強かったですね。 <p>Q12. 集団の社会的側面に対する集団の一体感 (GI-S)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1年生があまり良くなかったんですけど、ミーティングを重ねてマシになって、3年生がラグビーに集中出来るようになりました。それが秋の全国大会予選が始まる頃だったと思います。 ・ オーストラリア遠征ではめっちゃKコーチにすごかれて、悪い印象しかなかったです。けど、夏合宿の最後に一人一人にメッセージを送ってくれて、それが1年生が変わり始めた最初のきっかけだったと思います。 <p>Q13. 集団の課題的側面に対する集団の一体感 (GI-T)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aチームは確実に意思統一されていたけど、下のチームはバラツキがあったかもしれないですね、分からないですけど。
--	--

インタビュー調査導入時におけるGの逐語録

<p>Q1. 20XX年シーズンを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 全国大会に出れたわりには負けが多いな、という印象です。 ・ 秋の全国大会予選頃の練習後の部室の雰囲気覚えています。特に先輩たちが明るくて良い感じだったので決勝でも勝てると思っていました。 ・ 準決勝の頃には負ける気がしなかつたです。優勝という目標が見えてきて現実的になっていたし、勢いがついていました。
<p>Q2. チームおよび個人の目標、チーム内における自分の立場や役割を振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個人的には身体を強くして、少しでも上の試合に出れるようにしたいと思っていました。
<p>Q3. チーム全体のパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 夏合宿までは3年生と喋る機会も少なかったんですけど、それ以降はチームでの時間が長くなって自然と交流とかも増えていきました。特にID:Bさん（同じポジションの副キャプテン）に話しかけてもらえることが多く嬉しかったですね。
<p>Q4. 個人的なパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オーストラリア遠征でBチームに上がったんですけど、夏合宿ではCに戻りました。首を痛めたということもあって、コーチからはケガが恐いと言われてずっとCでした。

集会的効力感に関するGの逐語録

Collective Efficacy Questionnaire for Sports	
05. 持続性	<ul style="list-style-type: none"> ・ キャプテンとかリーダー陣が常に明るく振る舞ってて、それにみんなが引っ張ってもらってました。
06. 準備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今考えると、先生（監督）とかコーチだけじゃなくて、リーダーもチームを引き締めてくれていました。
07. まとまり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各チームのスケジュールが多かったんですけど、屋食会などがあったから大丈夫でした。 ・ 全体的にチームはまとまっていたと思います。雰囲気良かったです。コミュニケーションが理由だと思います。 ・ 各チームのスケジュールが違っていても屋食会などがあったから大丈夫でした。
08. 努力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別なことではなくて、みんな普通にやっていたと思います。
09. 能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ オーストラリア遠征では体格差もあり、しょうがないとは思っていたけど、夏合宿中盤での負荷は心配でした。

集団凝集性に関するGの逐語録

Group Environment Questionnaire	
Q10. 集団の社会的側面に対する個人的魅力 (ATG-S)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 練習中は自分のことで精一杯で分からなかったんですけど、練習中とか学校生活では3年生からも話しかけてもらえることが多くて、仲の良さという意味ではまとまりがあったと思います。
Q11. 集団の課題的側面に対する個人的魅力 (ATG-T)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夏までは自分のことに精一杯で、チーム目標を意識出来たのは9月頃からだっただけだと思います。
Q12. 集団の社会的側面に対する集団の一体感 (GI-S)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夏合宿を過ぎてからはABCチームごとのチーム内の学年間の距離はあまりなかったけど、各チーム間の距離はまだあったと思いますね。合わない日とかも結構あったんで。
Q13. 集団の課題的側面に対する集団の一体感 (GI-T)	<ul style="list-style-type: none"> ・ グラウンドの中でも外でも結構まとまりがあって、そういうのを見ると色んなことで意識が統一出来てるのかなと感じていました。

インタビュー調査導入時におけるHの逐語録

<p>01. 20XX年シーズンを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5月の大会に帯同させてもらってAチームのことに集中していましたが、夏合宿では自分はBチームだったのでAチームのことはあまり知らなかったです。そんな余裕はなかったと思います。
<p>02. チームおよび個人の目標、チーム内における自分の立場や役割を振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個人目標はベンチ入りでした。今思えば、漠然としてたなと思います。
<p>03. チーム全体のパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 秋の全国大会の予選に近づいていて、ABチームとCチームで別々の練習という形が増えてきていたので、Cチームは少し離れた存在だったかもしれないです。まとまりがなくなっただけではないんですけど、Bチームは上にあがるという目標を持ちやすく、ABチームのまとまりは良くなっていったけど、Cチームはそれについていけていなかったかもしれないです。
<p>04. 個人的なパフォーマンスや課題、人間関係などを振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 同じBチームにいた3年生のEさん（違うポジションの先輩）からの声かけが支えになってました。ミスした時も最初に励ましてくれました。 ・ 同じBチームにいてる3年生は全般的に優しくしてくれて、自分を励ましてくれていたと思います。同級生よりも先輩との関係が印象深いです、よく覚えてます。

集会的効力感に関するHの逐語録

Collective Efficacy Questionnaire for Sports	
Q5. 持続性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的なことがあまり思い浮かばないですね。
Q6. 準備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 練習前の全体でのランニングは良いまとまりに繋がったと思います。ランニング中もラグビー以外の話しはしないようにみんな決めていて、そういうのは練習とか週末に向けての良い準備になっていたと思います。 ・ どの試合前でも先生（監督）が怒ってくれて、それ自体がチームの良い準備になっていたと思います。
Q7. まとまり	<ul style="list-style-type: none"> ・ お兄ちゃんやH高校（秋の全国大会予選の決勝戦の対戦チーム）なんで、色々話しは聞いていて、H高校は個々の強さがあるけど自分たちのチームのまとまりの方が上だと思っていたので、勝てると思っていました。 ・ シーズンの最後の方にはまとまっていたと思います。Aチームは試合があるから当たり前だと思いましたが、BCチームもまとまってくる理由は自分でも分からないです。
Q8. 努力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 0さん（2年生、同じポジションのAチームの中心選手）に呼ばれて朝練に行ってたんですけど、3年生が多かったです。やっぱり自分はまだ甘いな、と感じました。 ・ 朝練での先輩たちの個人練習への取り組みを見て凄いなと感じました。
Q9. 能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が先生（監督）の隣でAチームの試合を見ている時に先生が口ずさんでいる通りの展開でトライを取ったことがあって、そういうことがあるとチームの成長を感じました。いい感じやな、みたいだな。

集団凝集性に関するHの逐語録

Group Environment Questionnaire	
<p>Q10. 集団の社会的側面に対する個人的魅力 (ATG-S)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 3年生には優しい人が多くて、支えてもらっていた感じが強いです。 ・ 自分自身としては中学部上がりということもあって、私生活でも上級生によく声をかけてもらっていました。 ・ 試合メンバーと同じ時間にグラウンドにいないことがちよくあつて、チームとして距離感を感じることはありませんでした。 	
<p>Q11. 集団の課題的側面に対する個人的魅力 (ATG-T)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ その時その時の状況に精一杯で、正直年間の目標とかはあまり意識出来ていなかったと思います。 	
<p>Q12. 集団の社会的側面に対する集団の一体感 (GI-S)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Cチームの立場からすると、AとかBチームと同じ時間にグラウンドにいないと、分けられていいると感じますね、正直、そういうのは距離感を感じます。 ・ チーム全体でいうと、もっと上級生と下級生の交流が多くてもいいかなと思います。学校生活とか私生活も含めて。 	
<p>Q13. 集団の課題的側面に対する集団の一体感 (GI-T)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 夏合宿の後ぐらいから、3年生が声を掛けていいるのを見ることが多くなって、チームの意識統一が出来ている感覚がありました。 ・ 多分、Cチームの中でAチームと同じ目標を持ってた人は少なかつたと思います。 	

謝辞

博士論文を執筆するにあたり、多くの方々からご指導・ご協力を賜りました。

指導教員である土屋裕睦先生には、博士前期過程から長きにわたり、ご指導頂きました。心より感謝申し上げます。土屋先生は、未熟な私に対していつも温かく大きな心で向かい合っていて下さり、研究者としてだけでなく、指導者としても私の道標となって下さいました。土屋先生から学んだことを胸に刻み、実践と研究を往還できる指導者を目指します。

副査の富山浩三先生と藤本淳也先生からも多くのご指導を賜りました。先生方から貴重な示唆を頂けたことで、博士論文の完成に至りました。心より御礼申し上げます。

竹中優子先生と中川裕美先生（東北福祉大学）は、いつも細部にわたってご丁寧にご指導下さいました。お二人からご支援を頂けたことはとても心強かったです。感謝致します。

土屋ゼミの皆様にも大変お世話になりました。特にゼミの時間や研究会では私のために多くの時間を割いて下さいました。皆様の温かいお言葉がけ、お心遣いがなければ今日まで至ることができなかったです。ありがとうございました。

本務校である九州共立大学の先生方からも多くのご支援を賜りました。八板昭仁先生には研究の奥深さ、面白さを教えて頂きました。八板先生との毎週のお時間が私の研究に向かう活力となりました。篠原純司先生（中京大学）と栗谷健礼先生（愛知淑徳大学）からは英訳や分析など、幾度となくご指導頂きました。また、西山侑汰先生と名頭菌亮太先生には、論文の添削や発表練習など、多くの時間を割いて頂きました。心より感謝申し上げます。

研究データの収集にあたっては、多くのチーム関係者ならびに選手のご理解とご協力を賜りました。皆様のご協力のおかげで、本研究を進めることができました。ありがとうございました。

最後に、妻の陽子と娘の咲季、息子の剛進にも感謝の意を表します。どんなに大変な時も妻の理解と惜しみない協力、そして子供達の笑顔のおかげで前に進むことができました。最愛の家族に心からの感謝の言葉を送り、私の謝辞と致します。